

一般県道竜舞山前停車場線事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

矢部遺跡・新島遺跡

2006

群馬県太田土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

研究室保管

一般県道竜舞山前停車場線事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

矢部遺跡・新島遺跡

2006

群馬県太田土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

矢部遺跡・新島遺跡は、太田市只上町に所在し、一般県道竜舞山前停車場線緊急地方道路整備事業に伴い群馬県土木部（現土木整備局）の委託を受け、群馬県教育委員会の調整のもと平成15年12月から平成16年3月と平成16年8月から10月までの2回に分け、発掘調査が行われました。

調査した場所は、一級河川矢場川の右岸にあります。矢場川は渡良瀬川の旧流路の一つでもあり、時代によっては、対岸は下野国でもあったようです。そのため遺跡地は国境の地にあります。竜舞山前停車場線も現在の栃木県足利市山前地区と群馬県竜舞地区との二県を結ぶ重要な県道でもあり、近年近接地で古代の東山道駅路の発見などとも合せ、過去と現在が結合した感じがします。

調査の結果、両遺跡の長さ450mの間は、洪水の歴史と云っても過言ではないほど、6世紀から9世紀頃まで畑や住居が埋没し、水との戦いであったようです。中でも6世紀後半の新島遺跡3区3住居跡は、住居跡の周囲に周堤帯しゅうていおびという雨水等に対処すべく設けられた小さな土盛りが見つかっています。本県では火山灰直下の埋没住居跡で周堤帯は見られませんが、そのほかでは類例の少ない貴重な発見といえます。

調査に続き平成16年度には、整理作業を実施し、ここに報告書の刊行となりました。

遺跡の発掘調査から本報告書の刊行に至るまで、太田土木事務所、群馬県教育委員会、太田市教育委員会をはじめとする諸機関ならびに地元の皆様にご多大なご尽力を賜りました。ここに心から感謝申し上げますとともに、本報告書や調査資料が広く歴史の研究に活用されることを念願し序といたします。

平成18年1月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 高橋 勇 夫

例言と凡例

1. 本書は一般県（一）道竜舞山前停車場線緊急地方道路整備事業に伴う事前の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 事業では矢部遺跡・新島遺跡・只上深町遺跡の3遺跡であったが、発掘調査の結果、只上深町遺跡で遺構の発見はなく、成果は調査地平面図1枚のみであったので本書では第3図に調査範囲のみを示めし内容から除外した。
3. 遺跡は太田市只上町1265番地、1301番地ほかにあり、遺跡名は小字名である。
4. 発掘調査事業
事業主体 群馬県土木部
調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査期間および調査担当者
平成15年度（矢部遺跡・新島遺跡）
調査期間 平成15年12月1日～平成16年3月31日
調査担当者 坂口一、深澤慶一
平成16年度（新島遺跡）
調査期間 平成16年8月1日～同年10月31日
調査担当者 斉藤利子、黒澤照弘、田村 博
5. 整理体別は以下のとおりである。
整理期間 平成16年7月1日～同年12月31日
整理担当と編集 大江正行
整理補助員 小沢トモ子・関口正広・土井洋子・長岡美知子・堀米弘美
保存処理 関邦一・土橋まり子・小村浩一
6. 発掘調査・整理にあたっては下記の方々に協力をいただいた。
太田市土木事務所・太田市教育委員会・地元の皆様
7. 矢部遺跡・新島遺跡の出土品・記録保存図・写真類・遺物実測図・各種台帳は一括して財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に保存されている。
8. 本書の凡例は次のとおりである。
 - (1) 遺構方位は国土座標第Ⅸ系中の座標北を用い、磁北は「桐生及足利」地理院1：50,000平成8年修正図によれば西偏約7°10'。
 - (2) 平面座標値は、各平面図単位に国土座標第Ⅸ系の値を記入し、日本測地系、世界測地系などは抄録中にある。
 - (3) 縮少率は、遺構図は、1：160、1：80、1：60、1：30を基本に、必ず縮尺を添え、長大な断面の場合、必ず大縮尺に合せた断面も併図した。土器類は1：3を基本とし、変則は図傍に示めた。
 - (4) 遺物出土地と遺物取上げ番号は現場注記と遺物台帳記入の現地番号を尊重し、そのまま本書でも用いた。
 - (5) トーンは、図傍にその意味を示した。
 - (6) そのほかの凡例・例言は各篇か章の冒頭で触れた。
9. 本書の校正は、当団木津博明と整理班、当団榑沼弘之の協力があつた。

目 次

第1篇 経過と調査実施	1
第2篇 調査方法・基本層位・	
周辺遺跡	1
第1章 調査方法	1
第2章 基本層位	1
第3章 周辺遺跡	3
第3篇 発掘調査遺構と遺物	4
第1章 矢部遺跡の遺構と遺物	4
1. 1区	4
2面 1住居跡	4
2面 1畑跡	5
2面 2畑跡	5
2面 3畑跡	5
2面 1溝跡	6
2面 2溝跡	6
2面 3溝跡	6
2面 石組遺構	7
3面 2住居跡	7
3面 3住居跡	8
2. 2区	8
3面 1住居跡	8
3面 1畑跡	9
3面 1溝跡	9
3. 3区	9
2面 1溝	9
4. 4区	10
2面 1住居跡	10
5. 5区	10
6. 6区	10
2面 1溝跡	10
3面 1住居跡	11
7. 7区	11
3面 1溝跡	11
3面 2溝跡	11
3面 3溝跡	12
8. 8区	12
9. 9区	12
3面 1住居跡	12
10. 10区	12
第2章 新島遺跡の遺構と遺物	13
1. 1区	13
2面 1畑跡	13
2面 2畑跡	13
2面 1溝跡	14
2面 2溝跡	14
3面 1住居跡	14
2. 2区	15
1面畑跡	15
2面畑跡	16
3面畑跡	16
3. 3区	16
1面 1井戸跡	17
1面 2井戸跡	17
1面 3溝跡	17
1面 4溝跡	17
1面 1土坑	17
1面 2土坑	18
1面 3土坑	18
1面 4土坑	18
2面畑跡	18
3面畑跡	18
3面水田跡	19
3面水田下畑跡	19
3面 5溝跡	20
3面 1竪穴遺構	20
3面 2竪穴遺構	20
3面 5土坑	21
3面 6土坑	21
3面 7土坑	21
3面 8土坑	21

4面畑跡	21
4面白色砂の分布	22
5面 2住居跡	22
5面 3住居跡	22
5面畑跡	22
5面 10土坑	23
6面畑跡	23
6面ピット群	23
6面 9土坑	23
7面畑跡	23
7面ピット群	23
8面	24
そのほかの遺物	24

図版 矢部遺跡

第2図 路線図	25・26
第3図 地形図と調査区図	27・28
第4図 調査面図	29・30
第5図 1区全体図	31
第6図 1区標準土層と遺構図	32
第7図 1区2面遺構図	33
第8図 1区2面遺構図	34
第9図 1区2・3面遺構図	35
第10図 1区3面3住居跡遺構図	36
第11図 2区全体図と同3面遺構図	37
第12図 2区3面遺構図	38
第13図 3区全体図、同区2面、同 区4面遺構図	39
第14図 5区・6区全体、6区2面 遺構図	40
第15図 6区遺構、7区全体、7区 遺構図	41
第16図 7区遺構、8・9・10全体、 9区遺構図	42

図版 新島遺跡

第17図 1区1～3面全体図と標準 土層	43
第18図 1区2面1・2溝遺構図	44
第19図 1区2・3面遺構図	45

第20図 2区全体と1～3面遺構図	46
第21図 2区1～3面断面図	47
第22図 3区1・2面全体図	48
第23図 3区3・4面全体図	49
第24図 3区5・6面全体図	50
第25図 3区7・8面全体図	51
第26図 3区1面4溝遺構図	52
第27図 3区1面遺構図	53
第28図 3区1・2面遺構図	54
第29図 3区3面遺構図	55
第30図 3区3面水田遺構図	56
第31図 3区3面遺構図	57
第32図 3区3面5溝遺構図	58
第33図 3区3面5溝遺構図	59
第34図 3区3面遺構図	60
第35図 3区4面遺構図	61
第36図 3区5面畑断面図	62
第37図 3区5面2住居遺構図	63
第38図 3区5面2住居遺構図	64
第39図 3区5面2住居遺構図	65
第40図 3区5面遺構図	67
第41図 3区6面畑遺構図	68
第42図 3区6面畑断面図	69
第43図 3区7面遺構図	70
第44図 3区7面遺構図	71
第45図 3区各トレンチ土層断面図	72
第46図 3区各トレンチ土層断面図	73
第47図 3区南壁土層断面図	74
第48図 3区北壁土層断面図	76

遺物 矢部遺跡

第49図 1区1住居遺物図	77
第50図 1区2住居遺物図	78
第51図 1区1住居・2住居・石組 遺物図	79
第52図 1区土器埋没・2溝・3溝・ 表層・2区1住居・1畝間・ 1溝遺物図	80
第53図 3区3面、4区1住居・4区	

表層他遺物図	81
第54図 6区1住居・1溝、7区3溝、 9区1住居遺物図	82
遺物 新島遺跡	
第55図 1区1住居・1溝、2区1面・ 2面・3面遺物図	83
第56図 3区2住居・3住居遺物図	84
第57図 3区2堅穴・水田・1井・ 2井・3溝・4溝遺物図	85
第58図 3区5溝・旧河道・6土坑・ 8土坑・10土坑遺物図	86
第59図 3区2面・3面・4面・5面・ 6面・7面・8面遺物図	87
第60図 3区表土遺物図	88
第61図 3区表土遺物図	89
第62図 2面遺物図	90
第63図 2面・周辺住居関連遺物図	91
第4篇 遺物観察	92
第1章 観察にあたり	92
第2章 遺物観察表	93
矢部遺跡	93
新島遺跡	95
第5篇 自然科学分析	99
第1章 群馬県、矢部遺跡の土層とテフラ およびプラント・オパール分析	99
第2章 群馬県、新島遺跡におけるブラン ト・オパール分析	106
第6篇 考察	109
第1章 矢部遺跡1区3号溝の洪水層に ついて	109
第2章 矢部遺跡・新島遺跡における堅 穴住居の変遷について	111
第3章 土地利用の変遷—新島遺跡3区 を中心として	115
写真図版 遺構	
矢部1区	写真図版3
矢部1区	写真図版4
矢部1区	写真図版5

矢部1区	写真図版6
矢部1区	写真図版7
矢部1区	写真図版8
矢部2区	写真図版9
矢部2区	写真図版10
矢部3区・4区	写真図版11
矢部4区・5区	写真図版12
矢部6区	写真図版13
矢部6区・7区	写真図版14
矢部7区・8区	写真図版15
矢部8区・9区	写真図版16
矢部9区・10区	写真図版17
新島1区	写真図版18
新島1区	写真図版19
新島1区	写真図版20
新島2区	写真図版21
新島2区	写真図版22
新島3区	写真図版23
新島3区	写真図版24
新島3区	写真図版25
新島3区1・2・3面	写真図版26
新島3区3面	写真図版27
新島3区3・4・5面	写真図版28
新島3区5・6・7面	写真図版29
新島3区7・8面	写真図版30
新島3区	写真図版31
新島3区	写真図版32
新島3区	写真図版33
新島3区	写真図版34
新島3区	写真図版35
新島3区	写真図版36
新島3区	写真図版37
遺物	
矢部遺跡遺物	写真図版38~40
新島遺跡遺物	写真図版41~44

第1篇 経過と調査実施

矢部遺跡と新島遺跡は、一般県道竜舞山前停車場線緊急地方道路整備事業に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査で、太田土木事務所からの委託を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が、平成15・16年の2年度に分け調査を実施した。

平成15年度は12月1日から翌16年3月31日までの間に行ない、矢部遺跡は表面積2841㎡を1～10区に分け、1～3面を延べ8523㎡を実施した。矢部遺跡は調査区の全長が250mの範囲にあり、その中を道路・水路により分断されるため10区画に分割して調査を実施した。当該年度で調査は全て終了した。新島遺跡は表面積569㎡を1区として1～3面を延べ1707㎡を実施した。同遺跡の以東については次年度に計画された。その以東にある只上深町地内においても遺跡の存在が予測され只上深町遺跡と仮称されていたが290㎡を調査したが遺構・遺物の一切を発見することができなかった。遺構数は、矢部遺跡で住居跡7、溝跡9、畑跡4カ所、河道1であった。新島遺跡では、住居跡1、溝跡2、畑跡2カ所であった。

平成16年度は、新島遺跡の前年度終了地区を除く2～3区にある3100㎡、延べ10500㎡について実施した。調査面は2区を4面、3区を8面に分け調査を行なった。その結果、遺構数は、2区で畑跡3、3区で住居跡2、竪穴状遺構2、井戸跡2、土坑8、ピット13、溝跡4、水田跡1、畑跡6、河道1を調査した。

第2篇 調査方法・基本層位・周辺遺跡

第1章 調査方法

調査方法は、測図について国土座標第Ⅱ系を用いること、水準に標高値を用いること、平面調査上の新・古の重さなりを明らかにするとともにその所見を尊重することなど、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の方法を踏襲した。座標は5m毎を目安とし、X軸を先に、Y軸を後にm単位で用いることとした。呼称点は座標数値の増減のため南東隅である。調査上の区称は、道路や水路などで区分された第2図に示したとおりで、矢部遺跡は1～10区、新島遺跡は1～3区である。調査記録は、両遺跡併せ白黒写真を6×7cm判で47本分撮影し、35mm判で66本、35mm判カラー・リバーサルで1660カット状景の撮影を行なった。空中写真は新島遺跡の3区3面と6面の都合2回の撮影を行なった。実測は、土層断面を1:20で、平面は、手実測による平板と、業者の電子平板との併用によって行ない、住居跡は1:20、小遺構を1:20、水田跡・畑跡・溝跡を1:40として用いた。図面数量は矢部遺跡63、新島遺跡116枚である。以上、記録保存資料は(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

第2章 基本層位

基本層位は、標式地点を定めて基準土層とするのが一般的と考えられるが、矢部遺跡東端の5区から新島遺跡西端まで約450mの長さがあり、しかも遺跡地の北側を東流する矢場川から用水路をへておよんだ洪水堆積層が複雑に堆積し、一率的ではない。さらに火山帯である群馬県は有史後も浅間山C軽石(As-C、4

世紀)、同B軽石(As-B、史料上天仁元年(1108)・考古学上12世紀初頭)、同A軽石(As-A、天明3年(1783))、標名山二ツ丘FA軽石(Hr-FA、6世紀初頭前後)、同FP軽石(Hr-FP、6世紀中頃)など火山起源の火山灰、軽石は県下東域に堆積し、発掘調査時の重要な層順検討素材となり、それらと洪水堆積層との組合せも複雑さを一層増加させている。そのため本書では、各調査区で基準・標準たる土層を図版中の区別冒頭で示した。その際、ローマ数字は標準土層・基準土層を示めし、算用数字は土層注記の通常性を表す意味で用いた。平成15年度調査時に矢部遺跡・新島遺跡で模式的に扱われた土層は第6図左上の第1深堀トレンチ土層と比較に第19図中段の2畑のB断面V~Ⅸを用い補足を兼ねて説明された。その内容は、面調査を基本に、第1面はⅣ層(As-B粒含む灰白色砂質土か黒褐色土)下面とし、第2面はⅧ層(As-C粒、Fr-FAに伴う白色軽石粒を含む黒褐色土)上面、第3面はⅪ層(灰黄褐色土)上面である。この面的層順に関し、遺跡調査の状況説明は次のとおりで、坂口・深沢担当によると調査は矢部遺跡1面から開始したが、地続きである新島遺跡についても前記3面で行なったが、調査区の北側を東流する矢場川の低地について3面目(Ⅺ層上面)の調査時にⅧ層下面で旧地表面としての畑を断面上で確認(第19図中段2畑B断面参照)した。矢部遺跡1区ではこのⅧ層の上・下層を平面的に調査したが、その際に遺構を確認することができなかったこと、この時点で同層を新しい年代の洪水砂ではないかと解釈していたこと、さらに同層は2区以南の地区には認められなかったことの3点の理由からⅧ層を遺跡全体の調査面には加えなかった。新島遺跡の重機掘削は1区の西側の現掘道際から始めたが、その際の畑の畝を検出できず、さらに先のⅧ層下で畑跡を断面で確認した1・2区境付近では、すぐ西側に大きな攪乱(第17図)があり、遺構の存在・認識するのが難しい状況にあった。以上のことから、このⅧ層の洪水砂の年代であるが、これは層位的にHr-FA以降、As-B以前である。一方矢部遺跡ではⅧ層の洪水砂が二次的に堆積した9世紀中葉の住居である1区2面1住居跡を検出したことから、このⅧ層は9世紀中葉以前に比定でき、弘仁九年(818)年の地震(内田憲治『資料集 赤城山麓の歴史地震』(新里村教育委員会)1991)に伴う洪水砂の可能性があるとも考えられる。またその洪水砂は新島遺跡と矢部遺跡1区のみが存在し、矢場川の低地に向けて層厚になることから、おそらくその供給源は旧矢場川と考えられ、川沿いの方に堆積していると考えられる。次年の調査は前出3面の調査面のほかに、Ⅷ層の上・下面を調査面として加える必要と同層の年代と起源を特定することの必要性がある。

それを受け、平成16年度を受継いだ斎藤・黒沢・田村担当は残された遺跡地である新島遺跡2・3区のうち、3区において1面を中・近世、2面を洪水層下面、3面を洪水層下面、4面を畑痕跡面、5面を洪水層下面、6面をAs-C・Hr-FA混り層の上面、7面をAs-C・Hr-FA混り層の下面、8面を有機質層が炭化し黒色したと考えられる黒色土層下面を各々捉えて調査が行なわれた。平成15・16年度との整合は、平成15年の第1面は、平成16年度のおおむね第1面の1層上層に相当し、15年度の第2面は、16年度のの6面に相当し、15年度の第3面は16年度の8面に相当している。なお第6~48図までの土層番号に用いたローマ数字は、区別単位で、ほぼ共通する。

新島遺跡3区における8面は、調査区南壁と北壁土層断面(第47・48図)に統一が計られているので下記に北壁断面第48図を用いて補足説明したい。

- 第1面は、注記Iの下面を目安とし、注記Gの3下面でもある。
- 第2面は、注記Ⅳの下面、Vの上面を目安とする。
- 第3面は、注記Vの下面、Ⅵの上面を目安とする。
- 第4面は、注記Ⅵの下面、Ⅷの上面、注記Hの9・12上面でもある。

第5面は、注記Ⅵ・Ⅶの下面、Ⅸ・Ⅹの上面を目安とする。

第6面は、注記GのおおむねⅥ・Ⅶの下面、であるがⅦは5面と部分的に重なる。一方、Ⅹの上面でもある第5面とも部分的に重なる。注記Hの場合は、Ⅸの下面、部分的にⅦの下面と重なる。

第7面は、注記G・HのおおむねⅩの下面、Ⅺの上面である。

南壁断面の第47図については、注記Ⅲ・Ⅴの層境が第3面水田の層境となり、注記A域の2が耕土と考えられる層である。注記B域ではⅦとⅧとの層境が第5面である。また第3・4面の層境は、Ⅴ・Ⅵでもあるが第47図の場合は、注記A域のⅤとⅦの間、注記B域でもⅤとⅦの間、注記C域は14と15の間、注記D域では21と22の間、注記E域では3と4の間でもある。

なお北・南壁断面では、注記者による認識差が少しあるようであるが、洪水層の除去は、粘性土と砂質土のような差があれば明瞭であるが、砂質土相互では調査上、困難を伴うことを、ことわっておきたい。

第3章 周辺遺跡

矢部遺跡・新島遺跡・只上深町遺跡は渡良瀬川扇状地上に立地する。渡良瀬川扇状地は、第三紀の金山丘陵・八王子丘陵と足尾山地との間に、桐生市付近を扇頂部として太田市の東部から足利市間に形成された扇状地である。遺跡周辺の扇状地形には旧渡良瀬川の旧河道痕や、沖積低地が網状に発達し、その間に近世来の主体集落が低台地上に存在している。遺跡地は、旧河道の一端でもある矢場川と沖積低地に挟まれた低台地上にある。



第1図 周辺遺跡 太田市文化財地図 1991
地理院 1:25,000 足利市部・北部より

太田市只上町は、近世、上野国山田郡七尾山村であった。古地名を研究した古田東伍の野書によれば、古くは只上地内を東流する旧渡良瀬川の名残の矢場川の東縁は下野国、足利郡、粟田郡に属し、矢場川が国境いとなったようである。

近年、当団が実施した北関東自動車道の遺跡調査はかて推定東山道に係わる遺構が見えられ、古代駅路の浮上からこの周辺地域での奈良時代前後の実像復元の要素が大きく加わることとなった。西接地域は、太田金山を含む広大な地域を擁する新田郡が存在している。金山の東西には、この地域の生産基盤たる長大な谷尻平野をもたらせた渡良瀬川の水系により大開々扇状地形が形成され、金山の東南に太田天神山古墳(200m級前方後円墳、中期)、南西に朝子塚古墳(前方後円墳、前期)、西方に二ツ山古墳(前方後円墳2基、6世紀)、天武明跡寺井楽寺、北側の八王子丘陵南端に駒神社埴輪窯跡(6世紀)、萩原瓦窯跡(寺井楽寺所用瓦、7世紀後半)、北東側に太田金山土器群のうち古墳時代窯跡群(6世紀後半～7世紀初頭)が並列を成わせ、やや後出の塚山古墳(古墳、7世紀前半)などが存在し、古墳時代に大きく展開した地域と認められる。その展開は奈良時代に至っても上野国分寺瓦遺を含む埴輪窯跡群、天長七堂(新田郡街)を始めとする礎石建物の多さ、唐三彩の出土など古代上野国中でも稀立った地域である。旧版群馬県史をまとめた堀田隆左は東北経営や藤原広嗣の乱(740)で功を成した大野家人の称号に係わる地にあてていながら今日まで新田・山田郡に係わる古代氏族の古史史脈は弱い。

只上の地に関連するのは、太田金山の北東側に展開した古墳時代窯跡群である。倉田芳郎・坂詰秀一は、関東地方に同時代須恵器産地は皆無と云われた1960年代に6世紀の須恵器産地を初調査し、後に大渡良瀬川の発掘調査により、産地展開期に相当する時期の産地須恵器、鏡台、土師器写しの須恵器などを認め、河津遺跡と周辺を含む低台地上に工人集落を指定した(第1図)。その低台地を1つ越えた位置に、矢部遺跡・新島遺跡は存在しているが、出土遺物中の須恵器は絶て同産地群製品か云々と、そうでもなく古代の焼物流通は複雑で、今後周辺遺跡整理で序々に明らかとなるであろう。なお矢部遺跡・新島遺跡地は、現矢場川右岸側にあり。

第3篇 発掘調査遺構と遺物

矢部遺跡・新島遺跡について、矢部遺跡は、現県道竜舞・山前停車場線に沿う長さ約250mにおよぶため調査区を10区画に分けて平成15年度に実施した。新島遺跡は1～3区に分け、1区を平成15年度に2・3区を16年度に調査実施した。

第1章 矢部遺跡の遺構と遺物

矢部遺跡の遺構は次のとおりである。

- 1区 2面 1住居跡、1畑跡・2畑跡・3畑跡、1溝跡・2溝跡・3溝跡、石組遺構
3面 2住居跡・3住居跡
- 2区 3面 1住居跡、1畑跡、1溝跡、土器埋設
- 3区 1面 1溝
- 4区 2面 1住居跡
- 5区 1～3面遺構なし
- 6区 2面 溝跡1
3面 1住居跡
- 7区 3面 1溝跡・2溝跡・3溝跡
- 8区 1～3面遺構なし
- 9区 3面 1住居跡
- 10区 1～3面遺構なし

以上のとおりで、次にその内容に触れたい。

1. 1区 (第5図)

1区は矢部遺跡の東端にあり、遺構密度の最も高い調査区であり、全体的に北西下りの地勾配にある。遺構量は住居跡3棟、畑跡3、溝跡3条、石組遺構1である。この他に深堀トレンチを2カ所に設けた。

1住居跡 (第6・49図、写真図版4・38)

1区の中央付近にあり、発見面および調査面は2面で、標高約48.8m付近にある。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺492cm、短辺328cm、深さ23cmを、方向は中軸でN54°30'Wを測る。構築面と床面とは、わずかの貼床を思わせる土層を除くと同一面で、第6図土層断面A、注記1において貼床層なしである。施設として東壁に竈跡があり、南東隅に床面より28cm掘り下げられた長辺103cm、幅35cmの壁に沿う形で細長い貯蔵穴が見られる。竈跡は第6図下右半側に図示したとおり、床面より約20cmほど掘り下げた堀方面が存在する。同図の平面図内破線が掘方下端をあらわす。土層断面注記3・4間の太い実線は、カマド底面である。遺物は床面上は少なく、竈内もそう多くなく、貯蔵穴内とその付近に多い傾向にある。遺物類は第49図のとおりで現場取上げNo1～8があり、9世紀中頃の個体を主にしている。土師器台付甕を思わせるが台部を失なう同図1が竈底から、同図3の土師器甕は床面から、須恵器坏の同図4・5が埋土下方から、同図6の須

患器軸端状の個体も床面、同図7も床面である。同図6は7面体で中心に未完通の小穴、下小口に糸切らしき痕跡があり紡垂車を思わせるが、周縁に磨耗・使用痕は微弱であり、軸物の別用途を思わせる。同図は鉄鎌で、旧時に欠損があるものの右端部に整形痕があり、一旦破損した後に再利用したと考えられる。

2面 1 畑跡 (第7図、写真図版6)

1区の西端に位置し、調査面は標高48.9m付近である。13条前後の小溝からなるが、走行方向差により最小限で5単位以上の複合状態が考えられる。上州地域では畑の畝間をサクと呼び、以降に用いたい。1つ目の1群は、A断面が横切るN26°Wの方向性があり、その一群は南北の最大を図左端で捉えれば584cmを計る。この単位は、サクの尻側を認めることができ図左端より2条目、4条目、6条目がそれぞれである。以南に長く延びる3・5条目は別単位とも考えられる。図下方にN35°Wを測る288cmを単位の両尻を有するサクが1条と北側尻の一致する200cm北側も同一方向性にあり別単位と考えられる。さらに東側で1溝と接するN23°Wを指向する2条も相互が近接し過ぎるので別々の時期と考えられる。東西走行N72°Eの方向の330cm隔てて2条がある。溝の深さは調査面から8cm以下の深さである。調査面は標準土層Ⅵ層下のHr-FAに伴う軽石を含む層下である。出土遺物については取上げ番号付の個体はない。

2面 2 畑跡 (第7図、写真図版6)

1区の中央やや西寄りにあり、調査面は標高49.1~49.0mで、標準上層Ⅵ層下のHr-FAに伴う軽石を含む層下である。平面の単位は第7図右上のように各方向を指向する最少限8単位以上の、特に南西隅では重複状態にある。北東の一群は北東隅にあり、図右端の一条に両尻を認め、長さ338cm、N63°Eの方向を測る。その南に長さ120cmの、N74°Eを指向する1条があり、その南側に長さ265cmの、N46°Eを指向する1条があり、その南側に南東壁面に接近する長さ401cm、N59°Eを指向する1条が、同様の方向性では南西隅側に近い壁面から2m前後離れた長さ583cm、N57°Eを指向する1条が、さらにその北側に最長で782cm、N5°30'Eを指向し溝跡尻側の揃う2条の単位の小溝跡がある。西偏する一群は、前述の2条1単位の一群から南東側に溝跡両尻の揃う2条もしくは450cm南西隔てた一条が関連するか不明のN19°Wの方向性の一群があり、南東隅で長さ367cmを測る方向性N14°Wを測り、北西側の溝跡尻の揃う2条がある。さらに南西隅の442+αcm、N18°Wを指向する2条の小溝が未調査地にかかるように存在する。成断面はA断面があり、調査面から10cm未満の深さである。遺物の番号付取上げ個体はない。

2面 3 畑跡 (第7図、図版7)

1区の東端に存在する8条を単位とする一群で、調査面は地勾配が北東下りのため、1畑跡・2畑跡よりも低く、標高48.5~48.0m付近である。3畑跡は少数溝であっても独立の畑1面単位を考えるうえで重要であり、時期を違えてなのかは不明であるが少なくとも3単位が存在する。第7図中右寄り4条は、方向性が近似のN56°Eを指向するが左から2条目の南側溝尻が他の3条とも異なるもののサク間隔は揃っているのと同じ単位の畑か2つの畑が重なった場合の可能性がある。左から2条目は545cmを測る。図下方左寄りに短い160cm、N63°Eを測る小溝を含む2条の単位がある。図左寄りには438cmを測り、N56°Eを測る溝跡を含む2条がある。小溝跡の深さについて成りの断面Aがあり、最大で、調査面から12cmの深さがある。以上のとおり、3単位以上の存在を、3面以上とも言い替えることもできるのではないだろうか。出土遺物は、番号付きで取り上げられた個体はない。なお2面のプラント・オパール分析結果として畑跡から2試料の分

第3篇 発掘調査遺構と遺物

析を行なったがイネは検出されなかった。

2面 1溝 (第8図、写真図版7)

1溝は1区の東寄りにあり、調査面は標高48.8m付近で、第8図の土層断面A付近では、発見面はⅤ層上面で標高49.08mである。調査面は西側が高いようである。溝跡の平面は直線的で断面形はU字状を呈し、底面は波状2単位となり注記5と3・4間には食い違いが見られ、掘直しが行なわれたようである。掘直しは平面形態上は不明瞭である。規模については784cmを、注5の最大幅で75cm、注3の上面で92cmを測る。方向はN52°Wを指向する。埋土は砂質土を主とし、底面は等高線も北西下り勾配を示し、東壁下で48.391m、西壁下で48.352の標高値があり、4cmほど西側が低く、調査面とでは逆走勾配傾向がある。出土遺物は番号取上げの個体はない。なお注記文中のサンプルとは、火山噴出物同定用である。

2面 2溝 (第8・52図、写真図版8・39)

2溝は1区の中央やや左寄りにあり、調査面はⅤ層上面、標高48.5m付近である。調査面は西側がやや高い傾向にある。発見面は土層断面AによればⅤ層上面で調査面と一致している。平面形態は直線的でA断面付近で250cm、東側で158cmを、方向はN48°Wを指向する。断面形は底の平ら気味の逆台形を呈するが、A断面中に示した2本の太い実線や、土層注記6・8間も形状に片寄りがあり掘直しが行なわれている。その際、注記5と6間の成り形状は逆台形状の形となり、掘方形状を踏襲し、土層注記4・2間でも、ややその傾向がある。この逆台形状が踏襲される意味は、溝側面の護岸などの必要性からであろう。底面勾配は、東壁下で標高47.876m、西壁下で47.945mであり、底面の等高線48.0mの形状どおり、西壁から150cm付近で西と東に向い下る。埋土は注記6に礫を含む記述があり、相当量の水量があった時期もあったようである。注記文中のサンプルとは火山噴出物同定用である。出土遺物は、取上げ番号の個体はなく、まとめ上げ個体中に第52図1・2があり、1は7世紀初頭頃の土師器坏片、2は6世紀前半代を思わせる土師器高坏片である。

2面 3溝 (第8・52図、写真図版8・39)

3溝は1区の東寄りにあり、調査面は土層断面A付近でⅤ層上面付近、標高49.08mである。平面形状は290cm前後で、長さ13.5m間、幅をほとんど変えることなく遺跡地内を直線的に通過する。横断面形は土層断面Aによれば、太い実線のほか注記6・7間などでも掘直しを行ったと考えることができるが、幅広の注10などの堆積からすれば流路としての影響も受けて丸底気味のU字状を呈し、注3・4などが堆積する掘直し時も、注に流路痕とあるが丸底形態は継続していたようである。流水の形跡は注記3・4・10に礫石を含む内容が見られ、時期的にも幅の広さがあり、相当量の水量であったようである。底勾配は、西壁下で標高48.041m、その東で48.002m、中程で48.060m、その東で48.076m、その東で48.095m、東壁下で48.061mと流路としての影響を受けてか場所により数cmの差が認められる。おおむね西下りの勾配のようである。出土遺物は取上げ番号のある個体はなく、まとめ上げによる第52図1～3がある。同図1は、9世紀後半頃の土師器甍片で、同図2は9世紀前半頃の須恵器碗、同図3は8世紀代の内面黒色化の碗があり、時期的に幅の広さがあり、同図1は最も新しい時期の個体を示し、機能時の下限もある程度示唆される。

この3溝と1区2面中、他の2条の溝跡とも直線的で、ほぼ同じ方向性をもって並走することは、構築時期差は多少あったにせよ共通の目的に沿う構築行為であったとも考えられ、3溝の水量の多さを考えた時、地域としての広がりとは不明ながら主要灌漑用の水路であったのではないだろうか。

2面 石組遺構 (第9・51図 写真図版5・39)

石組遺構は、1溝と1畑との間の1溝跡が発見された。南北に向け20~30cmの河原石と準大の石とをやや曲った状態で、南寄りに2個体の土器も並んだような状態にあった。それに關し、第51図1は、3/4個体でありながら覆土の取り上げ個体であるので、重複そのほかの理由で取り上げられたらしい。しかし、同図2・3は破片不足があり、特に3は、上半・下半との接合ができなかった。さらに割れ口は少なからず消耗の場所があり、外面側は3個体とも凍と考えられるハゼ剥落が生じていた。同図3は下半の方が剥落量が多かった。そのことは1季節か1年以上であったのかは不明ながら雨晒し状態に置かれていた時期があり、住居跡の上方が流出したり、失なわれて、石や土器のみが残存したとは考え難い。そのためこれらの土器類と石類は何らかの目的をもって納置され、石と土器との配列は意味を有した行為と考えたい。出土遺物は6世紀代であり、時期性とすれば、次面の第3面が本来の納置面であった可能性が持たれる。なお周辺の調査面高は標高48.91~48.95m付近であり、土器基底部は48.75mあるもの石他の間に跨るしく高低差があるため、掘り窪めもあったようである。次面との関係は3面3住居跡の北西隅部が接近しているため標高数値をそこから求めれば、標高およそ48.35mの差しかないことからすれば、40cm高いことになるが、標準土層で2・3面差はⅡ層土面からⅠ層下面まで25~30cmで土器基底部の方が40cm以上高い基壇を有しての存在ならば、標高値から求めた遺構存在高との矛盾が軽減されることになり、基壇の存在を考えておきたい。

3面 2住居跡 (第9・50・51図 写真図版4・38)

2面では2・3住居跡の2棟が調査された。2住居跡は1区の中央付近の北西寄り、西壁に接して存在する。調査面は標高48.45~48.33mの間で、発見面はⅡ下面とⅠ上面との間と考えられるが、第9図断面Aのとおり、周壁最上部にⅡ層に喰い込むよう現場図に記入があるので、Ⅱ層中に発見面の本来位置があることかもしれない。住居形態は基本的には隅丸方形と考えられるが、西半は未調査地であり、北東隅部は角張る2段の平面となる。規模は西壁で322cm、東西は220+a cm、方向は西壁でN48°Eを測る。壁高は80cm程である。施設として東壁に竈跡があり、貯蔵穴位置は明瞭でない。掘方の壁下に周溝らしき凹みがある。竈跡は北壁に取り付くが壁外60cmにある煙出し穴まで掘抜き煙道が確認されている。煙出し穴の径は平面図で17.5cm、土層断面で20cmである。袖部は、掘方線の記入がないので地山造り出しのようであり、周壁から65~80cmの長さがある。竈幅は73cm、燃焼部下端で34cmを測る。竈図注記中の補注に須恵器高盤とは第50図9のことであり。出土遺物は、現場での取上げ番号42まであり、床面高は標高47.945~47.900mである。第50・51図中取上げ番号を用いた個体と取上標高値は次のとおりであるNo1は47.94(床)、No5は47.935(床)、No6は47.945(床)、No7は47.950(粗土最下部)、No9は47.925(床)、No10は47.920(床)、No11は47.900(床)、No12は47.930(床)、No23は47.940(床)、No25は47.910(床)、No26は(床)、No27は47.910(床)、No29は47.925(床)、No30は47.930(床)である。竈跡は、燃焼部底で47.90m、最奥部で48.0mである。以下竈内出土遺物である。No32は47.995(底)、No33は47.985(底)、No35は48.010(埋)、No36は47.995(底)、No38は47.990(底)、No40は47.950(底)、No41は48.00(底)である。()内は筆者の推定である。遺物は床面出土が多く、おそらくは廃棄時の状況とある程度とどめているようである。遺物類は7世紀前半の個体で土師器杯・瓶・甕、須恵器杯、脚付盤、甍片などがある。特に問題になりそうな個体に第50図8が、産量期ではない頃の製品でありながら、生焼けの不良品である。同図9もそのきらいがあり、太田古窯跡群に近接のためそうした状況が生ずるのだろうか。工人集落としては西方の水田地帯1つと低台地1つへのあたりがあり、距離的にも2kmの隔りがある。また第50図4は、木葉痕が残され、製作工人の系譜を示唆する資料で

第3篇 発掘調査遺構と遺物

あり、第50図9の脚付盤は、外面に平行印が、おそらく内面には見えないが当目を伴う締めのための連打行為が製作過程で行なわれたと考えることができ、生焼けとは云え丁寧な製作である。轆轤回転も右を主に左回転も用いている。

3面 3住居跡 (第10・51図、図版5・39)

位置は1区の南壁に近接し、中央やや西に片寄って存在している。調査面は、Ⅱ層下で標高48.35~48.20mである。Ⅱ層下であることは第10図土層断面Aの最上層にそれが見えるが、埋没最上層がⅡ層であるのでⅡ層自体が、発見面位置に相当するかは明確でない。形状は北東辺と北西辺が剛張り気味となる方形で、規模は、南北389cm、東西349cm、壁高は掘方下面から67cm、方向は長中軸でN47°30'Eを測る。施設として南西壁に竈跡が、床面から掘方下かけ6ヶ所浅い柱穴が認められる。貯蔵穴は見えない。竈跡は全長で117cm、幅約90cmを測るが、横断面に煙道にある煙出しは残存していない。燃焼部内には右側に片寄って支脚とされた石材が直立してのこされていた。袖材は注5の粘質土である。床面高は標高47.86~47.74mで、柱穴は断面Bにかかる2穴を除き、西隅で標高47.575m、北隅で47.48、東隅で47.49、南隅で47.50mを測る。南北柱間は西側1間分の芯で290cm、短辺側2間分は北東壁下で、西側より160+150cmである。柱穴で最も深いのは棟持と考えられる竈石隅の1穴と、北東壁中央の1穴であり、住居平面中軸と同じように南北棟を有す妻切様の小屋であったのであろう。床面下には10cm前後の粘土下に掘方があり、断面によれば、若干の凹凸がある。出土遺物は、番号付取上げとして、No1~6までがあるものの、取上げ認定を行っていないので編者判断を加え、取上げ高を記すと、No1は標高47.79m(床)、No2は47.995(堀土下方)、No6は47.515(床)である。遺物は第51図に示したように1~3があり、1の底面に木葉痕があり製作工人の系譜の一端が示される。2は口径が12cm弱あり、6世紀終末頃の個体に見え、3もその頃盛行していた短頸の甕である。旧時の使用状態は、全体に消耗少ない。

2. 2区 (第11図)

2区は、1区に東接の長さ51m、幅8~9.5mの細長い調査区である。調査は1面と深掘トレンチ4ヶ所である。調査された遺構に住居跡1、畑跡1、溝跡1がある。

3面 1住居跡 (第11・52図、写真図版9・39)

位置は調査区の北西寄りにあり、一部が調査地外となる。調査面は標高46.94~46.98mで、東側が数cm高い傾向がある。平面形態は南北に長い隅丸長方形を呈するが北壁がやや短い傾向に見受けられる。規模は、東壁側で395cm、南壁側で262cm、深さは発見面が床層もしくはそれ以下のため、掘方最下位まで9cm内外、方向はN13°30'Wを測る。施設として東壁に竈が取り付け、南東隅部に貯蔵穴がある。竈跡は、上面を失っているため痕跡のような状態で長さ83cm、幅58cmを測り、左側に、使用材と見られる焼けた石材がある。内部から取上げNo1~9がある。貯蔵穴は、長径62cm、底面標高46.66mで内部は段差がある。図中の床面的調査面は標高46.835~46.950mである。出土遺物は取上げ番号でNo1~16までであり、取上げ認定を欠くため編者が増えると、遺物掲載は第52図に1・2を示した。それはNo1・2・3・13である。No1は標高46.90m(床)、No2は標高46.95m(床)、No3は標高46.97m(堀土下方)、No13は46.975(堀土下方)である。時期は、7世紀代と考えられる。

3面 1畑 (第12・52図、写真図版9・39)

1畑は調査区のほぼ中央にあり、東側は未調査地区に入る。調査面は標高47.00～46.91mである。調査された小溝は4条で、いずれもサク跡と考えられ、西端と北東端と南西端が捉えられる。北と南の溝尻は浅く立ち上る。横断面はAのとおり、U字状を呈する。規模は最長の西から2条目で、1744cm、溝跡4本の幅は590cm、方向は西から2条目でN44°Eを測る。各溝幅は8～12cmで、同類の中では幅の狭さがあり、埋土は第12図A断面注1のようにAs-C・FA粒をまじえるため埋土は標準土層のⅦ・Ⅷに相当するであろう。出土遺物注記は2区畝間と注記された一群の個体が1畑に関連し、第52図に1～3を掲げた。そのうち同図2のみが時期性を示し、9世紀代の土師器薄作りの甕片である。現場でのNo付取上げは3点があり、各面から2条目の溝から出土している。溝底は標高46.94前後である。No1は標高46.955m(埋下)、No2は46.945(ほぼ底面)、No3は46.940(ほぼ底面)である。

3面 1溝 (第12・52、写真図版10・40)

1溝は調査区の西寄りにあり、調査面は標高46.91～46.875mである。発見面は第12図A断面のとおりⅧ層の1層上である注記5層からと現場時点での破線推定がなされている。平面形は少し蛇行気味であり、横断面形はA断面のとおり、丸みのあるV字状を呈する。規模は、幅280cm、深さ95cm、方向は南北壁下中点でN35°Eを測る。調査面地勢は南東側が高く、北面側に低まる傾向があり、底面勾配は北壁で標高46.23m、中ほどで46.20・46.23m、南壁下で46.12mであるが、底面には流水ほかの理由による凹凸があり、不明瞭さを増すが、およその推測では南下りのようである。埋土その他の状況を第12図A断面で見ると右側に掘直しもしくは流路変更によると考えられる新部が見られ、両者ともに浅いV字状の断面を呈している。流水の形跡は土層断面注4・5・6・7・18に礫を含む記述があり、注12に荒砂が入る。新期の注17以下の底面は流水のためか凹凸が顕著である。出土遺物は現場での番号取上げの個体はなく、埋土にまとも上げの個体があり、第52図1～4を示した。遺物注記にフク土とは覆土であり、遺構外を覆う土層のことではなく、おむね埋没土を指していることが多い。同図1は8世紀頃の土師器坏、2は7世紀頃の須恵器平甕片、4は須恵器不明器種、3は7世紀代の東毛地域外からの搬入品で球形の長頸甕である。この中で埋没を示唆する最も新しい個体は同図1であり、遺構機能時はその頃だろうか。

3. 3区 (第13・53図、写真図版40)

3区は、東に2区が、西に4区があり挟まれた位置である。調査地区は長さ47.5cm、幅7～8mの細長い調査区である。遺構は溝が1条あり、調査されている。出土遺物は少なく、第53図に地内取上げとして増輪らしき個体を1点掲げた。

2面 1溝 (第13図、写真図版11)

1溝は、3区の北東際付近に存在する。調査面は標高47.40～47.45mである。発見面は1溝の埋土にAs-Bを含むとあるのでⅢ・Ⅳ層付近と考えられる。平面形は、少し蛇行気味ではあるが直線的である。横断面は浅いU字状を呈している。規模は長さ815cmを調査し、幅は最大で85cm、深さ9cm、方向はN76°Wを測る。調査地勢勾配は、西側がわずか高い傾向がある。底面は、西壁下付近の底は一段下りとなり、その中で標高は47.329m、中ほどで47.36m、東壁下で47.35mで、47.35mの等高線位置が示すことから東下りとなっている。出土遺物は現場での番号上げ、埋土のまとも上げの個体もない。構築時期は、埋土中にAs-Bを

むことから、天明三年のAs-A前代から、As-B降下の12世紀初頭までの間の時期に限定される。

4. 4区 (第13図)

4区は、3区の西隣りにあり、長さ53cm、幅9.3~8.2mの調査区である。調査した遺構は住居跡1棟である。調査面は標高47.10m付近で、標準Ⅱ層下のようにある。

2面 1住居跡 (第13・53図、写真図版11・40)

1住居跡は、調査区をやや西寄り、大半が未調査地にかかる。調査面は標高47.01~47.07m付近で、発見面は標準Ⅱ層下である。平面形は南東隅部1ヵ所のみでは何んとも言いがたいが南壁がやや影らむ傾向がある。規模は南壁で184+a cm、東壁で234+a cmを、深さは、掘方面から28cm、方向は東壁でN11°Wを測る。施設として東壁に電跡が取り付け、調査した範囲で貯蔵穴は見えない。床面と掘方とは5 cm以上の客土がなされ、掘方の凹凸は顕著である。電跡は、壁外に大きく張出す特徴があり、長さ125cm、幅100cm弱で袖の出は少ない。第13図は、一部掘方も加えての図のようである。燃焼部中央に支脚が残存し、その付近に石材や土器が濃い分布で残存している。袖芯には石材が残される。出土遺物は現場取上げ番号でNo 1~5までがあり、共伴認定されていないので編者の推測を加えると、床面標高は、標高46.810~46.885mとした時、No 1は46.950m(埋土下方)、No 2は46.855m(床)、No 3は46.860m(床)、No 4は46.146.860(床)、No 3は46.865(床)である。遺物は第53図に掲げたように1~8がある。いずれも9世紀中頃の土器類である。甕類は被熱の形跡は弱く、接合時に破片不足が目立っていた。

5. 5区 (第14図・写真図版12)

5区は矢部遺跡調査地の東端にあり、全長23.7m、幅6.8~8.8mの調査区である。調査は1、2面を除いたが遺構・遺物の発見はなかった。そのほか西壁に沿って深堀トレンチを掘り下げ、土層堆積の観察を行った。その結果、土地改良以前の河道が確認され、それに先だつ前代も断面幅であるので実際の幅は不明であるが5mの自然河道やそれを上回る幅が予測される洪水層らしき堆積、流れに伴う礫、トレンチ最下面の累々とした円礫の存在など、この場所が古くから河川地か河川際であったことが証された。

6. 6区 (第14図、写真図版13)

6区は、現果道山前線の約15mを隔てた2区の北側に存在する。6区は東側と西側があり、東側は長さ21m、幅2mのトレンチとして、西側は長さ15.8m、幅2.8mの範囲を調査区とした。東側と西側は、5.5mの間がある。調査の結果、東側の調査区から住居跡1、西側の調査区から溝跡1条を発見した。

2面 1溝 (第14・54図、写真図版13・40図)

位置は6区西側の調査区にあり、調査面は2面で、Ⅱ層上面から掘り込まれている。調査面標高は46.52~46.61mである。平面形は直線的と見受けられる。横断面形は基底部が底の平らなV字状、掘直しか、流路変更したその後の、A断面土層注2・3・4などを含む溝形態は浅いU字状となっている。規模は幅455cm、深さ128cm、方向は中軸でN35°30'Wを測る。底勾配は調査面積の少ない方から割出すことは危険であるが調査数値からすると、南壁下で標高46.36m、中程で46.36m、北壁下で45.34mとの記入があり、北側が低い数値である。出土遺物は、現場での番号付遺物はなく、埋土中の個体のまとめ上げである。第54図1~4

に示したとおり、最も新しい個体は同図4と考えられ、消耗も少ないので、この溝の構築時期が、多少なりとも示唆される。

3面 1住居跡 (第15・54図、写真図版13・40)

1住居跡は、6区東側調査区の中ほどに調査地外に大半が延びる形で一部のみ発見された。調査面は標高46.99～47.03mであり、発見面は南壁AによるとⅤ層下、Ⅵ層中に現場記入の破線がありⅥ層中が発見面のようである。平面形は一部であるため明確ではないが北西隅部は隅丸形状となる。規模は北壁で $240+a$ cm、西壁で $175+a$ cm、壁高は70cm、方向は北壁で $N67^{\circ}30'E$ を測る。施設としては床面と堀方底面とは第15図の断面注8の貼床層の指摘どおり、貼床の客土は層厚ではない。東壁断面(A断面)の南側壁下では、わずかながら、壁下溝らしき凹みが掘方上で存在する。床面は、標高46.715～46.68mの間である。床面上には炭化物粒と小木炭片が極度的に濃淡をもって分布していた。出土遺物は、番号付の現場取り上げはNo1の1点のみで他は、少量のまとめ上げがある。No1は標高46.635mで床の範囲内である。遺物図は、第82図のとおり、1～4がある。同図注記のフク土は、埋土の意味である。1～3は9世紀代と考えられる土器片で、4は刀子である。

7. 7区 (第15図)

7区は、6区の西側にあり、西側と東側の調査区に分かれる。東側は14mの長さで、幅2.8～3.2m、西側は6.8mの長さで幅2.8mの調査区で発掘を行なった。東側の調査区の第3面において1・2・3溝を発見した。

3面 1溝 (第15・16図、写真図版14)

1溝は7区東側の調査区の南西側に発見され同規模の2溝と約2m隔てて発見された。調査面は標高46.92～46.95mで、発見面は西壁の第15図A断面によればX層上面で標高47.12m付近である。溝の平面は直線的であり、横断面は丸底で浅いU字状を呈する。規模は、3.5mを調査し、幅62cm、深さは掘込み面から28cm、方向性は底面の中軸で $N39^{\circ}W$ を測る。底勾配は西壁下で標高46.73m、中ほどで46.77m、東壁下で46.79mとあり西下りとなっている。流水の形跡は断面Aの注1に1～3cm径の礫を含むとあるものの洪水のような1過的な状況下で生じたか、継続的な中で生じたものが判断は付かない。出土遺物はNo1があるものの時期性に弱い。土層注記と掘込み面からすればX層上面とⅤ層下面間の時期となる。

3面 2溝 (第15・16図、写真図版15)

2溝は7区の中央よりやや西寄りに発見され、さらに西側にある1溝と並走している。調査面は標高46.86～46.93mで南側がやや高い調査地勾配にある。発見面高は、第16図の土層断面Aによれば、Ⅵ層の大、Ⅶ層上面である。溝の規模は長さ330cmを調査し、幅87cm、深さ42cm、底中軸の方向 $N35^{\circ}30'W$ を測る。平面形は、直線的で、横断面形はU字状を呈する。底の勾配は、西壁下で標高46.92m、中ほどで46.79m、東壁下で46.82mと中下りとなり、判断しかねる。土層断面Aの流水の形跡は、埋土自体が粘性土のため判然としない。出土遺物はないため、構築時の掘込み面位置が手懸りとなる。

第3編 発掘調査遺構と遺物

3面 3溝 (第15・16・54図 写真図版15・40)

3溝は、7区東半の調査区の中央よりに位置し、南西接の2溝とは2.7m離れた位置関係にある。調査面は標高46.77～46.81mで北東上りの調査地勾配にある。発見面は第16図土層断面AによればⅥ層下もしくはⅦ層中からの掘り込みが考えられており、北側の掘り込み面はⅦ層上面である。平面形は、3.25mの長さを調査し、幅162cm、深さ91cm、方向は底中軸でN86°Wと東西に近い向である。横断面形は第16図のとおり、底のやや平らな逆台形状を呈する。底面勾配は、西壁下で標高46.21m、中ほどで46.11m、東壁下で46.22mである。数値は中窪みとなるため流下走行について明確にできない。流水の形跡は断面Aの注2・7に砂礫の記述が見られる。出土遺物は、現場において番号付きで上げられた個性はなく、埋土のまとめ上げが少量存在し、第54図1・2のとおりである。同図1は割れ口消耗大で、2は消耗が少なく、時期性は2にあるが形状は不明瞭。1は6・7世紀の土師器壺片であろう。

8. 8区 (第16図、写真図版15・16)

8区は、7区の西側にあり、東西2つの調査区が設けられた。東側は長さ8.7m、幅2.9m、西側は13m、幅2.8mで各々トレンチ様である。調査は1～3面まで掘り下げられたが、その間、遺構の存在もなく、遺物も薄弱であった。

9. 9区 (第16図、写真図版16・17)

9区は、8区の西側にあり、長さ25.2m、幅2.6～2.9mの調査区で、1～3面まで掘り下げられた結果、3面において住居跡1棟の発見があった。

3面 1住居跡 (第16・54図、写真図版17・40)

1住居跡は、9区の北東隅側で半分調査域外に延びる状態で発見された。調査面は標高47.085～47.105m付近で、発見面位置は、第16図土層断面AによればⅦ層下、Ⅷ層上を境としてある。平面形は一部が知れるのみで、その状態からすれば、隅丸形状のようである。規模は、北壁で243+ α cm、西壁288+ α cm、深さは掘方面まで66cm。方向は西壁でN1°Wを指向する。施設としては、床層が薄い客土をもって貼床としているが、掘方そのものの凹凸は少ない。床面は、標高46.73～46.80mの数字が記入されている。出土遺物については現場での取り上げ番号はなく、埋土からのまとめ上げの個体がある。第54図1～5を掲げたが、小破片が多く、清掃でも受けたかのようである。その中で新様の遺物を上げた。消耗は比較的少ない。1～4の土器類は9世紀の個体で前半から中頃の間と見られる。なお掘方下には礫層があり、そのために掘方は浅かったかもしれない。

10. 10区 (第16図、写真図版17)

10は9区の西側にあり、15m離れた南側に5区と4区が存在している。調査は1～3面まで行なわれたが、遺構の発見はなかった。

第2章 新島遺跡の遺構と遺物

新島遺跡は、現県道竜舞・小前停車場線に沿う220m間に3区画の調査区を設けて発掘調査が行われた。平成15年度は1区を、2・3区を平成16年度に実施した。調査遺構は下記のとおりである。

- 1区 1面 近・現代遺構なし
 2面 1 畑跡・2 畑跡、1 溝跡・2 溝跡
 3面 1 住居跡
- 2区 1面 1面畑跡
 2面 2面畑跡
 3面 3面畑跡
- 3区 1面 1 井戸跡・2 井戸跡、3 溝跡、4 溝跡、1 土坑・2 土坑・3 土坑・4 土坑・近世生活あり。
 2面 2面畑跡、
 3面 3面畑跡、3面水田跡、3面水田下畑跡、5 溝・6 溝、1 竪穴遺構・2 竪穴遺構、5 土坑・6 土坑・7 土坑・8 土坑
 4面 4面畑跡、白色砂分布
 5面 2 住居跡・3 住居跡、5面畑跡、10土坑
 6面 6面畑跡、ビット群、9土坑
 7面 7面畑跡、ビット跡。
 8面 倒木痕群

以上のとおりであり、以下その内容に触れたい。

1. 1区

2面 1 畑跡 (第19図、写真図版19)

位置は、調査区の南西隅寄りに発見された。調査面は西側で標高47.345m、北東隅で47.225mであり、南南西に高く、北東に低い調査面地勢にある。発見面は第19図の2畑が、B断面のようにⅥ層下面とⅧ層上面間で発見されているので、同様とみられる。溝跡東西別単位で2条、南北走行4条、計8条で一群をなしている、単位は全体で1面の場合と2・3面の場合とが考えられる。1面単位とする場合はサクの尻側が各々至近で途切れるため、有機的な関係にありとした時、畑1単位の面となりうるであろう。2・3面単位とする時は、各々が分離した場合と、東西走行のサクの一方が、南北4条1単位の畑面構成と関連づいた時である。編者の個人的な見方からすれば、2単位の畑面構成ではないかと、南北4条1単位の一群の南側尻部と南側東西一条の小溝は、尻部端の位置関係が揃い、北側の一条と4条単位の一群とは270cm前後の空間が存在し、さらにその北側は調査地外に接しているためである。各規模は、北側の一条は長さ730+ α cm、幅48cm、深さ4~5cm、方向はN52°Eを、中央の4条は、最長で900cm、東西幅852cm、深さ6~10cm、方向はN24°Wを、南側の1条は、493cm、幅58cm、深さ12cm、方向はN38°Eを測る。出土遺物はなく、図示できない。

2面 2 畑跡 (第19図、写真図版19)

位置は1区の北東にあり、調査面は南側で46.997m、北側で46.826mの調査地勢上にある。西側は中ほど

第3編 発掘調査遺構と遺物

で46.908mである。発見面はⅤ層下面、Ⅵ層上面である。西側は、溝尻が揃い、東側は2区2面畑跡に続くが、2区東端は調査地外となる。平面形は1区側は6条の溝跡が直線的に走行しているが、2区に至って弓成りに弧を描く9条の単位となる。北西側の溝尻が揃い、サク間も揃うので全体で1単位を構成する畑面と考えられる。畑面単位の規模として東西700cm、南北720cm、方向はN50°Wを測り、サク間は平均で77cmである。溝の横断面形は浅いU字状を呈し、深さ8cm前後である。この2区2畑跡は、第19図断面Cのとおり、前後3面にわたっての畑跡が確認されている。そのため2面畑跡の上方に2区1面畑跡が、下方に2区3面畑跡が存在することになる。遺物は、現場で番号付きの個体はなく層位上の時期のみで、下層にある1区3面1住居跡の6世紀以降、As-B 層のⅣ層以前、12世紀初頭以前である。

2面 1溝跡 (第18・53図、写真図版20・41)

位置は1区中央の南寄り北西から南東に向け存在する。調査面は南東側で標高47.0m前後、北西側から北にかけ47.2m前後で北に高く、南に低い調査地勢にある。平面形態は、わずかに弓成りとなるが直線的でもある。横断面形第18図のように浅いU字状で、埋没の最終近くまで浅いU字状を呈する。規模は、長さ17.3m分調査し、最大幅に近いA断面で232cm、深96cm、方向性は底面でN43°Wを測る。底面勾配は西壁下で標高46.50m、中央付近で46.50m、南壁下で46.463mで西壁側に向い下る。発見面はⅣ層下面である。埋土には2cm大の礫を土層断面A注6に含み、全体的に砂シルトの埋土であり、水流の痕跡がある。出土遺物は現場での番号付き取り上げでなく、まとめ上げの個体である。第55図のとおり3点を掲げた。1～3まで古墳時代後期の一帯で、1は口径10cm強の土師器杯のやや小形の製品で7世紀前半の個体と考えられ、2・3はやや肉厚で6世紀の個体であろう。

2面 2溝跡 (第18図、写真図版20)

位置は1区の南西隅に縦半分を調査地外にしてある。調査面標高は標高測点がなく不明であるが、溝内最高所等高線が47.2mであるので、それ以上であり、水準の均等配分的考え方からすれば47.3m以下である。発見面は、土層断面AではⅣ層下面である。平面形は直線的で、横断面形は、半分のみであるが、それからすればU字状で注5下面の成りが正確に表現されているのであれば半分以上を調査したことになるが、注4以上、上方の成りからすれば半分に達したとは思えない。規模は、全体で7.65m分調査し、最大幅で95cm、深さ86cm、方向性はN65°Wを全体成りから測ることができる。埋土は注4に2cm大の礫を含むことからすれば流れの形跡ありとすることができる。出土遺物に現場取り上げ番号、まとめ上げの個体はない。

3面 1住居跡 (第19・55図、写真図版18・41)

位置は1区の南側、東壁寄りで見え、北西側の半分以上も攪乱とされた長大な穴跡によって切られる。発見面は標高46.56～46.63mで南東側が高い調査面地勢にある。層位上の掘り込み面は特に記入はない。平面形態。南東隅部からすれば、わずかに隅丸となるようである。規模は南壁付近で東西270+a cm、南北で152+a cm、深さは掘り方面まで33cm、方向はN35°Wを測る。施設としては、南壁に竈跡が、床層は、最大で15cm程客土されている。貯蔵元は見えない。床面には竈跡前面を中心に灰の分布が見られ、北中央と中程に近完存個体の甕が、竈燃焼部から焚口を想定される位置から土師器杯の出土がある。竈跡は壁外に60cm張出し、壁際で54cmの幅を測る。遺物は第55図に3個体を示したように、およそ6世紀後半の製品と考えられる。同図2と3は隅部の掘削方向が異なり、同図3の底面は広い平底を掘削により仕上げている、掘削の方向性

と伴に特徴的でもあり系譜の一端が示唆される。

2. 2区 (第20図)

2区では、1面畑跡、2面畑跡・3面畑跡が調査された。調査面は1～3面である。3面の畑跡について平成16年度担当の調査メモが残されている。それは3面目の畑跡の調査段階で、第19図の2畑跡のC断面に示した。同じC断面は、この3面の畑跡に共通の上層断面でもある。内容は次の通りで、編者が加除筆してある。

- ①、1面畑跡は、平成15年調査では認識できずに、断面のみの確認であった。
 - ②、Ⅵ層直下の旧地表面上で1面目の畑跡があり、Ⅵ層下面で1～6のサク跡の小溝があり、それについては1区の2面目の調査時に平面的に追求されている。
 - ③、Ⅵ層下面の畑とⅥ層下面のサク跡は畝とサク跡との位置が一致していることからおそらく一体の畑跡と考えられる。理由はⅥ層下面の2面サク跡2・4・6の位置とⅥ層下面の1面畑跡のサク跡とは断面図内の平面位置と一致しており、サク跡1・3・5についてはⅥ層下の1面畑跡の軌跡と同断面図の平面位置関係と一致することから、3面畑跡は畝替えが行われ、当初は1・3・5位置が畝間であったと考えられる。
 - ④、Ⅵ層の年代については、Ⅵ層にHr-FAに伴う軽石を含み、Ⅳ層にAs-B粒を含むことから、FAの堆積以降、As-B以前で9世紀中葉の矢部遺跡1区1住居跡(第49図)が、おそらくⅥ層の上位に掘り込み位置があることから弘仁9年(818)の地震に伴う堰止め決壊の洪水による可能性もあるが確定的でない。
 - ⑤、Ⅵ層は新島遺跡と矢部遺跡1区のみが存在し、2区以南には認められないことから新島遺跡を東流する矢場川が主因となり供給されたと考えられる。
- としている。このメモは前年度の調査担当所見を踏まえて作成されている。

1面畑跡と1・2面間小溝跡 (第20・21・55図、写真図版19・41)

位置は2区全体に広がる。調査面はサク跡から外れた北端の最低所で標高47.14m、南端で47.24mにあり北下りの調査地勢にあり、北と南の等高線47.10と47.20とサク跡形状が逆反り状態となっているので、その間の等高線位置が複雑な形状を呈している。地勢は微妙な状態であったと察せられる。発見面は、Ⅵ層下面であり、東西に7条のサク跡が並び、南北に方向の違える2条の小溝が並行して入り、それについてはⅥ層耕作痕と注記が図面にあるが、2面畑跡との新古の区別が添記されていないことと、前出メモ③に一体の畑跡が推定されているため相反の方向性にある2条の小溝については現場図面中1面畑跡中に記入されているとおりⅥ層下面の1面畑跡とⅥ層下面にある2面畑跡との間にある2条と解釈し、除筆別添しないうでそのまま淨書した。

平面上は7条が北西から南東走行にある。畑地面単位は7条に長・短があり、短い単位は別畑地かもしれないし、別時期かもしれない。北寄2条は畝間が以南と共通するので一連の単位の末尾に近い位置の2条の可能性もある。長さは最大で758cm、溝の深さは最大で10cmを、方向性は、N49°30'Wを測る。出土遺物は、現場番号付取付けが関連面上にNo1・2とがあり、第55図5のみ図示した。同図5は現場取上げ番号No2であり、製品種は近世軟質陶器焙烙片に見える18・19世紀頃の破片で、上層からの紛れ込みかもしれないが最も新しい時期遺物の認定が報告者の義務であるため掲載した。

第3篇 発掘調査遺構と遺物

1・2面間小溝跡は前述の方向性の異なる2条の小溝跡であり、並行する2条の幅は280cm前後であり畑跡サクとしての可能性は現場中の耕作痕という注記による。規模については長さ738+ α cm、幅は50cm前後、方向性は、西側の短かい1条でN12°Eを測る。1・2面間として現場取上げNo1があり、6世紀代の第55図4（写真図版右下）がそれである。

2面畑跡（第20・21・55図、写真図版21・41）

位置は2区全体に広がる。調査面は、第19図C断面のⅣ層下面を発見面と調査面は溝跡外の南側の高所で標高47.12m、北東側の最低所で46.54mである。面上に9条の溝跡とⅣ層の1・2面跡耕作痕とされた2条の溝の下層とも思える南北走行の小溝1条とがあるが新古の添記はない。9条の西延長は1区2面2畑跡に続く、規模は、1区と併せて、畑面単位の規模として東西700cm、南北720cm、方向はN50°Wを測る。深さは小溝跡の最大で10cmである。出土遺物は1・2面としてNo1が現場取上げとしてあり、それは第55図4（写真図版21右下）があり6世紀代の広口壺である。第2面としてNo1～3が取り上げられ、No3が第55図3の6世紀代の壺の破片である。

3面畑跡（第19・20・21・55図、写真図版22・41）

位置は2区全体に広がる。発見面は第19図C断面のⅣ下面で、調査面は区の南側の高所で標高46.88m、北側の最低所で46.36mにある。面上に東西方向に3条、南北に2条の小溝が確認されている。各々共通の平行関係にあり、サク跡とみれば、畑面2単位の可能性がある。東西走行の3条は、南から314+ α cm、幅25cm、深さ5cm前後、中央は長さ675cm、幅32cm、最大の深さは7cmで北東側に深くなる。北側の1条は271+ α cm、幅27cm、深さ5cmで、方向は中央溝でN58°Wを測る。南走行の小溝は、溝尻の残存する西側で、長さ289cm、幅25cm、深さ5cm、方向はN17°30'Eを測る。遺物は現場取上げとしてNo1～3があり、第55図1・2に示した。同図1は6世紀前半頃の土師器坏片で内面に凍ハゼ多い。同図2は6世紀代の土師器甕片である。

3. 3区（第22～25図）

矢部遺跡・新島遺跡は、旧矢場川水系に面し、両遺跡を合わせた総長450mの間に、稀有とも云うべき基本層序が整然と水性順堆積となって通観もしくは対比しうる状態を確認されている。そのことは、ここ3区の南壁・北壁断面を第47・48図に掲げ、解説を1頁第2章基本層位で行ったとおりである。総長450m間に同じ層順が、しかも層薄な状態で数多い層順を成していたことは、一般的に考えれば、信じ難いことである。水性堆積の場合は、洪水等によって自然堤防状の低台地の高まりと、その後後に背背湿地の自然地形を形成することになり、背背湿地は水田農耕の場として、低台地上は、生活地と畑作農耕、自然林などを生み出す立地となる。3区では生活の場である住居跡と畑作農耕の場、低位側に水田跡が調査され、その立地条件と整合を見る。さらに水性堆積は、順堆積層と浸蝕の背反現象があり、それも住居跡2棟のうち1棟は上面を削平されたと考えられ、いま1棟は、地表面にあった周堤帯の形跡とどめており、背反現象を真の当りに見ることができた調査区でもある。旧地形を語るることができるのは絶対面積を有するのは3区だけであり、しかも等高線の記入は第22図の1面の等高線図だけであるので、それを見ると、最高所に標高47.1mが南西隅側に、最低所の46.0mが北東側に入り、まだ南西側に高所は延る傾向にあり、地勢は北東に低く、南西に高いことになる。掲載しなかったが中央に存在する4溝の掘没状態の等高線図も記録されており、それによ

ると、3区中央付近の等高線のやや密になる状態は、4溝に旧時も影響してのようであり、それを除くと、地勢走行と等高線勾配は一致してあると考えられる。3区において調査された遺構は既に13頁で触れたので参考にとされたい。

1面 1井戸跡 (第27・57図、写真図版42)

1井戸跡は3区の東寄りに位置していたが取り決めより調査打ち切りとなった。上面は標高46.7~46.8mにある。規模は、長径198cm、深さ40+ α cmを測るが、40cm掘り下げたところで新しいと感じたらしい。埋土中から第57図1・2がある。同図1は18世紀代の小泉焼焙烙であり、同図2は、17世紀代を思わせる軟質陶器片である。破片形に大形を含むので生活至近を感じさせる。

1面 2井戸跡 (第27・57図、写真図版42)

2井戸跡は3区の中央や東寄りに位置していたが、取り決めにより調査打ち切りとなった。上面は標高46.9m付近である。規模は、長径92cm、深さ120+ α cmを測るが、120cm掘り下げたところで新しいと感じたらしい。埋土中から第57図1・2の陶器片があり、同図1は18世紀の京焼系の碗、同図2は18世紀の美濃焼の碗の各々小片である。

1面 3溝跡 (第27・57図、写真図版31・42)

3溝跡の名称は、是新島遺跡の全体通番らしい。位置は3区中央の南壁寄りにある。調査面は東壁下で標高47.05cm、北側で46.96の北下りの調査地勢である。発見面についての記入はない。平面形態は、直線的でなく、中ほど西側で別遺構がからむらしく整わない。横断面形は東側がゆるやかな、西側が急斜となる浅いU字状を呈する。規模は長さ590cm分調査し、幅は最大で103cm、方向はN12°Eを測る。出土遺物は、第57図1・2を掲載したが、同図1は、18世紀の小泉焼焙烙片、同2は羽口片で硅化物が付着し、質量は軽い。遺物図は、関連の中で最も新しい遺物を上げることを選択の拠所としているので、溝跡は18世紀代であろう。

1面 4溝跡 (第26・57・58図、写真図版31・42)

位置は3区の中央付近から大きく曲り、北西に達してある。調査面は標高74.1~74.3m付近である。平面形は大きく曲り、直線的ではない。横断面形は第26図B断面のように下方に河道が存在し、土層注記1・2が4溝であり、A断面では注3がそれに該当していて、およそ浅い椀状をなしている。規模は、全長29.12mを調査し、B断面で、238cm、深さ62cm、方向はN50~60°Wを向く。底の勾配は北下りである。埋土には、鉄分沈着や礫を含み、流水があった。遺物は番号取上げの個体はなく、第57図1に8・9世紀頃と考えられる土師器坏片を掲げた。第58図1~4に旧河道と注記のある遺物を示した。

1面 1土坑 (第28図、写真図版34)

位置は調査区の中央より東寄りに存在する。調査面は標高47.0m付近である。平面形は隅丸長方形を呈し、横断面形は隅の丸い箱状を呈する。規模は長さ131cm、深さ33cm、方向はN17°Eを測る。現場注記に近世の墓かとなり、機能実態不明瞭のようである。遺物の出土はない。

第3窟 発掘調査遺構と遺物

1面 2土坑 (第28図、写真図版34)

位置は調査区の中央より少し東に寄って存在する。調査面は標高47.05m付近である。平面形は浅い円形を、横断面形は隅の丸い平底の形を成している。規模は、最大径で88cm、深さ12cmを測る。複数の穴跡が並ぶうちのひとつとして確認したらしく、他の4穴についてカクランと注記があり、取り決めにより放棄したようである。遺物はない。

1面 3土坑 (第28図、写真図版34)

位置は3区の中央付近にある。調査面は標高47.0m付近である。平面形は不整な円形気味で、横断面形は浅鉢状を呈す。規模は長径103cm、深さ10cmを測る。機能として現場注記に近世墓かとある。出土遺物はない。周辺の近世遺構に関連か。

1面 4土坑 (第28図、写真図版34)

位置は、中央より東に寄り、南壁の一部がかかって確認されている。平面形は隅丸方形気味で横断面形は浅鉢状を呈す。規模は長径73.0cm、深さ12cm、方向はN85°Wを測る。機能として現場注記に近世墓かとある。出土遺物はないが、3区からは、平箱にして3箱分の遺失物としての遺物が回収されており、1部を第60・61図、写真図版43・44に掲げた。その中には異外搬入の瓦燈片(第61図11・12)、輪形鉄鏝(第61図16)があり、さらに時期の異なる仏花軀(第60図6・7)があり主体は18・19世紀であるが来歴は、第60図4に示した17世紀の陶器皿などがあり、土坑とのかかわりは、その頃の生活と密接であったと推測される。

2面畑跡 (第28・59図、写真図版26・43)

位置は西側にあり、調査面の標高47.3～46.9mにあり、調査地勢は北西が高い。発見面は標準IV層下面に相当する。2面畑跡は北側を4溝によって切られている。畑面単位は西側の一群と北側に2条平行状の単位、北東隅に小溝が1条あり、計3単位が考えられそうである。西側の一群はサク跡と考えられ溝跡のうち短い3条の単位と以北にある4条を別単位と捉えるかは、4条目の中央小溝と南側にある短小溝跡とがほぼ同様の曲り方を呈すると、130～140cmの畝間幅は他とも共通があるため1面単位と考えたい。規模は西側が一群の東西長で1450cm、南北の溝端相互間で1150cmを、方向はN0°EWを指向する。北側の2条単位は長さ173cm、溝両端幅で183cm、方向はN27°Eを指向する。北側の1条は長さ265cm、方向はN72°Eを指向する。出土遺物は現場の番号付取上げとしてNo1～24が図中に見えるが該当がなく、第59図1はまとめ上げ中から選択した6・7世紀頃の土師器坏片である。2は出土地点の記入がないが完存である。6世紀の土師器短頸甕である。

3面畑跡 (第29・31・57・59図、写真図版27・28・40・42)

畑跡は5溝跡の東・西で発見され、西側の一群は第29図に、北側の一群は第31図に示した。北側の一群は、3面水田跡下畑跡と呼称し、別扱いをしたい。西側に位置する畑跡は、5溝の南側に11条の小溝が、中ほどの南延長に1条が、さらにその西側に南北走行の6溝跡を含む2条が発見された。調査面は標高47.0m～47.1m付近で、発見面は、V層下面、VI層上面に相当している。11条の小溝跡は畝間が等間的であり畑単位とした時1単位なのか2単位の構成なのか明確でなく、小溝尻も途切れながらも繋がっているようにも見え判然としない。北側に並ぶ8条は846cmの幅があり、中央の長目の小溝で長さ496cm、丸底気味の底面までの

深さ6cm前後であり、方向性はN72°Wを指向する。その南側にある3条は南北280cm、東西長365cm、方向性は2カ所で途切れる溝を基にN65°Wを測る。西側にある南北走向の2条は、ほぼ平行の位置関係にあるものの、畝間として捉えると400センチの幅があり、同じ単位の畑面として疑問が残る。6溝跡の長さ1010cm。方向性はN36°Eを測る。出土遺物は、因中に現場での取上げ番号No1～7、No26が他にNo27～34が記載されているが、No27～No34は確認されたものと出土地が明確でなくNo1～No7・26は該当がなかった。No27～No34のうち第59図に2点を掲げた。同図1は8世紀頃の土師器壺、同図3は8世紀後半の須恵器杯である。

3面水田跡 (第30・57図、写真図版42)

位置は、中央より東に片寄って存在する。調査面は標高47.1から46.09mであり、調査面勾配は北に高く南に低い調査地勢にある。発見面はV層の下面、VI層上面に相当している。重複関係は4溝に切れられ、5溝との関係は第49図中の注記D群の注22に水田耕土との内容があり、その右延長上で5溝に切られている様子が分かるが、5溝の右肩側にその延長は見られず、削られているようである。同図注記D群の左側はB群でB群の注記では注15でありその上面が水田面である。その注15はさらに左側に寄るとVI層であり、3面水田との注記もある。その覆土に相当するのがV層であり、注記A群にV層が見える。溝跡5の左肩からV層層まで24.9mあり、その位置が第30図のY-38.684mライン付近にあり、以東は高まるようである。調査記録中、5溝の西側に等高線47.0と47.1が弓なりに巡るカ所内まで水田跡としての色分けがなされている。どうも、VI層中の鉄分やマンガン等による酸化斑が、その域まで延びていたらしい。畦跡は東西方向に2条、わずかな高まりとして残されている。それは第30図の断面Aの実線と細線の区別で、実線が水田跡範囲である。面単位は少なくとも3単位、東側を加えると4単位面が捉えられる。東と北側の面とは畦境ともなっているが水口があるものの、高低差が少ないため流れ方向が不明確である。水田の全長は東西28m、南北10.4m、中間の畦方向はN88°Wを測り、方位を意識しての営田のようである。出土遺物は現場取上No1～4があり、第57図1・2を掲げた。同図1は9世中頃の土師器壺片で、同図2は9世紀頃の薄作りの壺片である。

3面水田下畑跡 (第31図、写真図版28)

3面水田跡を除去し、その直下で畑跡が発見された。調査面は標高46.7～46.55mであり、調査面地勢は北東側が高く、南西側を下る。上方の遺構と地勢が逆に感ずるのは、4、5溝跡に西から南側が接しているためでもある。発見面は3区南壁土層断面に基づけば、注記A群ではVI層中であり、注記C群では5面2住居跡覆土に相当する注16があり、それは注記Dの注23・25の間層として5溝跡に達する直前で途切れてしまう。この注16が、3面水田下畑跡の覆土層であろう。第48図の北壁では、VI層下面、VII層上面が4面であるので、VI層中に3面水田下畑跡が存在していたことになり、注記B群のVI層は東端A'点より西に344cmで途切れて終る。同壁注GのVI層中に注記1の間層が途切れた状態が見え、それが3面水田下畑跡の直接の埋没土かもしれない。同畑跡は、南北走の小溝跡中に南西隅の筋目の異なる小溝3条と、中程に南北の主体をなすトーン貼とそうでない一群があり、少なくとも畑面単位が3面以上存在しそうである。トーン貼の一群の識別は現場でなされている。主体をなす南走走行の東半のサク跡は10条あり、最長の中央付近の1条は長さ960cm、10条全体の東西幅は約11mを、方向性はN29°Eを測る。トーンの入る7条は東西690cm、南北868cm、方向性はN27°Eを測る。南側の目筋の異なる3条は東西350cm、南北220cm、方向はN9°30'Eを測る。出土遺物に現場での取り上げ番号付の遺物はなく、まとめ上げの遺物もない。

3面 5溝跡 (第31・32・33・58図、写真図版33・42)

5溝跡は3区の中央が北西方向にのびて存在している。調査面は標高46.6m～47.1m付近で、調査地勾配は北上りとなっている。底の勾配は、南壁下で標高45.62m、中程で45.79m、北側で46.77mである。北寄りには等高線45.8mが土橋状に高まるカ所成りにめぐらるため、全体的には北上りの勾配に見えるが、溝幅として捉えたときに南壁の幅は狭く、北西側に流下したと考えた方が良いのかもしれない。溝跡の平面形状は「 Γ 」状に曲がるが、X37.00、Y-38.610付近のトレンチ内は、流出荒れた面が第31図A'ポイント側にのびており流失した水流は、直線的に北に向かって流出した時点もあったようである。そのため「 Γ 」状に曲る平面は結果的な状態である。溝跡の凹断面形は、浅いU字状をなすが、どこまでが自然流路跡で、どこまでが人為なのか不明確なため、あまり立ち入らないでおく。規模は、最大幅で660cm、深さは調査面からE断面で198cm、南壁断面である第47図で114cmを測るが、掘り上がっていないので、南壁の溝底面標高45.62mからすると127cmである。埋土には土層断面注記のとおり各所に礫がまじり、相当長時期にわたり、流水があったようである。5溝跡の出土遺物は、現場での番号付き取り上げはなく、まとめ上げの中から選択し、第58図1～8に示した。最も新しい一群は、同図4の須恵器塚で9世紀代、同図1の土師甕も9世紀中頃の個体である。同図2・5・6は9世紀前半ごろ、同図2も作調の肩部が丸みおび、9世紀代の須恵器蓋と考えられる。須恵器の瓶や壺・甕などは、長期にわたり類似形状が長く続くので特定しづらいが同図7・8は、7～9世紀頃。過る個体は、同図3に見る8世紀中頃から後半の須恵器杯がある。全体的には9世紀中頃から前半の個体の存在量がある。

3面 6溝跡 (第29図、写真図版33)

6溝は前出の3面畑跡中でサク跡として考えた場合についても考えたが、南西側に並走する小溝と組合せてサク跡とした場合、長さや幅も異なるので、溝として別扱いにした方が良さそうである。6溝跡は、調査の南西隅にある。平面形は少し曲りながら北方向へ進み、1堅穴跡と重なるが新古は不明である。横断面形は浅いU字状を呈する。規模は長さ1030+a cm、幅51cm、方向はN27°Eを測る。溝幅51cmの規模は畑のサク跡としては幅が広く、北西側に存在する小溝1条と合わせて畑のサク跡と考えるのは無理のようである。出土遺物はない。

3面 1堅穴遺構 (第34図、写真図版25)

位置は3区の北西寄りにある。調査面は標高46.98～47.07mの間にある。発見面はⅦ層上面、Ⅷ層下面に相当しているようであるが注記に中・近世かとある。北は4溝跡と、南は6溝跡と重なるが明確でない。この穴状凹地について、何故堅穴遺構と遺構種名を称したかも明確でない。平面形は倒円形の丸みを持った溝状で、底面は隅丸状の隅を除き、平らである。平面上、6溝跡と方向性が近似している点は、構築時期の近似を感じさせ機能的な関連を有するのかもしれない。埋土にブロック状態があり人為埋没か、構築から埋没まで短期を思わせる。規模は長さ510cm、幅244cm、深さは調査面から26cm、中軸の方位はN31°Eを測る。出土遺物は、現場番号付取上げ、まとめ上げの個体もない。

3面 2堅穴遺構 (第34・57図、写真図版25・42)

位置は3区の西寄りにある。調査面は標高46.93～46.97mの間である。発見面はⅦ層上面、Ⅷ層下面に相当しているようである。重複は3面畑跡のサク跡内小溝とが東側で重なるが重複は明確でない。平面形は隅

丸長方形と楕円形の中間的な形態にある。断面形は隅丸状態で底部は若干ながら浅い凹凸がある。堅穴遺構という遺構種を何故選択したのかは明確でない。規模は、長径313cm、短径265cm、深さ36cm、方向性は中軸でおよそN6°Eを測る。埋土はA断面の注1は、粘性ありとあって、砂質土を埋土とする土坑や1堅穴と様相を違える。遺物は現場番号付取上げ№1・2と、面取上げ№6・8がある。面取上げは3面畑跡の連番号である。遺物図は第57図1・2に示した。同図1は9世紀頃の土師器甕片で、同図2は須恵器瓶の破片であるが構築時期を決定するか明確でない。

3面 5土坑 (第34図、写真図版35)

位置は3区の南西隅にある。調査面は標高46.88～46.94mである。発見面はⅥ層上面とⅤ層下面に相当しているようである。平面形は近円形を呈し、断面は浅い椀状をなす。埋土は固くしまるとあり、機能を示唆しているらしい。規模は直径91cm、深さは調査面から10cmを測る。遺物について、現場の取上げ番号もなく、まとめ上げもない。

3面 6土坑 (第34・58図、写真図版35・42)

位置は3区の西寄りにある。調査面は標高46.91～46.95mである。発見面はⅥ層上面とⅤ層下面に相当しているようである。平面形は近円形を呈し、断面形は浅い椀状をなす。埋土は第34図断面Aの注1は、粘性あり、注2は砂質感ありとあり、何を示唆するのかわからない。遺物について、現場での番号付取上げは1点あり、第58図にそれを示した。同図1は鉄製遺物で、先尖りの何かの利器のようでもある。それを除くと遺物はない。

3面 7土坑 (第34図、写真図版35)

位置は3区の南西寄り、5土坑と2堅穴との挟まれた位置に存在する。調査面は標高46.94～46.95mにあり、発見面はⅥ層上面とⅤ層下面に相当しているようである。平面形は近円形を呈し、断面形は椀状を呈す。埋土は、5土坑とと同じように纏っているが何を示唆するのかわからない。規模は長径56cm、深さは調査面から21cmを測る。遺物について現場での番号付取上げ、まとめ上げもない。

3面 8土坑 (第34・58図、写真図版35・42)

位置は3区の北西隅寄りにあり、調査面は、標高47.05～47.06m。発見面はⅥ層上面とⅤ層下面に相当しているようである。北半はトレンチに切られているが、現場での破線記入があり、平面形は隅丸長方形を呈し、断面は、隅の丸い逆台形状を呈する。重複は上層の3区2面畑跡が切切っている。規模は長さ130cm、深さ100cmを測る。出土遺物は現場での番号付取上げはないが、埋土中から第58図1がある。同図1は9世紀頃の土師器甕片である。

4面畑跡 (第35・59図、写真図版28・43)

位置は3区の北西側にある。調査面標高は46.52～46.58mにあり、調査面地勢は北東側が高く、南側に下る傾向がある。発見面は、Ⅵ層下面とⅤ層上面に相当している。サク跡の小溝が5条発見され、1畑面の単位として認められる。方向性は上面の3面畑跡に近似するが、畝間幅が異なる。サク跡は80～110cmの畝間を測り、直線的、平行関係ともに整う。規模は、最長の東西溝で1005cm、調査からの深さ5cm、方向性はN

第3篇 発掘調査遺構と遺物

68°Wを測る。遺物は現場での番号付取上げの個体はなく、まとめ上げの中に第59図1があり、8・9世紀頃の土師器壺口縁部片である。

4面 白色砂の分布 (第23図)

3区の中央付近にあり、第23図の-38600~603、36,998~36,999にかけ一条の細線が引いてあるが、白色砂調査の北限で、東は-38,585付近まで調査はおよび、同図のトーンが白色砂の分布域である。堆積範囲で明らかなのは北側の領域までで南側は調査区壁、西は5溝跡がある。調査面は標高46.44~46.80mであり、調査面地勢は北側が高く、南側が下る傾向にあり、それは上層にあった3面水田跡と共通する。発見面は南壁土層断面ではⅣ層中に相当するらしい。規模は南壁下で19m、南北8.2mであり、北の堆積端はN64°Wの方向性にある。遺物の出土はない。

5面 2住居跡 (第37・38・39・56図、写真図版23・24・41)

3区中央の南壁にかかって存在する。調査面は、標高46.4m付近である。発見面は、第47図の南壁土層断面ではⅣ層中から見え、第39図ではⅣ層下面のようである。概念的には5面はⅣ層下面である。第37図の平面形は、隅部は北東隅の内側は角張りが強く、立ち上るにつれ丸みおびる。南東端も南壁際直下でわずか見える。断面形は、第39図の南壁断面によると立ち上りは2段気味に、A'-A'間では周堤帯が見える。規模は、周堤を含めず南北470+a cm、東西450+a cm、深さは堀方面まで99cm、周堤幅169cm、その高さ43cmを、方向は西壁下を基に65°30'Wを図る。施設は北壁に竈跡が、南東柱穴、掘り方で同面から深さ9cmの貯蔵穴様の凹み、床面で壁下に周溝が巡る。竈跡は第38図に示したように煙道部が周堤想定位置外にまで達していない。燃焼部内には支脚用石が残され、現場注記に支脚とある。床面は硬化が認められ、部分的に炭化物が存在している。出土遺物は、現場番号付取上げはNo1~12があり、そのほか、まとめ上げがある。第56図にそれを掲げたがおおむね、6世紀後半の土器類である。

5面 3住居跡 (第40・56図、写真図版25)

位置は3区の東側にある。調査面は標高46.66~46.60mにあり、発見面は概念上Ⅳ層下面、Ⅳ層上面に相当している。平面形は、角ばりの少し取れた方形である。南側はカクランとされた近世以降~現代までの遺構により削られているようである。施設として北壁に竈跡があるほか貯蔵穴などは見えない。規模は東西309cm、南北267cm、方向はN26°Wを測る。竈跡は北壁に取り付くが、住居跡が浅く残存するに過ぎなく、竈跡の残存状態からすれば、上面は流出したと考えられ、残存長約60cm、幅約60cmを測るに過ぎない。同層断面注記によれば焼土散在とあり、確かに使用されている。出土遺物は、現場の番号付取上げとしてNo1~12がある。第56図にそれを示したが、弥生時代中期の壺2個体以上の破片であり、竈を有する住居形態からすれば9世紀頃の住居跡と考えられる。堀方面高は標高46.54~46.60mであり、遺物高は、46.62~46.70であるのでほとんどの個体は、近床面に存在している。そのため、前代の遺物類は何らかの理由で、住居内に持ち込まれたと考えたい。

5面煙跡 (第35・36・59図、写真図版28・29)

位置は3区の西側に存在している。調査面は、北西側で標高46.49m、北東端46.68m、南東端で46.38m、南東端で46.38m、南西側46.55m、中央付近46.57mである。発見面は概念上Ⅳ層下面、Ⅳ層上面に相当し、

第36図A断面では、注4下面、5上面である。遺構図には、輪郭線のみを溝跡も記入され、おそらくは4面畑跡と方向性が異なるため、次面がⅤ層上層のサク跡のように見える。基本的には方向性が5面畑跡と共通するので前代の痕跡ではないだろうか。畑面の面単位は、溝尻揃のある西側の7条、南側の長さの異なる4～5条に2面、東半にE断面の6条、D断面の4条、中央から北寄りの4条前後が考えられ、最少でも6面が考えられ、実際には、それ以上である。方向性はN30°E前後である。遺物は、第59図1・2があり、2は18世紀頃の陶器猪口片であり紛れ込みであろう。

5面 10土坑 (第40・58図、写真図版36・42)

位置は3区中央付近、南壁に接してある。発見面は、標高46.54～46.60mにあり、概念的にはⅤ層下面、Ⅵ層上面に相当する。規模は、長径65+αcm、深さ12cmを測る。出土遺物は注記のように、まとめ上げとして第58図1・2があり、6世紀後半頃の土師器片があり、住居跡の可能性もありという。

6面畑跡 (第41・42・59図、写真図版29・43)

位置は5面の直下に方向性近似の形で発見され、調査面は標高46.4m付近で、発見面は概念上IX層下面、X層上面である。発見状況は第41図のとおり、溝尻を有する場合と、削平され消滅する小溝跡とがあり、東半だけでも7畑面単位以上の面数がある。方向性はN30°EとN40°Eとのおおむね2方向があり、30°前後の方向は新・40°走行は古い重さなりで、上層5面は30°方向であるので、上面継承的な関係に6面新段階はある。遺物は、2点の現場No付取上げがあり、第59図1は8世紀末頃の坏、2は6・7世紀飯片である。

6面 ビット群 (第43図、写真図版29)

位置は3区の西方側に分布し、6面畑跡の下から発見された。水準数字の入った図がないため深さや調査面高は明らかでないが、以下の7面上でもビットは発見されているので一連の柱穴や樫跡関連と考えられる。

6面 9土坑 (第43図、写真図版36)

9土坑は、ビット群の東方で発見された。規模は、長径81cm、調査面よりの深さ16cmである。調査面は標高46.3m付近で、この高さが6面調査面を代表する。出土遺物はない。

7面畑跡 (第44・59図、写真図版29・30・43)

3区の西側にあり、調査面は、標高46.3～46.4m付近で、概念上の発見面は、X層下面とXI層上面である。7面では、畑面単位は不明瞭であるが、東側にN26°Eの溝跡一群、北寄りにN50°Eの溝跡の一群、南側にN28°Eの一群があり、各々畑面構成3面以上の単位が存在していたようである。そして、6面畑跡面を除去して発見された6面ビット群も、この面でも発見されている。6面畑跡の30°(新)、40°(古)の方向性は、7面の溝跡とも、部分的には一致するものの、全体的に残存不良の力所が多いため、うまく説明づかない。出土遺物は現場の番号付取上げとして1点のみ存在し、第59図の土師器片がある。時期は不明瞭である。

7面 ビット跡 (第44図)

3区の西側にあり、調査面は、7面畑跡と同じ標高46.3～46.4m付近で、概念上の発見面は、X層下面

第3篇 発掘調査遺構と遺物

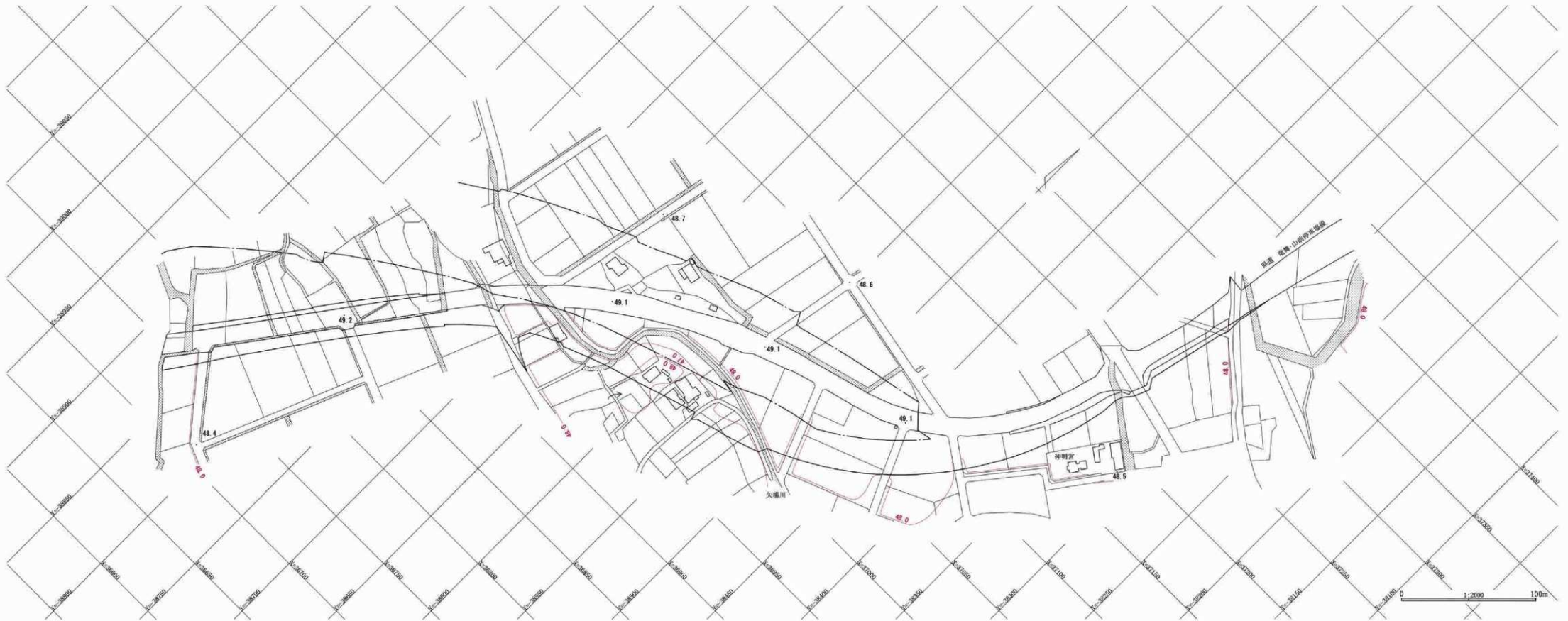
とXI層上面である。上層から続いていたピット群の続きとも考えられ、ピット群が数時期に分けられ、最古の一群がこの面にあるのか、単なる堀り残しがこの面にあるのかは明瞭でない。

8面 (第25・59図、写真図版30・43)

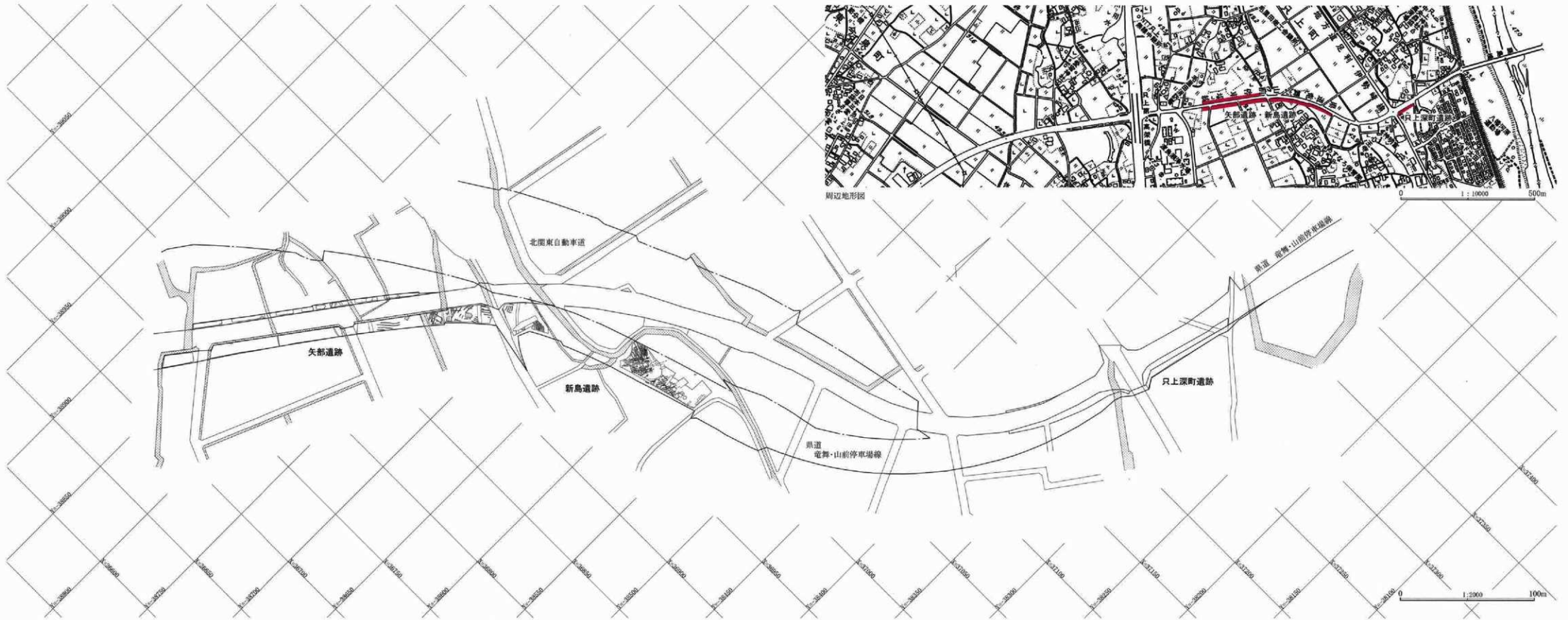
3区の中央から西半にかけて調査を行なった。調査上の最終面でXI層最下面以下である。調査面は東端北で標高46.33、同南で46.44、南端南で46.05、同北で46.06mを測る。全体的に北より、東よりとなっている。面上からは部分的に重複のある倒木痕が全体に広がる状態で発見された。倒木痕は南北軸を主に南東-北東軸も、さらには重なりもあるためある程度時代幅があつての存在と考えられる。なお群馬県は全国平均の年間降雨量1800mmのところ、600mmも少ない1200mmであり、年間日照時間は関東地方で最も高く、さらには火山帯で表層は水透性のよい火山灰土に覆われ、樹木植生は、浅根の落葉広葉樹にある。そのため倒木の多くは、浅根の広葉樹と推測される。同面での遺物はNo 1～4の番号付取上げがあり、第59図1～3に示した。時期は縄文時代中期頃である。同図1・3は器面消耗があり、伴う面との同時性は推定できない。

そのほかの遺物 (第60・61・62・63図、写真図版43・44)

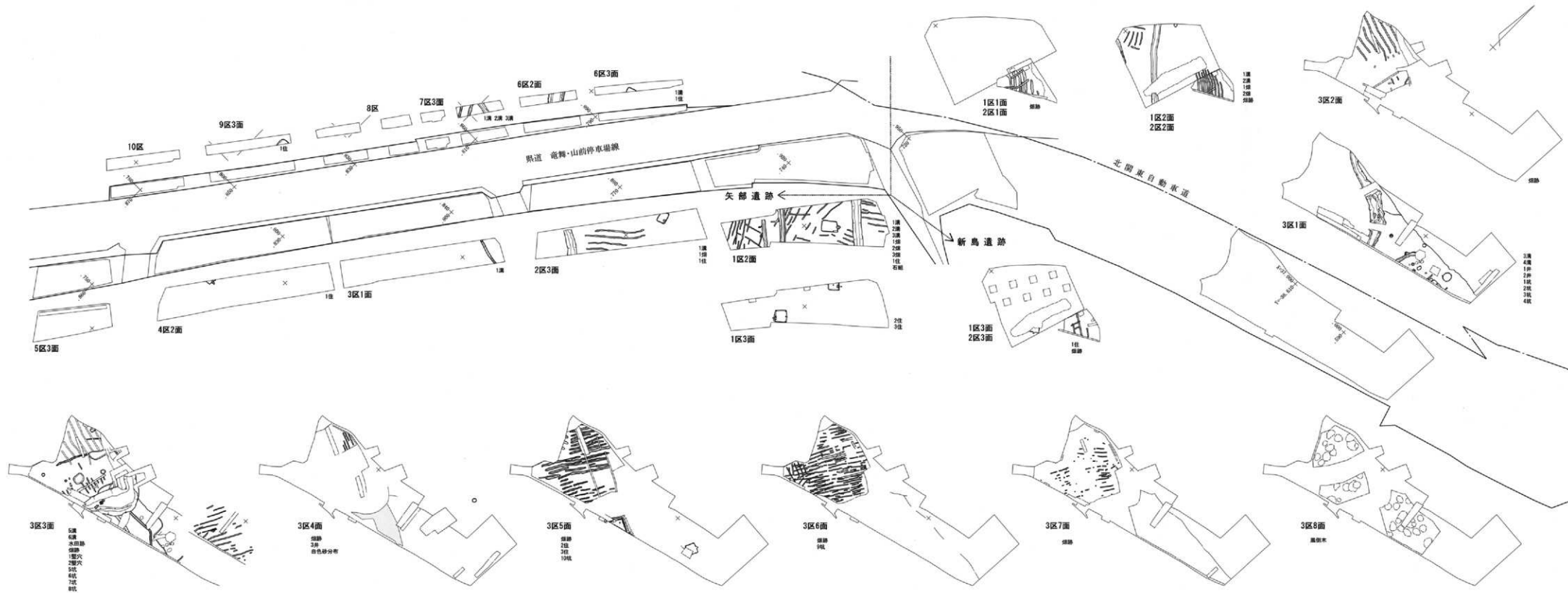
新島遺跡出土遺物箱中に出土地に不明瞭さを伴う一群があつた。一つは、第62・63図の2面表土であり、区名称不明であるが、古墳時代土器相補足のために示した。調査地内か外か場所特定のできない第63図1～4があり、10世紀後半頃の、矢部遺跡・新島遺跡周辺では潜在的な時期の遺物である。



第2図 調査地周辺と路線図

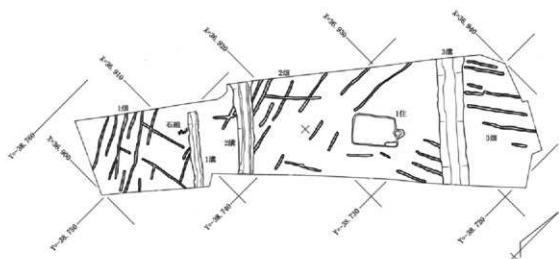


第3図 地形図と路線図

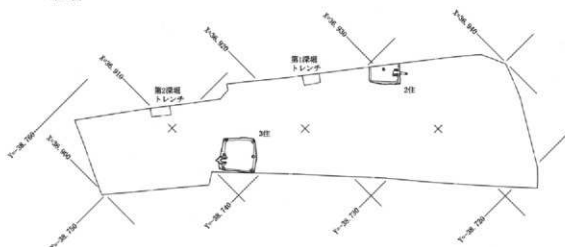


0 1:600 40m

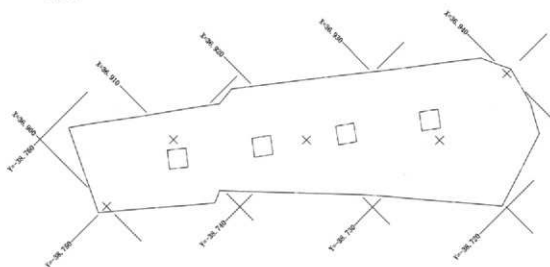
第4図 調査面図



1区2面



1区3面

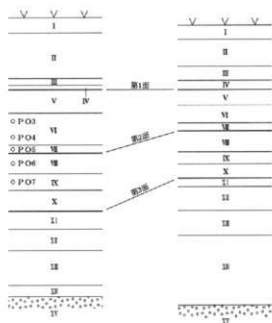


1区深堀トレンチ

0 1 : 400 20m

第5図 1区全体図

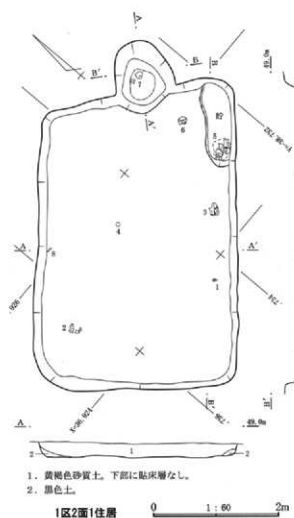
第3編 発掘調査遺構と遺物



1区第一深埋標準土層 標高50.6m

- I. 灰褐色砂質土(見掛け作土)。
 - II. 灰褐色砂質土(土地改良客土)。
 - III. 灰白色砂質土。
 - IV. As-B粒含む灰白色砂質土(下方層境は第1面)。
 - V. 暗灰白色砂質土。
 - VI. 灰黄褐色砂質土。
 - VII. 暗灰褐色粘質土。φ1~5mmのAs-C粒・Hr-F・Aに伴う軽石を少量含む(下方層境は第2面)。
 - VIII. 黒褐色土。φ1~5mmのAs-C粒・Hr-F・Aに伴う白色軽石含む。
 - IX. 黒褐色土。
 - X. 淡黒褐色土(淡色黒ボク土。下方層境は第3面)。
 - XI. 灰黄褐色土。
 - II. 明灰黄褐色砂質土。
 - III. 灰褐色洗水砂。多量の雲母含む。
 - IV. 黄褐色砂質土。
 - V. 礫層(固状地礫層)。
- ※PO: プラントオーバー採取地点でPO1~2は1号棟にあり。

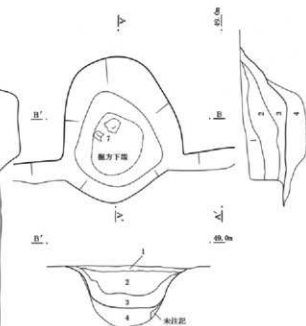
1区標準土層



- 1. 黄褐色砂質土。下部に粘床層なし。
- 2. 黒色土。

1区2面1住層

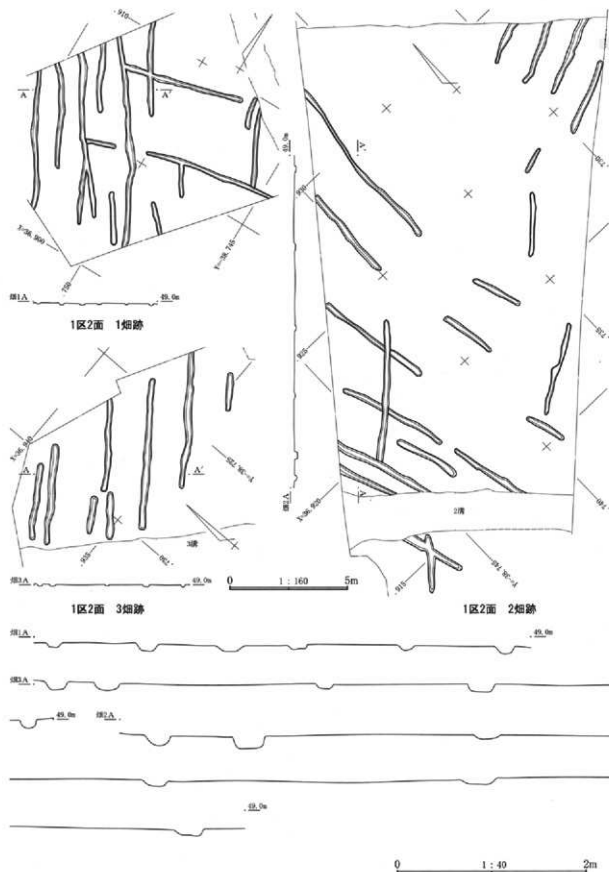
0 1:60 2m



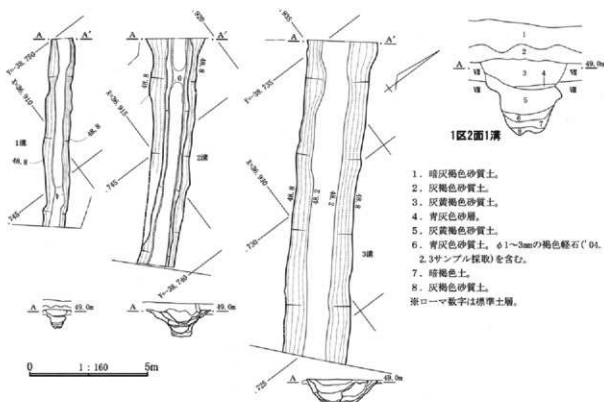
- 1. 明灰黄褐色砂質土。
- 2. 暗灰黄褐色砂質土。
- 3. 焼土ブロックと2-3層の混土(崩れた天井部)。
- 4. 灰褐色粘質土。焼土ブロックの混土(大床の粘床層)。

0 1:30 1m

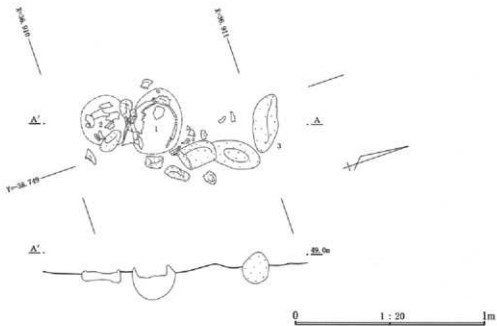
第6図 1区標準土層と遺構図



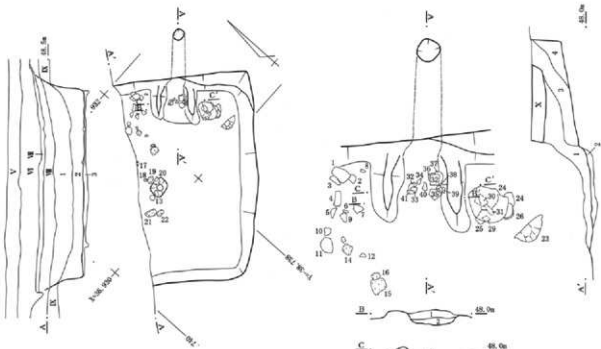
第7図 1区2面遺構図



第8図 1区2面遺構図



1区2面石組遺構



1. 褐色土。φ1~5mmの白色軽石を含む。
 2. 暗褐色土。φ1~5mmの白色軽石を含む。地山のブロック含む。
 3. 灰黄白色砂質土(地山)と褐色土の混土(転床層)。
- ※ローマ数字は標準土層。

1区3面2住居

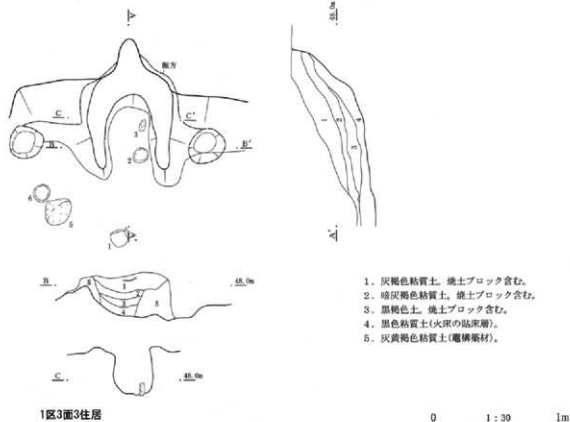
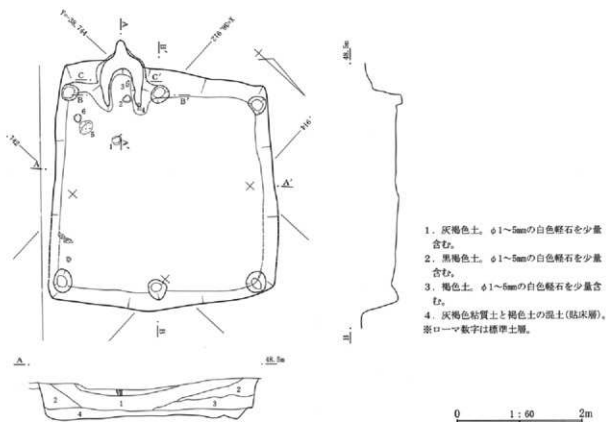
0 1:60 2m

第9図 1区2・3面遺構図

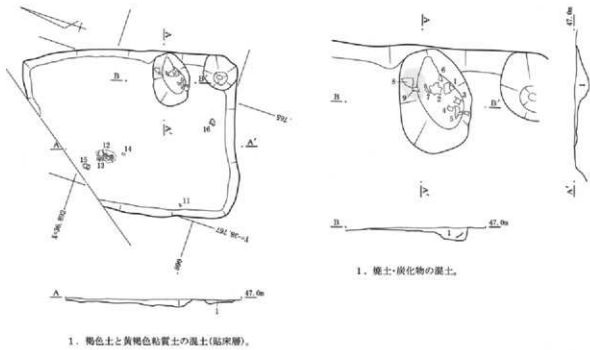
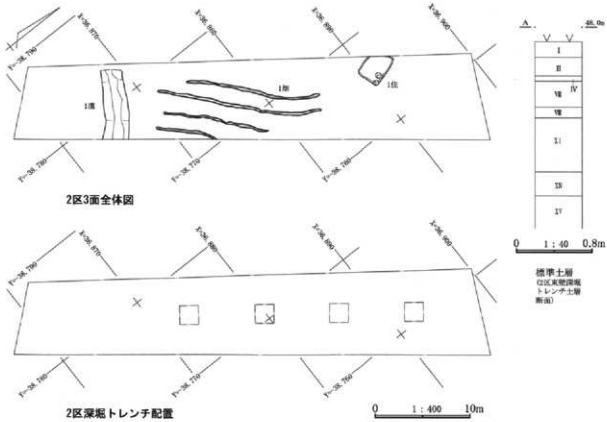
1. 灰褐色粘質土と焼土ブロックの混土。
 2. 灰褐色土(火床の粘床)。
 3. 灰黄褐色粘質土。焼土ブロック含む。
 4. 暗灰黄褐色粘質土。焼土ブロック含む。
- ※竈主体部はほとんど焼れており、袖部の基部を僅かに確認したのみ。竈右側の床面直上より須恵器高壁が出土したが、これは崩れた竈構築材である灰褐色粘土と焼土の混土で覆われていた。
- ※ローマ数字は標準土層。

0 1:30 1m

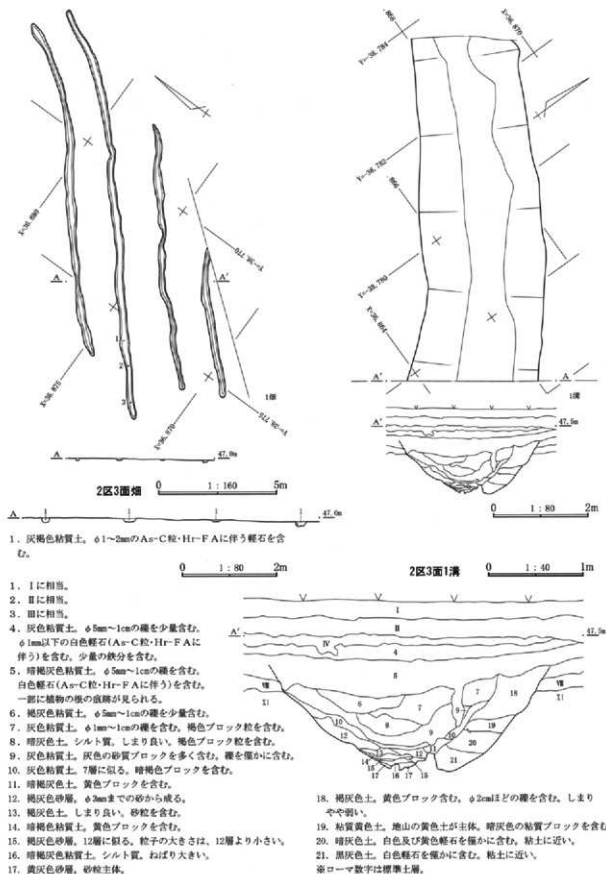
第3篇 発掘調査遺構と遺物



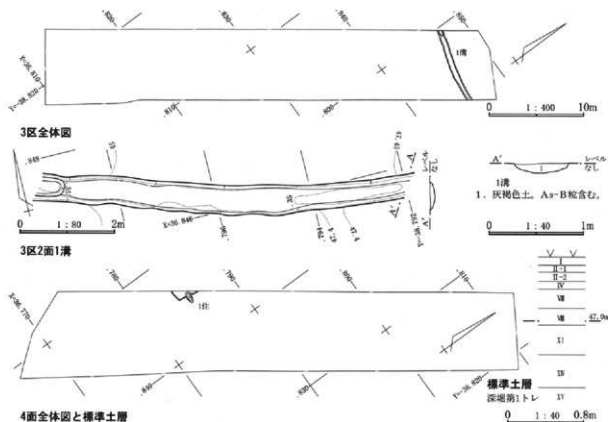
第10図 1区3面3住居跡遺構図



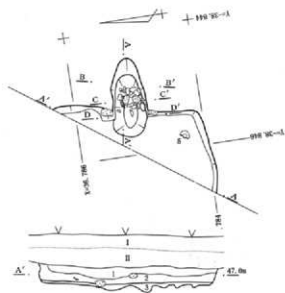
第11図 2区全体図と同3面遺構図



第12図 2区3面遺構図



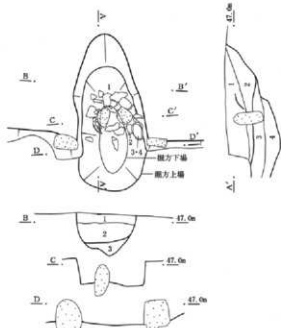
4区全体図と標準土層



1. 灰褐色シルト質土。φ1~5mmのAs-C粒・Hr-F Aに伴う軽石を含む。
2. 灰黄褐色シルト質土。φ1~5mmのAs-C粒・Hr-F Aに伴う軽石を含む。
3. 灰黄褐色土と褐色土の混土(貼床層)。

4区2面1住居

0 1:60 2m

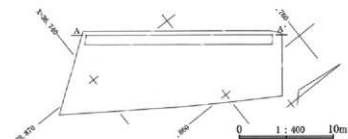


1. 灰褐色粘質土。多量の焼土ブロック含む。
2. 灰黒褐色粘質土。多量の焼土ブロックを含む。
3. 焼土・炭化物・灰褐色粘質土の互層(火床の貼床層)。
4. 焼土ブロックを含む灰褐色粘質土(火床の貼床層)。

0 1:30 1m

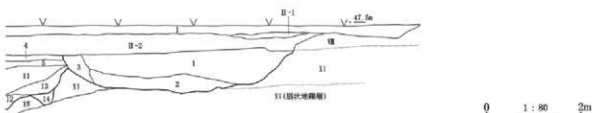
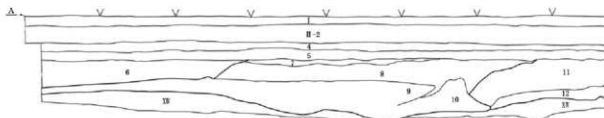
第13図 3区全体図、同区2面、同区4面遺構図

第3編 発掘調査遺構と遺物

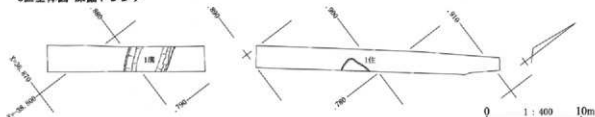


1. 灰褐色シルト。土地改良前の河道。
2. 砂礫層。φ10~100mmの礫。土地改良前の河道。
3. 灰黄褐色シルト。土地改良前の河道。

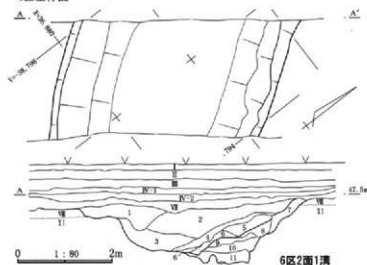
4. 灰褐色シルト。
 5. 暗灰褐色シルト。
 6. 黒灰色シルト。細粒洪水砂をラミナ状に含む。
 7. 黒灰色砂層。
 8. 青灰色シルト。
 9. 砂礫層。φ10~150mmの礫。
 10. 灰白色粗粒洪水砂。φ10~30mmの礫を含む。
 11. 灰褐色洪水砂。細粒洪水砂をラミナ状に含む。
 12. 砂礫層。φ10~150mmの礫。
 13. 褐色土と灰褐色土の混土。
 14. 灰色洪水砂。
- ※ローマ数字は標準土層。



5区全体図・深掘トレンチ



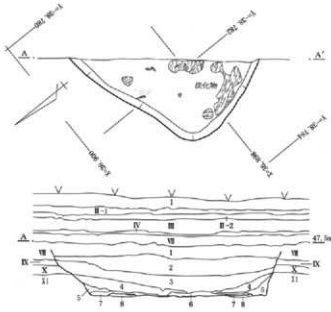
6区全体図



- IV-1. Aa-B粒を含む。灰白色砂質土。
 - IV-2. As-B粒を多く含む。暗赤灰色砂質土。
 - VII. 灰色粘質土。φ5mm~1cmの礫を含む。1mmのHr-F P軽石を含む。
 1. 純灰色粘質土。φ5mm~1cmの礫を少量含む。1mmのHr-F P軽石を含む。
 2. 暗灰色粘質土。φ5mm~1cmの礫をVII層より多く含む。1mmのHr-F P軽石を含む。
 3. 黒褐色粘質土。黄色のホ状ブロックを含む。
 4. 灰色粘質土。φ1mm~1cmの礫を含む。褐色ブロックを含む。
 5. 灰色粘質土。灰色の砂質ブロックを含む。
 6. 灰白色砂層。褐色ブロックを含む。
 7. 純灰色粘質土。灰色ブロックを含む。Hr-F P軽石を含む。
 8. 純灰色粘質土。灰色ブロックを多く含む。
 9. 洪水砂。砂礫層と暗灰色シルト層より成る。
 10. 洪水砂。砂礫層と暗灰色シルト層より成る。
 11. 洪水砂。砂礫層と暗灰色シルト層より成る。
 12. 褐色粘質土。灰色ブロックを含む。
- ※ローマ数字は標準土層。

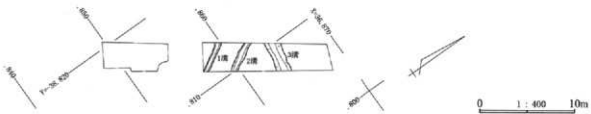
第14図 5区・6区全体、6区2面1溝

第3篇 発掘調査遺構と遺物

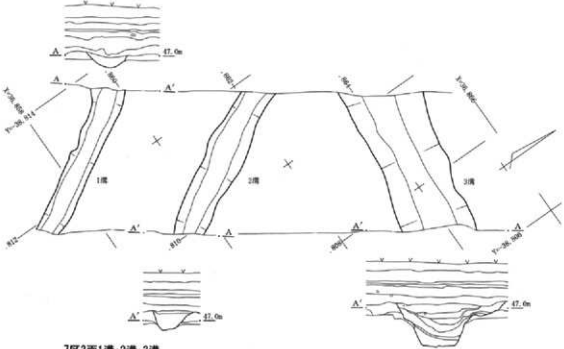


1. 暗褐色粘質土。Hr-F A 軽石を少量含む。
 2. 暗褐色粘質土。1層よりやや明るい。Hr-F A 軽石を少量含む。
 3. 褐色粘質土。黒色土ブロックを含む。Hr-F A 軽石を少量含む。
 4. 暗褐色粘質土。Hr-F A 軽石を少量含む。
 5. 褐色粘質土。黄色土ブロックを含む。
 6. 褐色粘質土。黄色土ブロックと炭化物を少量含む。
 7. 褐色粘質土。焼土ブロックと炭化物を多く含む。
 8. 暗黄褐色粘質土。黄色土と黒色土の混土(塩床層)。
- ※ローマ数字は標準土層。

6区3面1住居跡



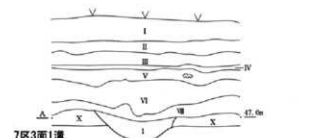
7区全体図



7区3面1溝・2溝・3溝

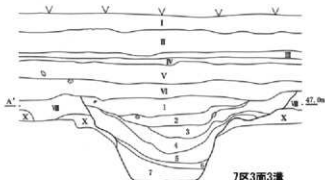
第15図 6区遺構、7区全体、7区遺構図

第3篇 発掘調査遺構と遺物

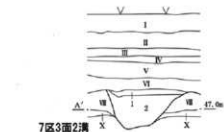


7区3面1溝

1. 褐灰色粘質土。黄色ブロック・Hr-F A軽石を含む。φ1~3cmほどの礫を少量含む。
- ※ローマ数字は標準土層。



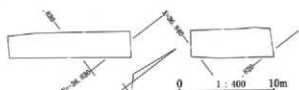
7区3面3溝



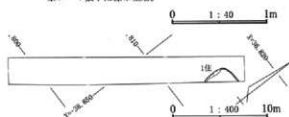
7区3面2溝

1. 褐灰色粘質土。灰白色ブロック・Hr-F A軽石を含む。
 2. 暗褐色粘質土。黄色ブロック・Hr-F A軽石を含む。
- ※ローマ数字は標準土層。

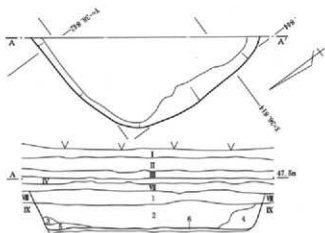
1. 暗褐色粘質土。Hr-F A軽石を含む。
 2. 褐灰色粘質土。Hr-F A軽石を少量含む。φ3~5cmの礫を含む。暗褐色ブロックを含む。
 3. 暗黄灰色粘質土。Hr-F A軽石を少量含む。黄灰色ブロックを含む。
 4. 明黄褐色シルト。Hr-F A軽石を少量含む。褐色ブロックを含む。
 5. 暗褐色粘質土層と黄灰色粘土層が交互に堆積する。
 6. 灰白色砂質土。褐色ブロックを含む。
 7. 青灰色洪水層。暗褐色粘土層・灰白色粘土層・砂礫層から成る。
- ※ローマ数字は標準土層。



8区全体図



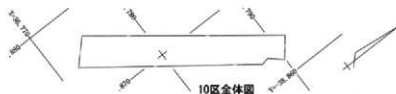
9区全体図



9区3面1住居

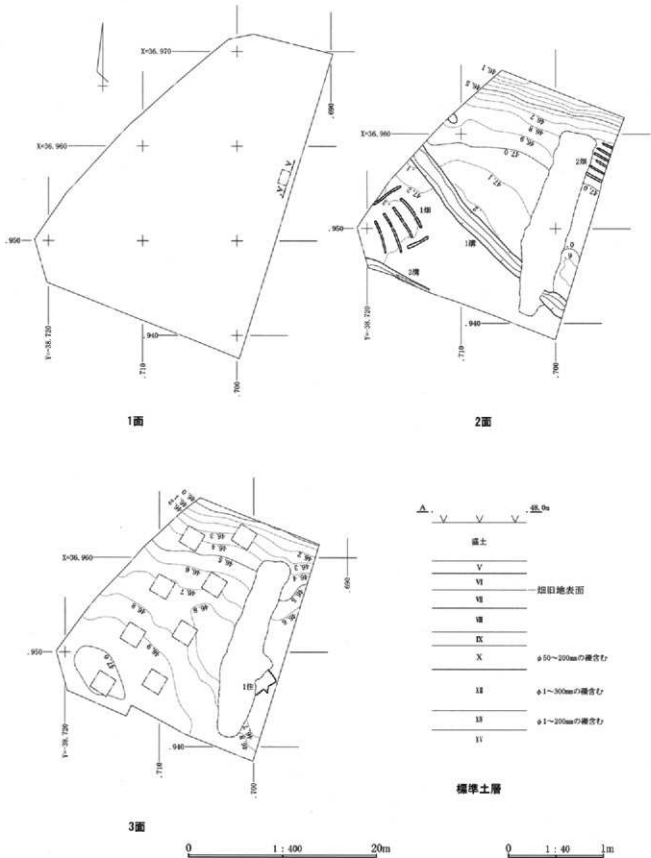
1. 黒褐色土。φ1~8mmのHr-F Aに伴う白色軽石含む。焼土ブロック含む。
 2. 明黒褐色土。φ1~3mmのHr-F Aに伴う白色軽石含む。
 3. 黄褐色土。
 4. 暗黄褐色土。
 5. 黒褐色土。
 6. 暗褐色土(貼床層)。
- ※ローマ数字は標準土層。

0 1:60 2m

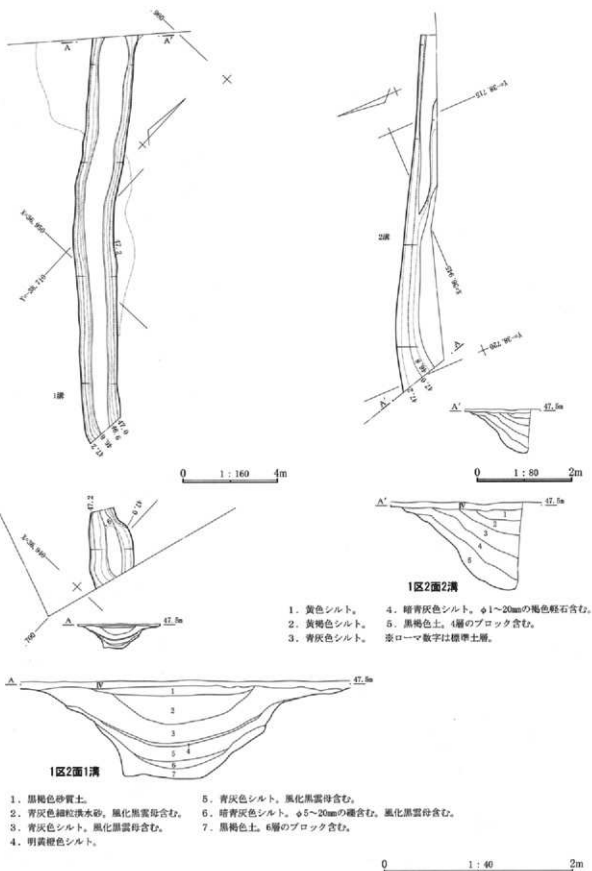


10区全体図

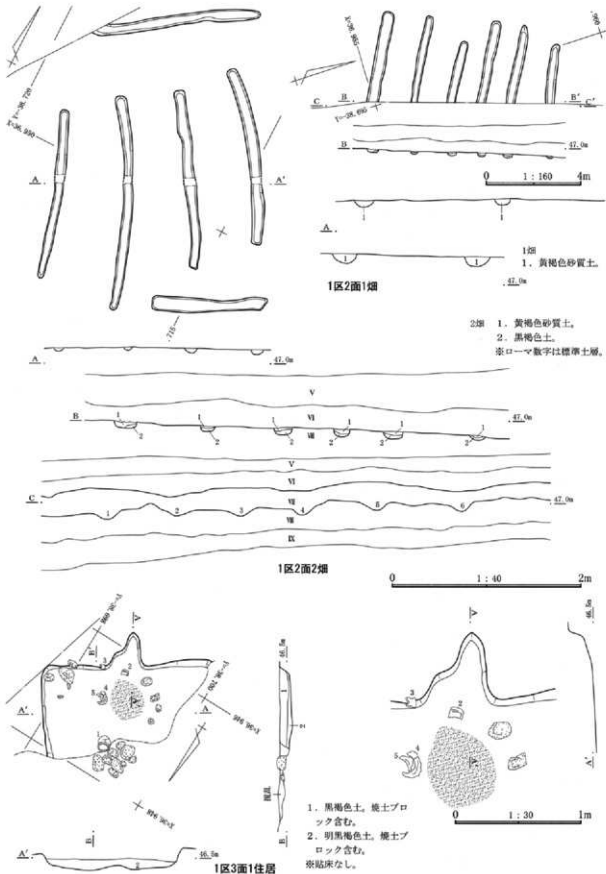
第16図 7区遺構、8・9・10区全体、9区遺構図



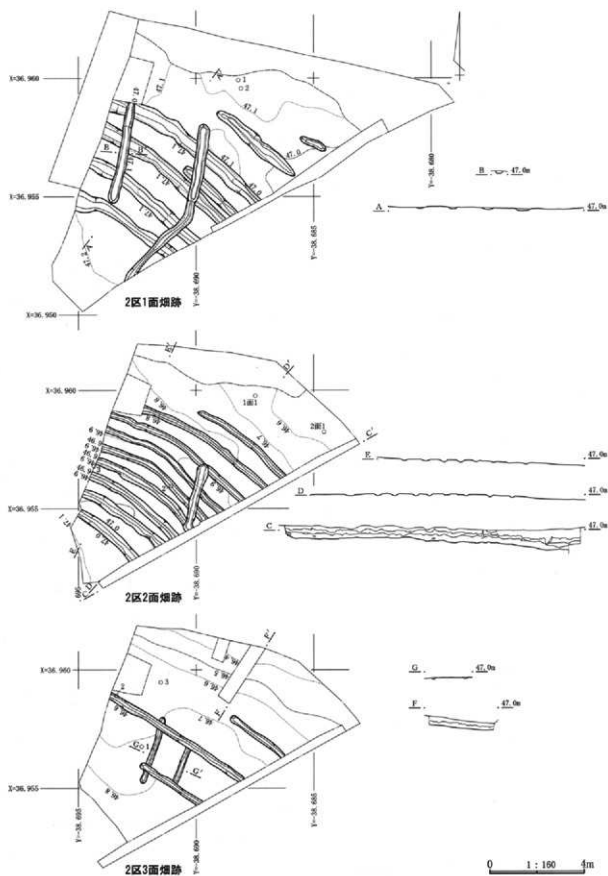
第17図 1区1~3面全体図と標準土層



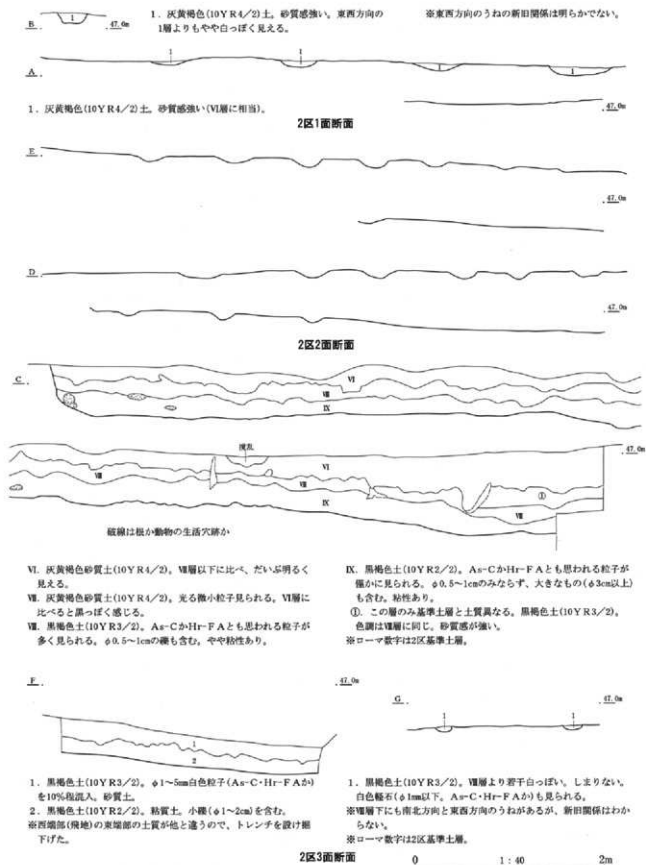
第18図 1区2面1・2溝遺構図



第19図 1区2・3面遺構図



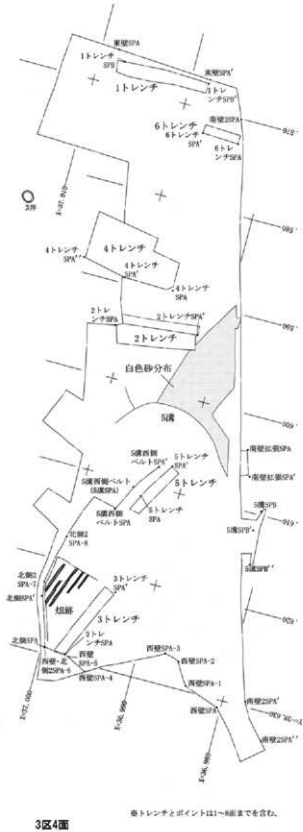
第20図 2区全体と1～3面遺構図



第21図 2区1~3面断面図



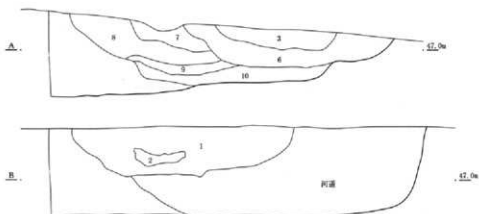
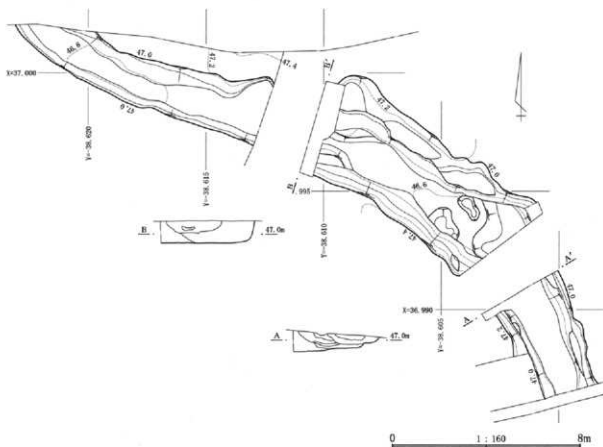
第22図 3区1・2面全体図



第23図 3区3・4面全体図



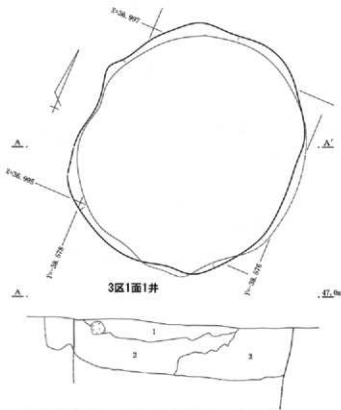
第24図 3区5・6面全体図



3区1面4溝

1. にぶい黄褐色砂質土(10Y R4/3)。炭化物粒見られる。
2. 褐灰色砂粒(10Y R4/1)。粒径約0.5mm。きわめて粗い。
3. にぶい黄褐色砂質土(10Y R4/3)。褐灰色砂粒(10Y R4/1)を30%程度含む。ボンボンしてしまりゆるい。砂粒雑か。
4. にぶい黄褐色砂質土(10Y R4/3)。褐灰色砂粒(10Y R4/1)を10%程度含む。3より粒が粗い。
5. にぶい黄褐色砂質土(10Y R4/3)。褐灰色砂粒(10Y R4/1)を30%程度含む。φ2~5mm大の小礫見られる。3に似る。
6. にぶい黄褐色砂質土(10Y R4/3)。褐灰色砂粒(10Y R4/1)を30%程度含む。φ2~5mm大の小礫10%程度含む。4に似る。
7. 褐灰色砂粒(10Y R5/1)。砂粒がやや粗い。
8. 褐灰色砂粒(10Y R5/1)。鉄分沈着。砂粒雑かい。
9. 褐灰色砂粒(10Y R5/1)。φ1cm大の礫10%程度含む。礫のためガラガラ感あり。
10. 褐灰色砂粒(10Y R4/1)。砂粒きわめて細かい。鉄分沈着。

第26図 3区1面4溝遺構図



1. 灰黄褐色砂質土(10Y R4/2)。炭化物粒見られる。鉄分沈着。
 2. 褐灰色砂粒(10Y R5/1)。
 3. 褐灰色砂粒(10Y R4/1)。2層より粒粗い。φ0.5~1cm大の礫5%程度含む。
- ※各一見して新しい土層印象で近世か。

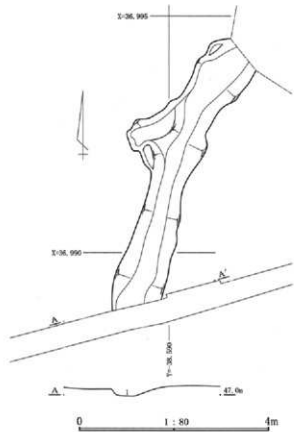
0 1 : 40 2m

3区1面3溝

1. 暗褐色砂質土(10Y R3/4)。炭化物粒見られる。ボソボソしている。

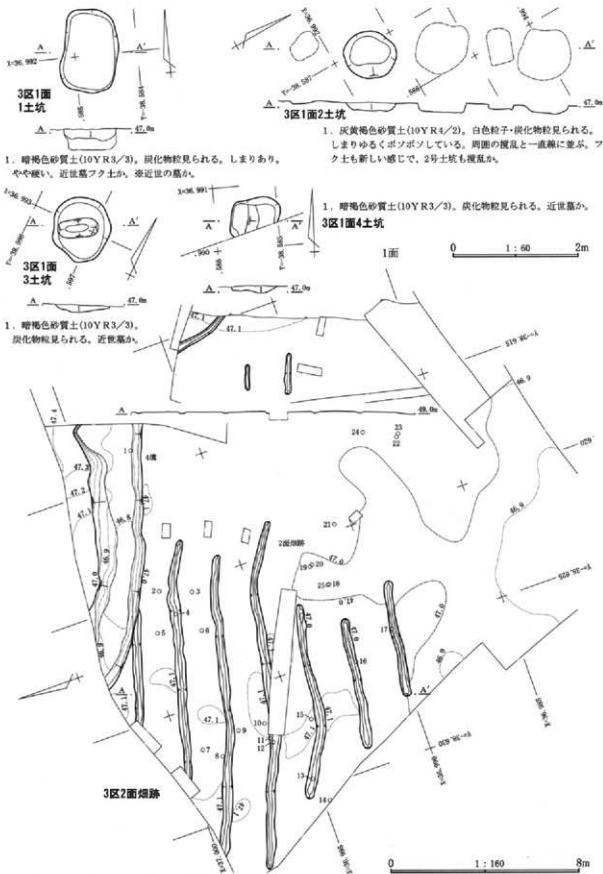


0 1 : 30 1m

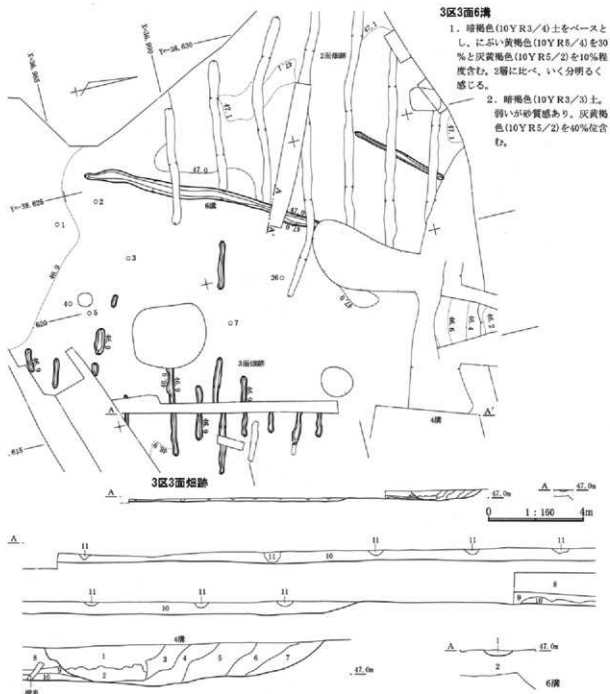


0 1 : 80 4m

第27図 3区1面遺構図

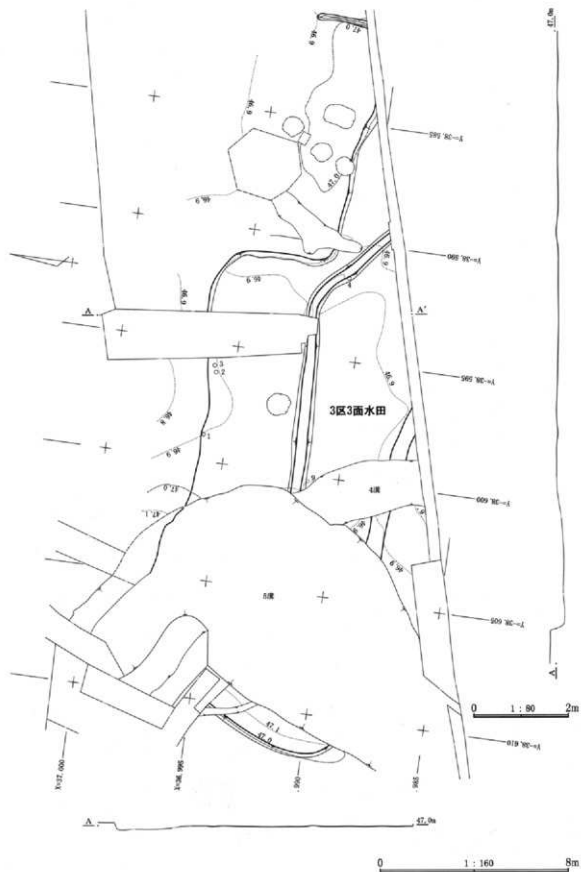


第28図 3区1・2面遺構図

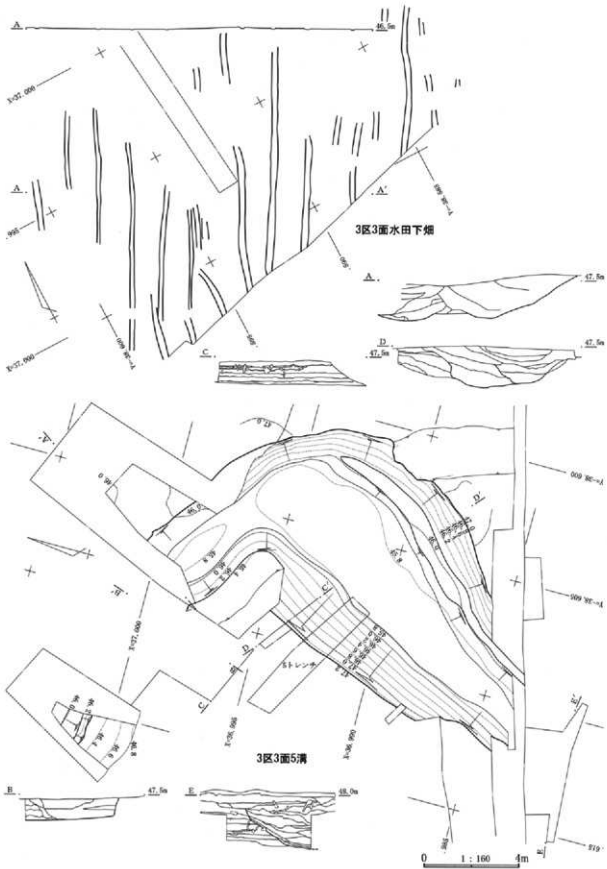


1. にぶい黄褐色土(10YR4/3)、固くしまっている。灰黄褐色(10YR6/2)と暗褐色土(10YR3/4)も見られる。
2. 褐灰色土(10YR5/1)。砂質。にぶい黄褐色土(10YR4/3)を10%含む。φ1cm位の礫も見られる。
3. にぶい黄褐色土(10YR4/3)。砂質感あり。
4. にぶい黄褐色土(10YR4/3)。φ1mm以下白色粒子あり。灰黄褐色(10YR6/2)も見られる。さらさらしている。2層の砂も混入している。
5. にぶい黄褐色土(10YR4/3)、固くしまっている。φ0.5~1cm位の礫・褐色土(10YR4/4)とにぶい黄褐色(10YR5/3)も混入。
6. にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ブロック状(φ3cm位)に褐色土(10YR4/4)も見られる。φ1cm位の礫も混入。
7. 褐灰色土(10YR5/1)。砂質。φ0.5~1.5cmの礫90%含む。灰黄褐色土(10YR4/2)が混入している。
8. 暗褐色土(10YR3/4)。固くしまる。9層の褐色土(10YR4/6)が6%位含まれる。8~10層のうち一番固い。基本土層と合うか不明。
9. 褐色土(10YR4/6)。やや固い。灰黄褐色(10YR5/2)5%位含む。基本土層と合うか不明。
10. 暗褐色(10YR3/4)と灰黄褐色(10YR4/2)の混土。褐灰色(7.5YR6/1)と暗褐色(7.5YR3/3)も見られる。
11. 暗褐色(10YR3/4)と灰黄褐色(10YR4/2)の混土。黄褐色土(10YR5/8)20%程度含む。

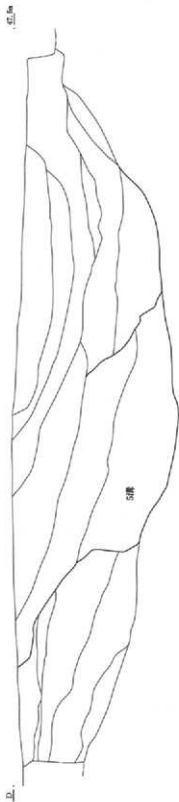
第29図 3区3面遺構図



第30図 3区3面水田遺構図



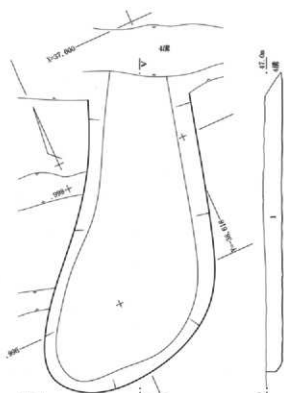
第31図 3区3面遺構図



1. 暗褐色土(10Y R3/4)、粘土粒・炭化物粒各1%程度含む。
2. 暗褐色土(10Y R3/4)、炭化物粒見られる。
3. 暗褐色砂粒(10Y 3/4)。
4. 灰白色粘質土(10Y R4/1)、 $\phi 0.5 \sim 1\text{cm}$ の礫を5%程度含む。
5. 灰褐色砂粒(10Y R4/2)、 $\phi 0.5 \sim 1\text{cm}$ の礫を10%程度含む。
6. A+B混層。
7. 細かい黄褐色粘質土(10Y R4/3)、炭化物粒見られる。
8. 細かい黄褐色砂粒(10Y R4/3)、粘粒約 5-1mm、きわめて粗い、炭化物粒見られる。
9. 細かい黄褐色(5/3)、砂層、互層も見られる、近・現代の削平により一部混土している。
10. 9層と11層の混土層。
11. 黒褐色(2/2)、砂層、やや粗い砂の層、互層が見られる。
A+B含む。
12. 灰黄褐色(5/2)、砂層、やや粗い砂の層、A+B含む。
13. 細かい黄褐色(4/3)、砂質土、12層や灰白色(6/1)砂層が互層、A+B含む。
14. A+B、フラスコを含む。
15. 7と同じ。
16. 灰黄褐色(4/2)、砂質土、粗い砂が混在、炭化物を含む、層上部にはA+Bも見られる。
17. 11と同じ。
18. 細かい黄褐色(5/3)、砂層、互層が主体となる層。
19. 17に近似。
20. 細かい黄褐色(5/3)、粘質土、24-26-28層がブロック状に互入、 $\phi 1 \sim 5\text{cm}$ の礫も含む、炭化物も盛かに見られる。18層に出現。
21. 灰黄褐色(4/2)、粘質土、A+Bを含む、A+B混層と層となるか、互層に相当する層か、互層に相当か。
22. 灰黄褐色(6/2)、粘質土、互層に相当か。
23. 細かい黄褐色(5/4)、粘質土、やや混土するもV層に相当、3層水田跡土についてはわからないが、黒いかもれない。
24. 細かい黄褐色(5/3)、粘質土、互層に相当、3層水田跡土についてはわからないが、黒いかもしれない。
25. 灰白色(7/1)、砂質土、湧層に相当。
26. 細かい黄褐色(4/3)、粘質土、層下部中心に27層が混土するが互層に相当。
27. 暗褐色(3/3)、粘質土、白色礫石(C・F A)を多く含む、X層に相当。
28. 暗褐色(5/3)、粘質土、層上部にC・F A粒石も見られるが互層に相当。
29. 細かい黄褐色(5/3)、粘質土、湧層に相当、互層により平垣ではないが互層に相当。
30. 粘質土、湧層に相当、粘質土、湧層に相当、湧層はやや強さもありまっている、互層な層を造っているようにも思われる、明出層の範囲では、5号溝から続くように用へ互層的な土が確認できる。5号溝を埋めて造ったものか、5層はその時の土に混った層では、湧水などの影響でA+Bを含みながら混土し、堆積したのではないかと考える。

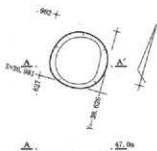
第33図 3区3面5溝遺構図

第3篇 発掘調査遺構と遺物



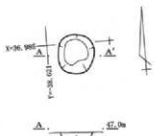
1竪穴

1. 暗褐色砂質土(10YR3/3)。灰色土(10Y6/1)10%位見られる。中近世のものと思われる。4号溝に一部かかると。



5坑

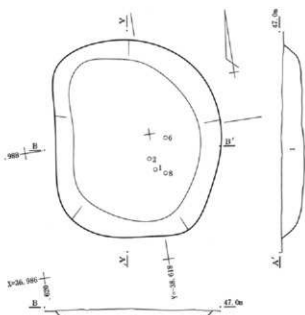
1. 暗褐色(10YR3/3)土。面くしまる。灰黄褐色(10YR4/2)土5%見られる。遺物全くなし。



7坑

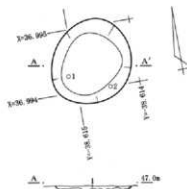
1. 灰黄褐色土(10YR4/2)。弱い粘性あり。固くしまっている。褐色土(10YR4/4)も見られる。

0 1:60 2m



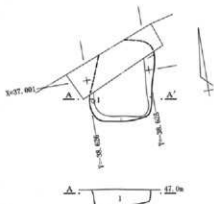
2竪穴

1. 暗褐色(10YR3/3)土。粘性あり。灰色(10YR6/1)土も見られる。



6坑

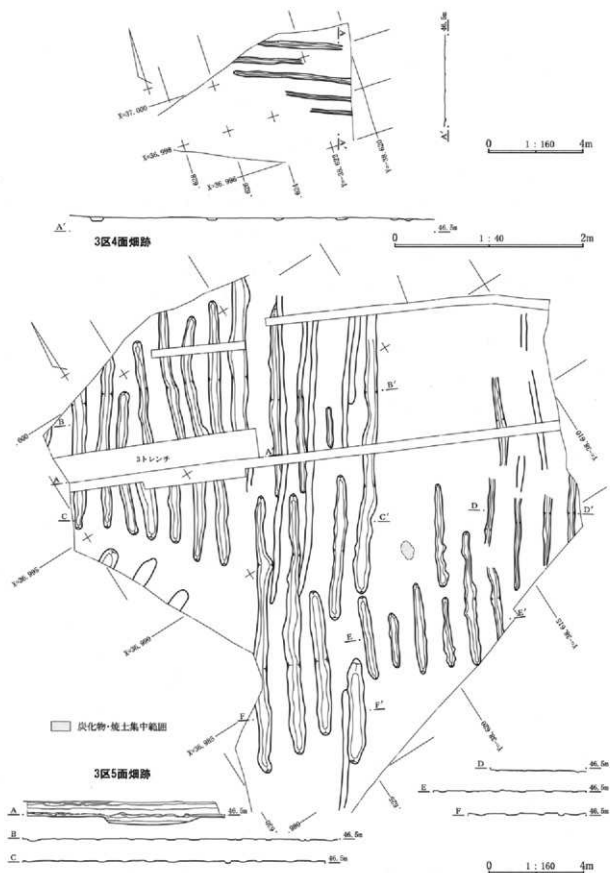
1. 暗褐色(10YR3/3)土。粘性あり。にぶい黄褐色(10YR5/3)土10%含む。
2. 暗褐色(10YR3/4)土。砂質感あり。にぶい黄褐色(10YR5/3)土も見られる。



8坑

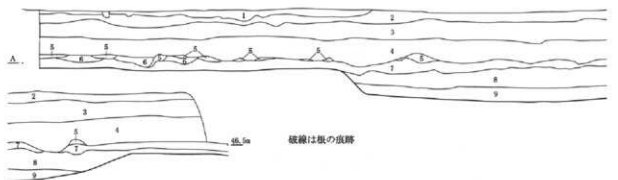
1. 暗褐色土(10YR3/4)。弱い砂質感あり。黄褐色土ブロック(10YR5/6, φ1cm)と細灰色土(10YR8/1)と白色粒子(φ1mm以下)も見られる。

第34図 3区3面遺構図



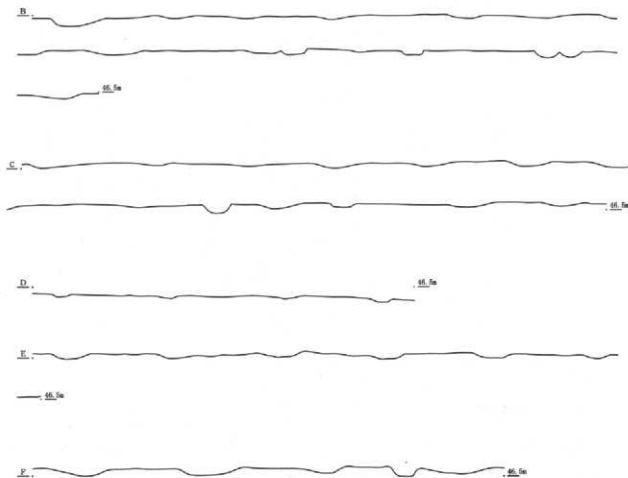
第35図 3区4面遺構図

第3篇 発掘調査遺構と遺物



1. 明黄褐色(6/6)。砂質土。2層がブロック状に存在。3面を覆う洪水層。
2. 灰黄褐色(5/2)。砂質土。層西側(左)はほぼ均質。東側は3層が混土する。粘性がなく水田耕土にはならないのでは。酸化変がやや多く見られる。
3. にがい黄褐色(5/3)。砂質土。酸化変がやや多く見られる。
4. にがい黄褐色(4/3)。シルト。3層に近似。3層よりもやや粘性がある。

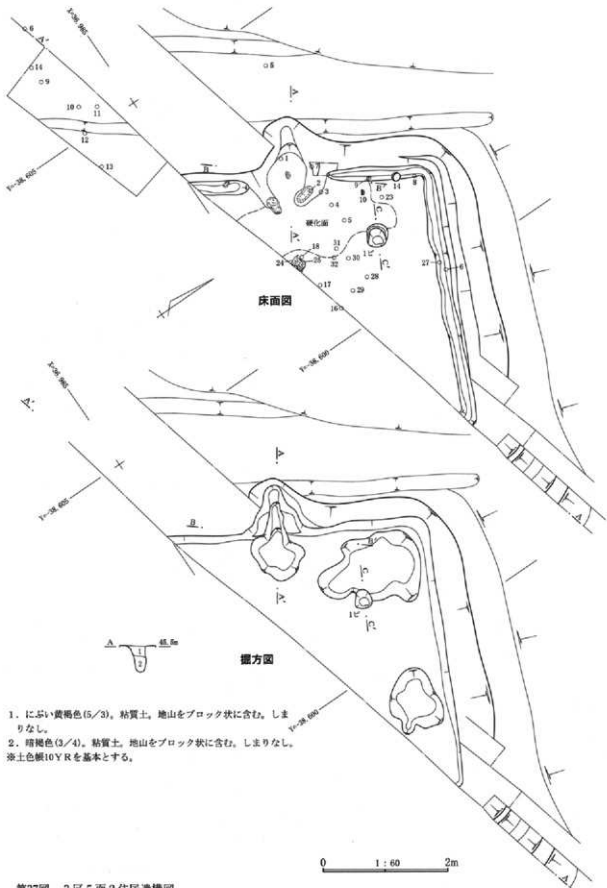
5. 褐灰色(6/1)。砂質土。4層がブロック状に少量混在する。5面を覆う洪水層。5面崩として懸れる土。
6. 4層を主体に5層が混土。5面崩として懸れる土。
7. 暗褐色(3/3)。粘質土。As-C-Hr-F A軽石を少量含む。8層と比較し粘性が強い。
8. 黒褐色(3/2)。粘質土。As-C-Hr-F A軽石を多く含む。
9. 8層に近似。軽石は少なく8層と比較しやや粘性が強い。茶土色燧10YRを基本とする。



3区5面畑断面図

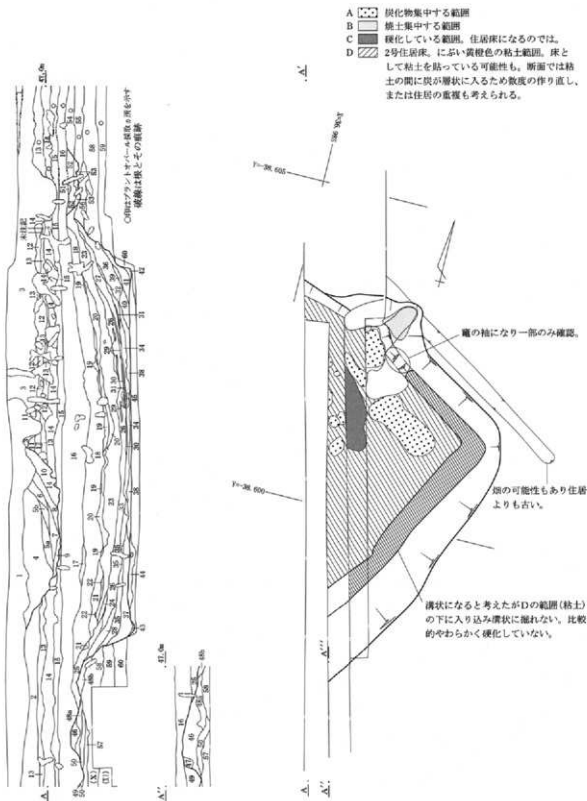
0 1:40 2m

第36図 3区5面畑断面図



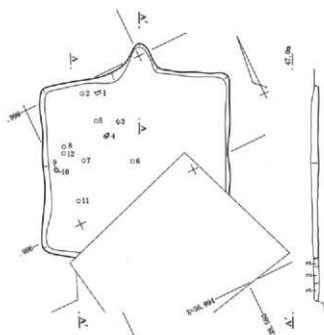
1. にぶい黄褐色(5/3)。粘質土。地山をブロック状に含む。しまりなし。
2. 暗褐色(3/4)。粘質土。地山をブロック状に含む。しまりなし。赤土色紙10Y Rを基本とする。

第37図 3区5面2住居遺構図



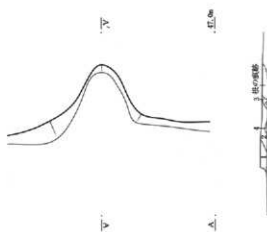
第39図 3区5面2住居遺構図

1. 表土。
2. 暗褐色(2/4)。砂質土。灰黄褐色土に近い。表土との混土もあ
るがII層相当。
3. にぶい黄褐色(4/3)。砂質土。炭化物を僅かに含む。混土し表
土に近い(?)がIII層に相当か。
4. にぶい黄褐色(4/3)。砂質土。3層に近似。3層より砂を多く含
む。4号溝フタ土。
- 5a. にぶい黄褐色(4/3)。砂層。やや粗い砂が互層に多く入る。4
号溝フタ土。
- 5b. にぶい黄褐色(4/3)。砂質土。5a層に近似。砂は少ない。4号
溝フタ土。
6. にぶい黄褐色(4/3)。砂質土。5a層よりも粗い砂を含む。φ1
cm程度の礫も散在。4号溝フタ土。
7. にぶい黄褐色(4/3)。砂層。より粗い砂が互層に入る。φ1cm
程度の礫も散在。4号溝フタ土。
8. にぶい黄褐色(4/3)。砂質土。6層と10層の混土。4号溝フタ土。
9. にぶい黄褐色(5/3)。砂質土。層下部を中心に15層が混土。4
号溝フタ土。
10. にぶい黄褐色(4/3)。砂層。12-13層がブロックで混土。φ1cm
程度の礫・炭化物散在。4号溝フタ土。
11. 灰黄褐色(4/2)。砂質土。12層を主体に、層上部を中心に3層
を混土。
12. 灰黄褐色(4/2)。粘質土。ち密。しまりもある。
13. にぶい黄褐色(5/3)。粘質土。層下部を中心にIV層が混在。II
層相当。
14. 明黄褐色(6/6)。シルトに近い粘質土。黄色軽石散見。V層相
当。
15. 灰褐色(5Y R 6/2)。粘質土。ち密。マンガンの凝集が多く見
られる。VI層相当。
16. 灰黄褐色(5/2)。粘質土。15層が層上部に混在。VII層相当。
17. にぶい黄褐色(6/3)。粘質土(洪水層の一部)。
18. にぶい黄褐色(5/3)。粘質土。ち密。しまりもある。白色軽石
僅かに散見。2号住フタ土。
19. 灰黄褐色(6/3)。粘質土。ち密(洪水層の一部)。2号住フタ
土。
20. にぶい黄褐色(5/3)。やや粘質。19層が小ブロックで少量混在。
2号住フタ土。
21. 褐灰色(4/1)。粘質土。23層に近似。18層が少量混在。2号住
フタ土。
22. 灰黄褐色(6/2)。粘質土。23層を主体に19層が混土。2号住フ
タ土。
23. 褐灰色(4/1)。粘質土。炭化物・焼土粒をやや多く含む。白色
軽石散在。2号住フタ土。
24. 灰黄褐色(6/2)。やや粘質。26層を主体に23層が混土。2号住
フタ土。
25. 灰黄褐色(5/2)。やや粘質。23層に近似。2号住フタ土。
26. にぶい黄褐色(5/3)。粘質土。炭化物を多く含む。焼土粒をや
や多く見られる。2号住フタ土。
27. 灰黄褐色(5/2)。粘質土。23層に近似。炭化物・焼土粒含む。
2号住フタ土。
28. 灰黄褐色(4/2)。粘質土。35層に近似。炭化物・焼土粒・白色軽
石含む。2号住フタ土。
29. 黒褐色(3/1)。粘質土。炭化物を多量に含む層。2号住フタ土。
30. 黒色(2/1)。炭化物の層。2号住フタ土。
31. にぶい黄褐色(7/3)。粘質土。19層に近似。ち密(住居貼り床
粘土か、または洪水層の一部)。2号住フタ土。
32. にぶい黄褐色(5/3)。粘質土。27層を主体に31層が混土。2号
住フタ土。
33. 灰黄褐色(6/2)。粘質土。26層に近似。26層を主体に34層が混
土。2号住フタ土。
34. にぶい黄褐色(6/3)。粘質土。粘性強い。炭化物を多く含む。
31層が混土。2号住フタ土。
35. 褐灰色(4/1)。粘質土。白色軽石散在。焼土・炭化物も僅かに
見られる。2号住フタ土。
36. 褐灰色(4/1)。粘質土。白色軽石散在。焼土・炭化物を含む。
2号住フタ土。
37. 黒褐色(3/1)。やや粘質。白色軽石散在。焼土・炭化物を含む。
2号住フタ土。
38. 褐灰色(4/1)。粘質土。炭化物・焼土粒を含む。層上部を中心
に34層が小ブロックで混在。2号住フタ土。
39. にぶい黄褐色(5/3)。やや粘質(洪水層の一部)。2号住フタ
土。
40. 褐灰色(4/1)。粘質土。炭化物・焼土粒を多く含む。白色軽石
も散在。2号住フタ土。
41. 黒褐色(3/1)。粘質土。白色軽石・炭化物を少量含む。2号住フ
タ土。
42. 暗褐色(3/4)。粘質土。地山ブロックが僅かに見られる(2号住
居周溝のフタ土)。
43. 黒褐色(2/2)。粘質土。炭化物を多く含む。焼土粒も見られる
(2号住居周溝のフタ土)。
44. 暗褐色(3/3)。粘質土。炭化物僅かに含む(2号住居周溝の土
か)。
45. 灰黄褐色(4/2)。やや粘質。地山ブロックが混在(2号住居周溝
の土か)。
46. 褐灰色(4/1)。やや粘質。58層を主体に57層が混土。白色軽石
も見られる(2号住居周溝)。
47. にぶい黄褐色(5/3)。粘質土。49層に近似。49層がブロック状
に混入(2号住居周溝)。
- 48a. 褐灰色(5/1)。やや粘質。46層に近似。50層を含む(2号住居
周溝)。
- 48b. 褐灰色(5/1)。やや粘質。48a層よりも50層を多く含む(2号
住居周溝)。
49. 灰黄褐色(5/2)。粘質土。VIII層相当。
50. 灰黄褐色(6/2)。粘質土。VIII層相当。VIII層が57層と混土。
51. 暗灰色(N3/1)。焼土粒(やや大きなものを含む)を多量に含む。
炭化物も多量に含む。10号土坑フタ土。
52. 灰黄褐色(4/2)。粘質土。炭化物・焼土粒を含む。10号土坑フ
タ土。
53. にぶい黄褐色(5/3)。粘質土。灰黄白色洪水層(VII層)が混在。
10号土坑フタ土。
54. 暗褐色(3/4)。粘質土。IX層に相当。
55. にぶい黄褐色(4/3)。粘質土。白色軽石を少量含む。IX層相当。
56. にぶい黄褐色(4/3)。粘質土。灰黄色(2.5Y R7/2)洪水層(VII
層相当)が混在。白色軽石散在。
57. にぶい黄褐色(4/3)。粘質土。IX層に相当。
58. 黒褐色(3/2)。粘質土。白色軽石をやや多く含む。X層相当。
59. 黒褐色(3/1)。粘質土。均質。白色軽石を含まない層。II層相
当。
60. 暗褐色(3/4)。粘質土。II層相当。
※土色帳10Y Rを基本とする。ローマ数字の基本土層は3区基本土
層。白色軽石は、A-S-CまたはH-F-A。



1. 黒褐色土(10YR2/3)。砂質感あり。φ1mm以下の白色粒子を5%程度含む。
2. 灰黄褐色砂質土(10YR4/2)。土はボソボソしている。別遺構埋土か。
3. にぶい黄褐色砂質土(10YR4/2)。白色粒子は少ない。地山層。

0 1:60 2m

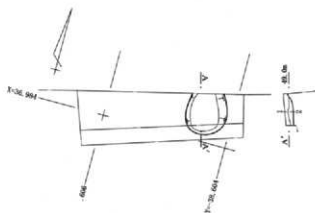


1. 暗褐色砂質土(3/4)。白色軽石を僅かに含む。焼土散在。3号住のフタ土になるか。
 2. 灰黄褐色砂質土(4/2)。白色軽石を僅かに含む。1層と比較し、僅かに多く焼土を含む。φ1cm程の礫が散在。竈フタ土になるか。
 3. にぶい黄褐色砂質土(4/3)。白色軽石を僅かに含む。焼土を少量含む。φ1cm程の礫が散在。竈フタ土になるか。
 4. にぶい黄褐色粘質土(4/4)をブロックで含む。竈フタ土になるか。
- ※土色帳10YRを基本とする。

0 1:30 1m

※3住居跡から地城としては数少ない弥生時代中期の土器類が床層付近取り上げ遺物中に多量に含まれていた。3住居跡は竈を持つ平安時代以降の住居跡であり、住居以下に弥生時代中期の面が存在した可能性がある。

3区5面3住居跡



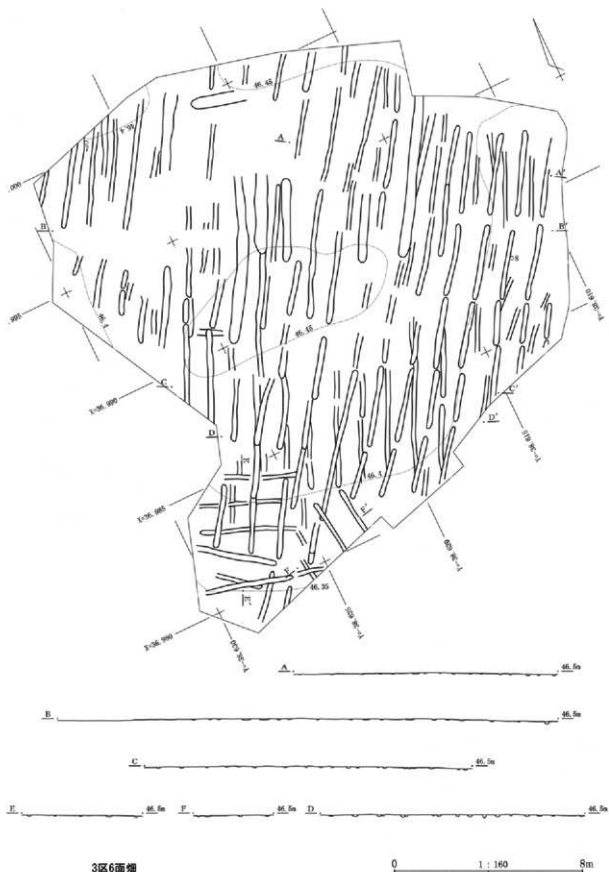
3区5面10土坑

1. 灰黄褐色粘質土(10YR5/2)。焼土粒・炭化物も見られる。褐灰色土(10YR4/1)も混入。遺物片10数点あり。
 2. 灰黄褐色粘質土(10YR4/2)。灰黄褐色土(10YR6/2)も一部混入。しまりややゆるい。φ1mm以下の白色粒子見られ、A-C・H-F Aか。
- ※10号土坑下の土層は混土している様にも見える。

南壁セクションでは焼土層が多量に入る部分があり、住居となる可能性がある。調査区範囲の都合で、それ以上は不明である。

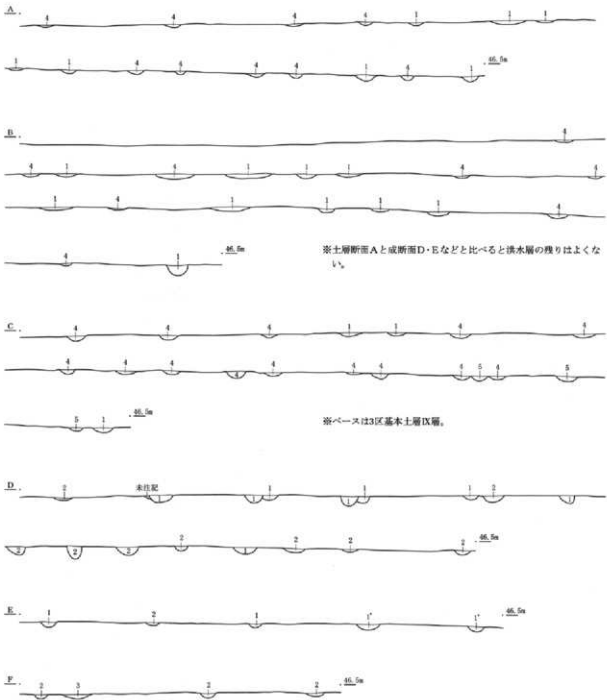
0 1:60 2m

第40図 3区5面遺構図



3区6面畑

第41图 3区6面畑遺構图



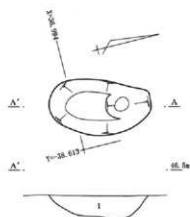
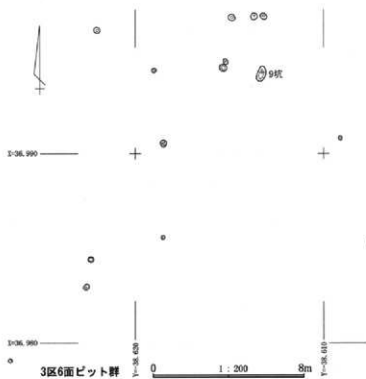
1. 3区基本土層のⅨ層をベースとする。6面の洪水層が残っている。
- 1'. 若干の洪水層が残っている。ベースは3区基本土層Ⅸ層。
2. 3区基本土層のⅨ層をベースとする。暗褐色(10Y R3/4)と白色粒子も見られる。
3. 暗褐色(10Y R3/4)土。白色粒子が他より多い(3%)。しまりも他よりある。

4. にぶい黄褐色(10Y R3/4)土。砂質感あり。
5. 砂質感強い。暗褐色(10Y R3/4)とにぶい黄褐色(10Y R3/4)に近い感じがする。

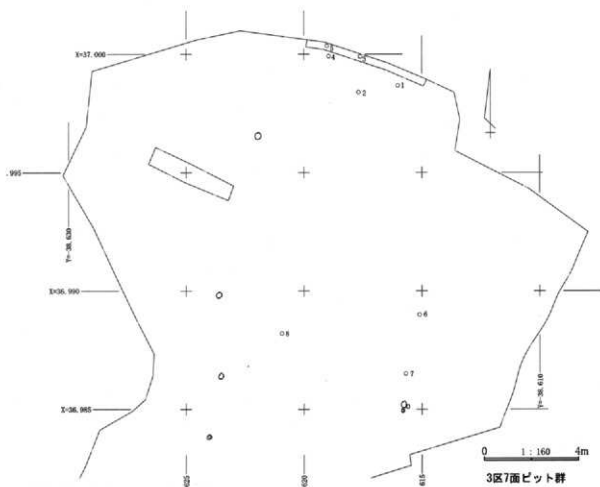
0 1 : 40 2m

第42図 3区6面畑断面図

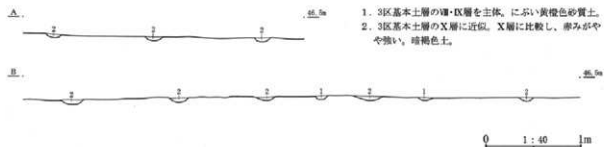
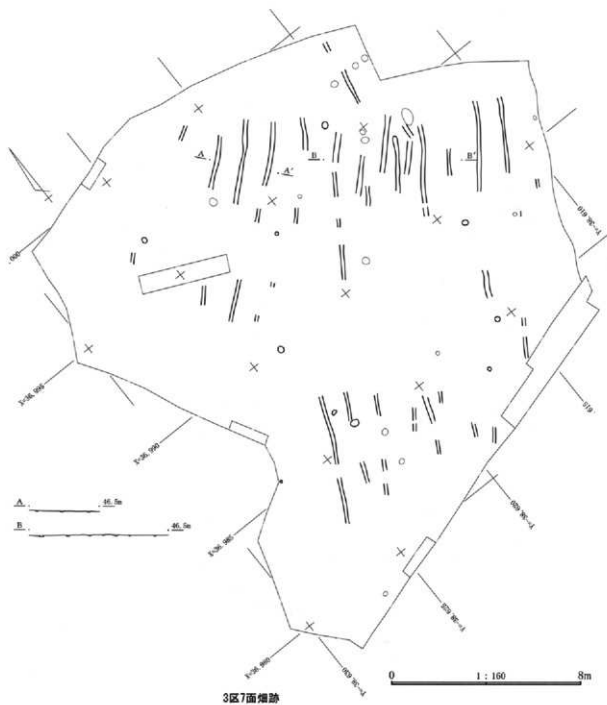
第3篇 発掘調査遺構と遺物



1. 3区基本土層のⅧ・IX層を主体、にぶい黄褐色砂質土。



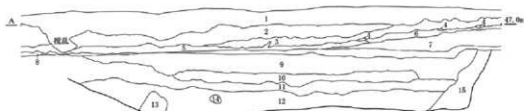
第43図 3区7面遺構図



1. 3区基本土層の礫・灰層を主体、にぶい黄褐色砂質土。
2. 3区基本土層のX層に近位。X層に比較し、赤みがやや強い、暗褐色土。

第44図 3区7面遺構図

第3篇 発掘調査遺構と遺物

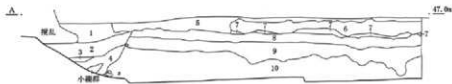


1. 表土。炭化物も見られる。
2. 灰黄褐色(10Y R5/2と4/2)の産土。砂質土。φ1cm以下の礫も含む。炭化物も見られる。
3. 灰黄褐色土(10Y R4/2)。にぶい黄褐色土(10Y R5/3)を20%位含む。砂質土。
4. にぶい黄褐色土(10Y R5/4)。砂質土。2層の土が15%位混入。
5. 灰黄褐色土(10Y R4/2)。褐灰色土(5Y R7/1)を30%含む。炭化物含む。弱い砂質感あり。
6. 灰黄褐色土(10Y R4/2)。白色粒子(φ0.5mm以下)見られる。砂質感あり。
7. 灰黄褐色土(10Y R4/2)。6層よりは弱い砂質感あり。白色粒子(φ0.5mm以下)見られる。
8. 灰黄褐色土(10Y R4/2)。炭化物30%含む。
9. 灰黄褐色土(10Y R4/2)。砂質感あり。φ0.5~1cmの礫混入。
10. 灰黄褐色土(10Y R4/2)。砂質感あり。φ0.5~3cmの礫80~90%混入。
11. 灰黄褐色土(10Y R4/2)。灰黄褐色(10Y R5/2)も見られる。砂質土。φ0.5cm以下の礫含む。
12. 灰黄褐色(10Y R4/2)。砂層。φ0.5~1cmも見られる。
13. 灰黄褐色(10Y R4/2)の中に黒褐色土(10Y R2/3)が10%位混入。砂質感あり。ボンボンしている。10層の土も見られる。
14. にぶい黄褐色土(10Y R4/3)。砂質土。比較的しっかりしている。10層の土も見られる。
15. 黒褐色土(10Y R2/3)。φ0.5~4cmの礫50%位含む。

1トレンチ

※2トレンチ断面図は3区4・5面の畑遺構と関連させる必要があったため同畑遺構図にあり。

2トレンチ



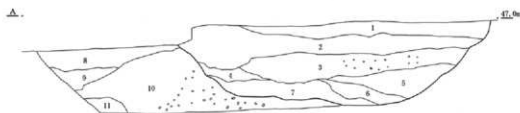
1. 黒褐色砂質土(10Y R3/2)。光る粒子見られる。粒子大変細かい。
2. 黒褐色砂質土(10Y R3/2)。1層に比べ一部苔っぽく見えるところあり。にぶい黄褐色土(10Y R4/3)も混じる。粒子はとて細かい。
3. にぶい黄褐色(10Y R4/3)と褐灰色(10Y R5/1)の砂が70~80%を占める。黒褐色土(10Y R3/2)も見られる。砂の粒子は1・2・4層より大きい。
4. 黒褐色(10Y R3/2)と褐灰色(10Y R5/1)とにぶい黄褐色(10Y R4/3)の産土。いずれも砂質感あり。φ1~4cmの礫が15%ほど混じている。
5. にぶい黄褐色土(10Y R4/3)をベースとし、灰黄褐色土(10Y R5/2)を10%程度含む。若干苔っぽく見えるところもある。光る粒子(φ1mm以下)も見られる。
6. にぶい黄褐色(10Y R4/3)。砂質土。にぶい黄褐色(10Y R7/3)5%程度混入。褐色土(10Y R4/4)。鉄分沈着も5%程度含む。φ1mm以下白色粒子見られる。
7. にぶい黄褐色土(10Y R4/3)。ややしみる。φ1mm以下の白色粒子(8層のもの)も見られる。φ1cm以下の礫あり。
8. 黒褐色土(10Y R3/2)。やや固くしみる。As-CまたはHr-F Aかと思われるφ1~3mmの白色粒子多く含む。φ1cm以下の礫あり。
9. 黒褐色土(10Y R3/2)。ゆるい。8層と同じと思われる白色粒子あり。φ1cm以下の礫あり。
10. にぶい黄褐色土(10Y R4/3)をベースとし、黒褐色土(10Y R3/2)が30%位混入している。φ1~5cmの礫あり。ややゆるい。

3トレンチ

※各トレンチ断面ポイントは3区4面全体图中にあり。



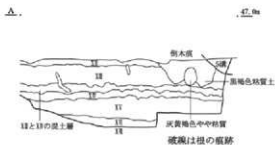
第45図 3区各トレンチ土層断面図



1. 灰黄褐色(10YR4/2)、砂質土。炭化物が10%程度混入している。φ5mm位の礫も見られる。しまりゆるい。
2. 暗褐色(10YR3/3)、砂質土。φ1.5cm位の礫を5%程度含んでいる。φ1mm以下の白色粒子も見られる。
3. 暗褐色(10YR3/3)、砂礫層。礫はφ1~4cm位。全体の40%程度を占める。
4. 暗褐色(10YR3/3)土。砂質感あり。全体的に粒子が細かい。
5. 暗褐色(10YR3/3)、砂礫層。φ0.5~3cm位の礫が全体の60%位を占めている。砂礫を含んでいない箇所については固くしまっている。砂質感強い。灰黄褐色(10YR5/2)土も見られる。
6. 暗褐色(10YR3/3)、砂質土。粒子の大きさはそろっていない。φ1~2cmの礫も見られる。
7. 灰黄褐色(10YR4/2)と黒褐色(10YR3/2)と褐灰色(10YR6/1)の混じる砂質土。水の影響を思わせるような層が見られる。

8. 暗褐色(10YR3/3)。砂質土。灰黄褐色(10YR4/2)土も含む。φ2~5cmの礫も見られる。倒木関連。
9. 灰黄褐色(10YR4/2)。砂質土。固くしまっている。倒木関連。
10. 暗褐色(10YR3/3)。礫層。大きささまざまな礫(φ1~6cm)が60%程度混入している。倒木に伴う礫の押し上げか。10層の下部は本来の扇状地礫層(地山)になるかもしれないが、区別し礫を入れることはできなかった。
11. 暗褐色(10YR3/3)。砂質土。褐灰色(10YR4/1)や褐色土(10YR4/4)も見られる。倒木関連。
※1~7層は旧河道とした部分。18C墳を中心に陶磁器が多く出土。旧河道ではなく、溝であった可能性もある。
※小丸は礫多いを示す

4トレンチ



5トレンチ



6トレンチ

3区基本土層

- I. 暗褐色(3/3)。粘質土。
 - II. 灰黄褐色(4/2)。やや粘質。マンガンの凝集が見られる。層下部を中心にφ1~2cmの礫含む。
 - III. にごい黄褐色(6/4)。砂質土。粗い砂質土。φ2~3cmの小礫含む。
 - IV. 黄褐色(6/6)。砂質土。粗い砂質土。φ1~2cmの小礫散在。
 - V. にごい黄褐色(5/3)。砂質土。16層に比較し、より粗い砂質土。
 - VI. 礫層。(扇状地礫層)。
- ※土色は10YRを基本とする。

1. IV層に相当。
 2. IV層に相当。
 3. 灰褐色砂質土。II層に相当。倒木関連。
 4. 灰黄褐色砂質土。φ2~3cmの礫を含む。II層に相当。倒木関連。
 5. 砂礫層。IV層に相当。倒木関連。
- ※ローマ数字は3区基本土層。

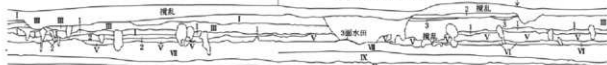
※各トレンチ断面ポイントは3区4面全体図中にあり。

0 1:50 4m

第46図 3区各トレンチ土層断面図



この辺りの層は炭化物と黄土、不表らへい、弱いが砂質感もある、
ともに見られる。根の影響ない。全体的に100%が砂質土。



注記A ← → 注記B

この辺りの層は41~50cm位の大き
きな炭化物を含んでいる。

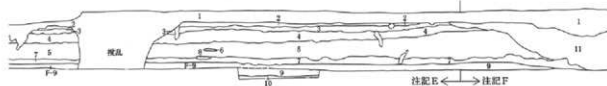
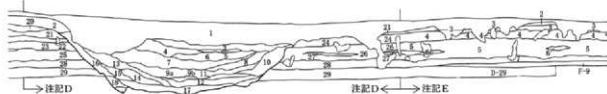
この辺りの層は少し粘性が出て
くる。

この辺りは灰黄褐色に近い暗褐色
土(10YR3/4)、黄土層・炭化物
を含む、ややしまりが強い。



この辺りの層は暗褐色土(10Y
R3/4)だが灰黄褐色土に近い。
砂質感もあるが強い。

(○)はプラントオーバーホール痕を示す



3区南壁

注記A

1. にぶい黄褐色土(10YR4/3)。砂質感あり。洪水層と思われる。
2. 灰黄褐色土(10YR5/2)。にぶい黄褐色土(10YR4/3)がまばらに混入する。粘性あり。水田跡土と思われる。
- I. 部分的にだが炭化物多いところあり。上部は埋込を含む。
- III. 暗褐色土(10YR3/3)砂質感あり。炭化物・黄土粒も見られる。
4. 炭化物・黄土等の集合体。
5. 暗褐色土(10YR3/3)。黒褐色土(10YR2/3)10%程度含む。砂質感あり。炭化物も含む。
6. 黒褐色土(10YR3/2)に暗褐色土(10YR3/3)が10%混入。織(φ1~2cm)を10%程度含む。砂質感あり。白色粒子(φ1mm以下)

も見られる。

7. 黒褐色土(10YR3/2)。砂質感あり。φ3~5cmの織を30%程度含む。
8. 褐灰色(10YR4/1)とにぶい黄褐色(10YR5/4)の混土。にぶい黄褐色が若干多い。弱いが砂質感あり。洪水層と思われる。
9. 灰黄褐色(10YR4/2)と黒褐色(10YR3/1)の混土。φ1mm以下の白色粒子も見られる。砂質感あり。洪水層と思われる。
10. 灰黄褐色(10YR4/2)に黒褐色土(10YR3/1)が25%程度混入している。粘性あり。織(φ2~5cm)も見られる。
- I. 灰黄褐色(10YR4/2)。砂質感強い。部分的に炭化物の多い所あり。上部埋込含む。
- III. 灰黄褐色(10YR4/2)~暗褐色土(10YR3/3)。砂質感あり。炭化物・黄土粒含む。
- V. 灰黄褐色(10YR4/2)中に、にぶい黄褐色(10YR6/4)60%程度含む。粘性あり。

第47図 3区南壁土層断面図



注記A つづき

- Ⅷ. 暗褐色土(10Y R3/3)。一部で、同じ南壁セクションの中央部と比べ、全体的に覆れている。暗褐色土(10Y R3/3)に灰黄褐色土(10Y R4/2)が5%位混入。
- Ⅹ. 暗褐色土(10Y R3/3)。粘性あり。A_s-C₁-H_r-F_Aを含むが、北壁に比べ混入している量は少ない。
- Ⅺ. 暗褐色土(10Y R3/3)。粘性あり。

注記Cは3区5面2住居跡土層断面Aにあり。

注記D

1. 表土。覆土に近い。
2. 灰黄褐色(4/2)。砂質土。Ⅲ層に相当するか。表土に近い部分もある。
3. にぶい黄褐色(4/3)。砂質土。粗い砂が混在。A_s-Bを含む。5号溝フク土。
4. にぶい黄褐色(5/3)。砂層。3層と比較し、砂は細かく互層をなす。A_s-Bを含む。5号溝フク土。
5. にぶい黄褐色(4/3)。砂層。3層に近似。粗い砂の層で互層をなす。4層よりA_s-B多い。5号溝フク土。炭化物を層状に含む。
6. A_s-Bのアッシュを含む。5号溝フク土。
7. にぶい黄褐色(5/3)。砂質土。細かな砂層の中に粗い砂層が僅かに互層で入る。炭化物散在。5号溝フク土。
8. 暗褐色(3/3)。砂層。層上部にはφ2-10cm程の礫を含む。層下部には層状に炭化物を多く含む。5号溝フク土。
- 9a. 灰黄褐色(5/2)。砂質土。7層より多くの粗い砂層が互層で入る。炭化物。5号溝フク土。
- 9b. 9a層に近似。炭化物を層状に含む。5号溝フク土。
10. にぶい黄褐色(5/3)。やや粘質。26-27層が層の西側を中心に小ブロックで混在。5号溝フク土。
11. 灰黄褐色(4/2)。砂礫層。砂は粗くφ1-5cmの礫を含む。5号溝フク土。
12. 灰黄褐色(4/2)。砂質土。φ1-5cm程の礫を含む粗い砂も多く含まれる。炭化物散在。5号溝フク土。
13. にぶい黄褐色(5/3)。やや粘質。23層が小ブロックで散在。5号溝フク土。
14. 非常に粗い砂層。互層。φ1cm程の礫も散在。5号溝フク土。
15. にぶい黄褐色(5/3)。砂質土。砂は細かい。5号溝フク土。
16. にぶい黄褐色(5/3)。粘質土。23層に近似。層東側に25-28層が小ブロックで混在。5号溝フク土。

注記E

1. 表土。I層に相当。
 2. 灰黄褐色(4/2)。やや粘質。Ⅲ層に相当。層下部では一部Ⅳ層の混入が見られる。
 3. にぶい黄褐色(6/4)。シルト。Ⅴ層に相当。一部4層との混入が見られる。西側は残りが悪い。
 4. にぶい黄褐色(4/3)。粘質土。マンガンの凝集が見られる。Ⅵ層に相当か。
 5. にぶい黄褐色(5/3)。粘質土。マンガンの凝集が見られる。Ⅵ層とⅦ層の混入か？
 6. 灰白色洪水層(Ⅷ層)と8層の混入。やや砂質。
 7. 暗褐色(3/3)。粘質土。白色軽石(H_r-F_AまたはA_s-C)を含むX層に相当。
 8. 6層と7層の混入。
- ※5層はⅥ-Ⅷ-X層が混入している。6層はⅥ層の洪水層が一部残ったものか。
- ※ローマ数字は3区基本土層。
- ※土色値10Y Rを基本とする。

注記B

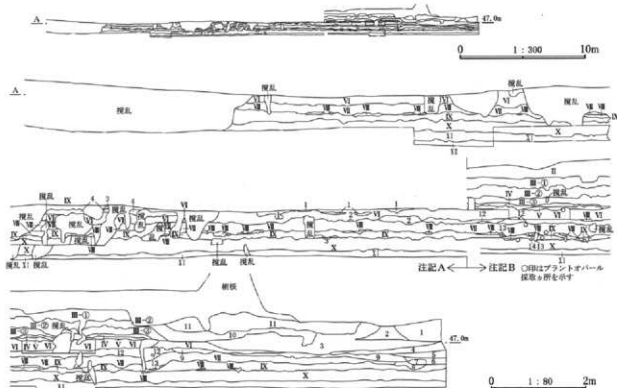
1. にぶい黄褐色土(10Y R4/3)。砂質感あり。洪水層と思われる。
 2. 灰黄褐色(10Y R4/2)。砂質土。褐色土(10Y R4/4)も10%程度見られる。褐色土化は鉄分比率によるものと思われる。炭化物見られる。
 3. 灰黄褐色(10Y R4/2)。砂質土。炭化物見られる。
- ※ローマ数字は3区基本土層。

17. 灰黄褐色(4/2)。砂礫層。砂は粗い。φ1-3cmの礫を多く含む。φ20cmを超える礫も見られる。5号溝フク土。
 18. 灰黄褐色(4/2)。砂質土。φ1cm程の礫散在。マンガンの凝集見られる。5号溝フク土。
 19. 非常に粗い砂層。φ1-2cm程の礫を含む。5号溝フク土。
 20. にぶい黄褐色(5/3)。粘質土。層下部を中心にⅣ層が混在。Ⅲ層相当。
 21. 明黄褐色(6/6)。やや粘質。洪水層。黄色の軽石散在。Ⅴ層相当。
 22. 灰褐色(5Y R6/2)。粘質土。マンガンの凝集が多く見られる。水田耕土。ち密。Ⅵ層相当。
 23. 灰黄褐色(5/2)。粘質土。22層のブロックが層上部に混在。Ⅶ層相当。
 24. 灰黄褐色(4/2)。粘質土。マンガンの凝集が見られる。炭化物も見られる。Ⅵ層に相当する部分だが、混入している水田の広がりについては不明。
 25. にぶい黄褐色(4/3)。粘質土。白色軽石を少量含む。Ⅹ層相当。
 26. 灰黄褐色(4/2)。粘質土。層下部は28層が混在。Ⅷ層に相当するか。混入しているため不明。
 27. 26層中にⅧ層相当の灰白色(7/1)やや砂質土が混在する層。
 28. 黒褐色(3/2)。粘質土。白色軽石を含む。Ⅹ層相当。
 29. 黒褐色(3/1)。粘質土。均質。軽石を含まない。Ⅺ層相当。
- ※土色値10Y Rを基本とする。白色軽石はA_s-CまたはH_r-F_A。
- ※1層は近・現代の削平による痕跡か。本来の5号溝はもっと深いもので、遺跡地中・近世部分の土層が大きく削平されている可能性がある。

注記F

11. 灰黄褐色(4/2)。粘質土。横による混入。近・現代の溝のフク土か。
- ※土色値10Y Rを基本とする。

第3編 発掘調査遺構と遺物



3区北壁

注記A

1. 灰黄褐色(10YR 4/2)に、深い黄褐色(10YR 6/3)30~60%含む。砂質感あり。
 2. 灰黄褐色(10YR 4/2)。砂質感はあるがI層に比べ弱い。色調はI層にほぼ同じ。
 3. 灰黄褐色(10YR 4/2)。砂質感あり。
 4. 灰黄褐色(10YR 4/2)。砂質感あり。色調はI層と似ているが、若干明るく見える。全体的に荒れている。
- ※ローマ数字は3区基本土層。

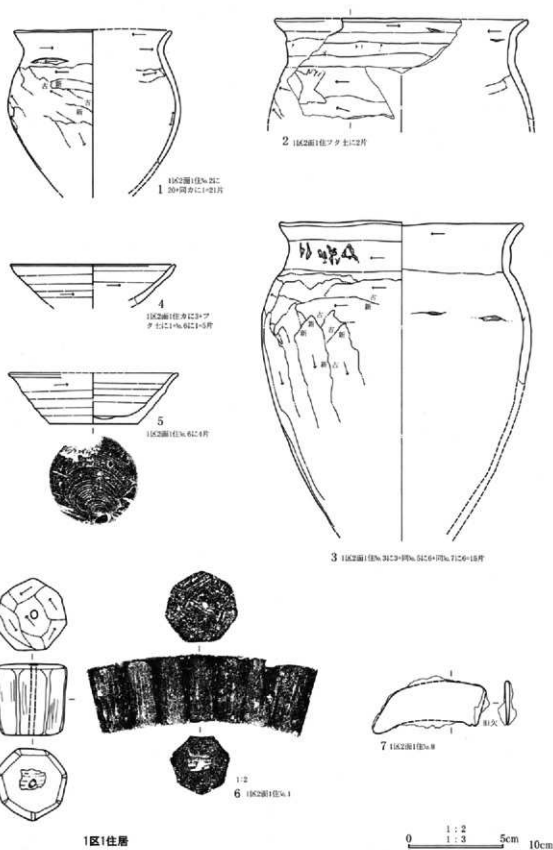
注記B

1. 灰黄褐色(10YR 4/2)。砂層。
2. 灰黄褐色(10YR 4/2)。砂層。φ5mm位の礫も見られる。
3. 灰黄褐色(10YR 4/2)。砂礫層。礫はφ1~2cmの小さなものを30%程度含む。
4. 褐灰色(10YR 5/1)をベースとし、暗褐色土(10YR 3/3)を10%程度含む。暗褐色土は、鉄分沈着によるものと思われる。砂質感強い。
5. 褐灰色(10YR 5/1)。砂層。φ1.5~4cm位の礫を50%程度含む。
6. 褐灰色(10YR 4/1)。砂層。暗褐色土(10YR 3/3)を5%位含む。
7. 褐灰色(10YR 5/1)。砂層。φ2~3cmの礫を40%程度含む。
8. 暗褐色土(10YR 3/3)。砂質感あり。φ3mm位の礫も入っている。洪水層と思われる。
9. 暗褐色土(10YR 3/3)。砂質感あり。砂質感は基本土層IV層よりも弱い。基本土層のIV層に色調がよく似ている。
10. 灰黄褐色土(10YR 4/1)。砂層。砂質感あり。しまりやや弱い。褐灰色(10YR 6/1)も見られる。洪水の影響か。
11. 灰黄褐色土(10YR 4/2)。砂質感あり。
12. 暗褐色土(10YR 3/3)。基本土層のⅧ層と色調・土質がよく似ている。Ⅷ層より砂質感がやや強い。

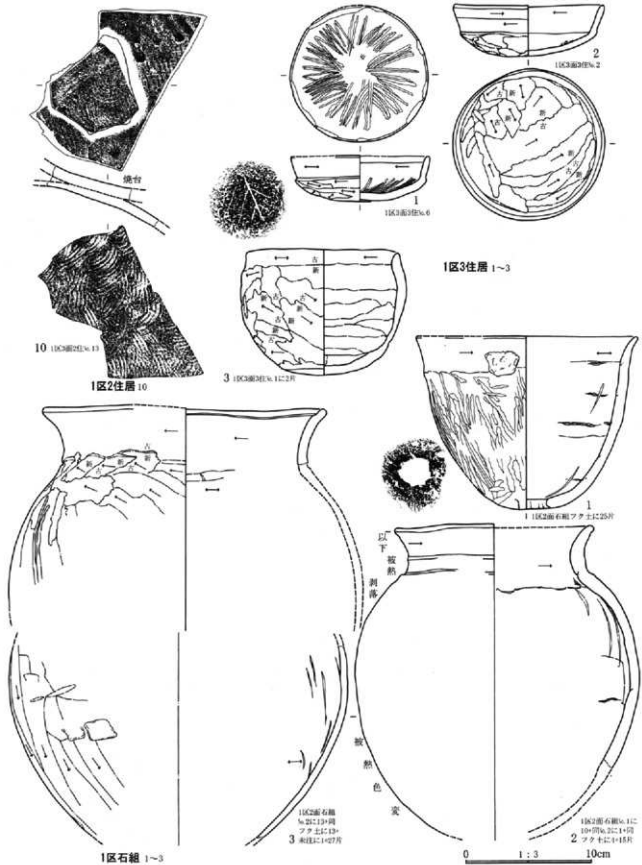
- VI. 灰黄褐色(10YR 4/2)。砂質土。深い黄褐色土(10YR 6/3)をブロック状に10%程度含む。兩壁のI層と土質が違っている。畑耕土と思われる。
- VII. 灰黄褐色土(10YR 4/2)。弱い砂質感あり。洪水層。
- VIII. 灰黄褐色土(10YR 6/2)。洪水層。
- IX. 灰黄褐色土(10YR 4/2)。白色粒子わずかに含む。砂質感あり。洪水層。
- X. 黒褐色(10YR 3/2)。粘質土。As-C-Hr-F-A含む。
- XI. 褐色土(10YR 3/2)。粘質土。
- II. 褐色土(10YR 4/4)。粘質土。黒褐色(10YR 3/2)も見られる。

13. 暗褐色土(10YR 3/3)。砂質感あり。色調・土質はVI層によく似ている。VI層よりも均質である。
14. 黒褐色土(10YR 3/2)。粘性あり。基本土層X層に色調は同じ。固くしまる。
- II. 灰黄褐色(10YR 4/2)。砂質感あり(Aa-B混か)。
- III. 灰黄褐色(10YR 4/2)。
①Ⅷ層中で砂質感が最も強い。
②粒子が細かくそろっている。
③Ⅷ層中では一番しっかりしている。
- IV. 灰黄褐色(10YR 4/2)。若干黄色みがある。
- V. 褐色(10YR 4/4)と黄褐色(10YR 6/6)の混土。
- VI. 暗褐色土(10YR 3/3)。砂質感かなり強い。
- VII. 暗褐色土(10YR 3/3)。VI層に比べ砂質感が弱い。
- VIII. 灰黄褐色土(10YR 5/2)。一部Ⅷ層が混入。全体的に粒子、とても細かい。
- IX. 暗褐色(10YR 3/3)。VI層やⅧ層に比べ若干暗っぽい。
- X. 黒褐色(10YR 3/2)。砂質感あり。As-C-Hr-F-Aを含む。粘性あり。
- II. 黒褐色(10YR 3/2)。X層中の白色粒子も見られる。粘性あり。※ローマ数字は3区基本土層。

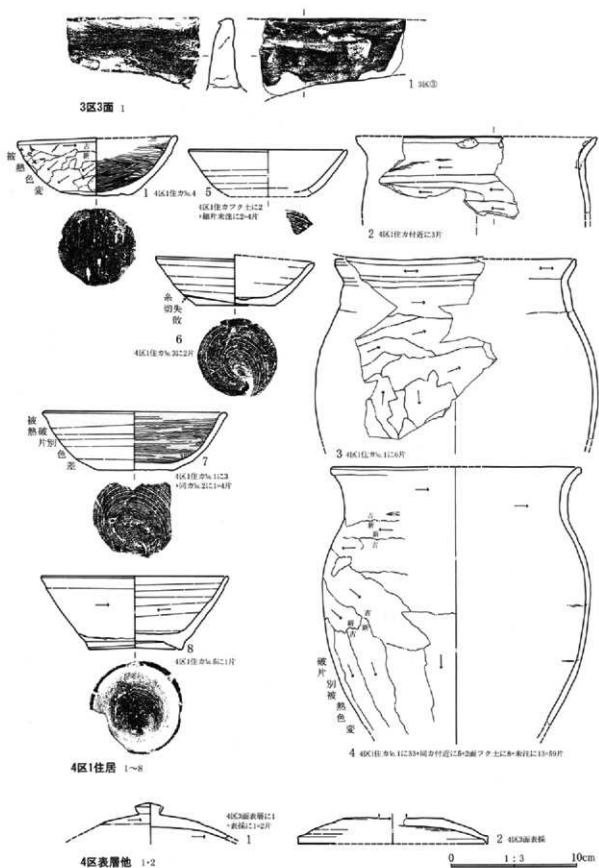
第48図 3区北壁土層断面図



第49図 1区1住居遺物図

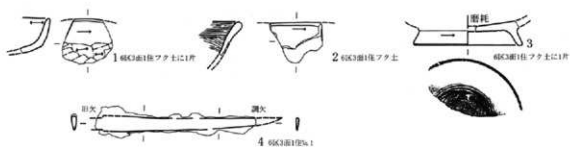


第51図 1区1住居・2住居・石組遺物図

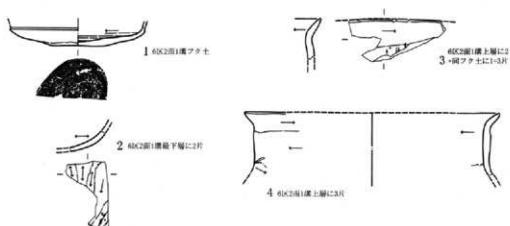


第53図 3区3面、4区1住居・4区表層他遺物図

第3篇 発掘調査遺構と遺物



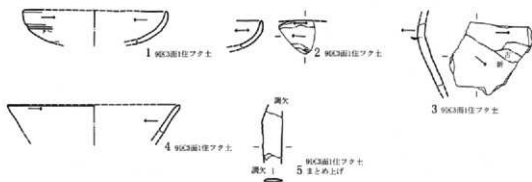
6区1住居 1~4



6区1溝 1~4



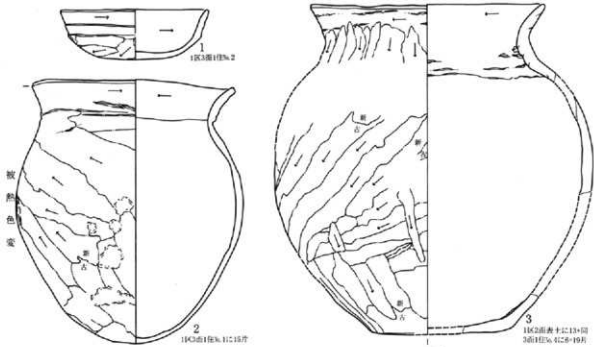
7区3溝 1~2



9区1住居 1~5

0 1:3 10cm

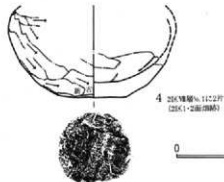
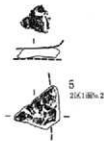
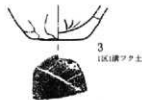
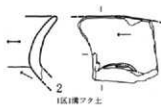
第54図 6区1住居・1溝、7区3溝、9区1住居遺物図



1区1住居 1~3



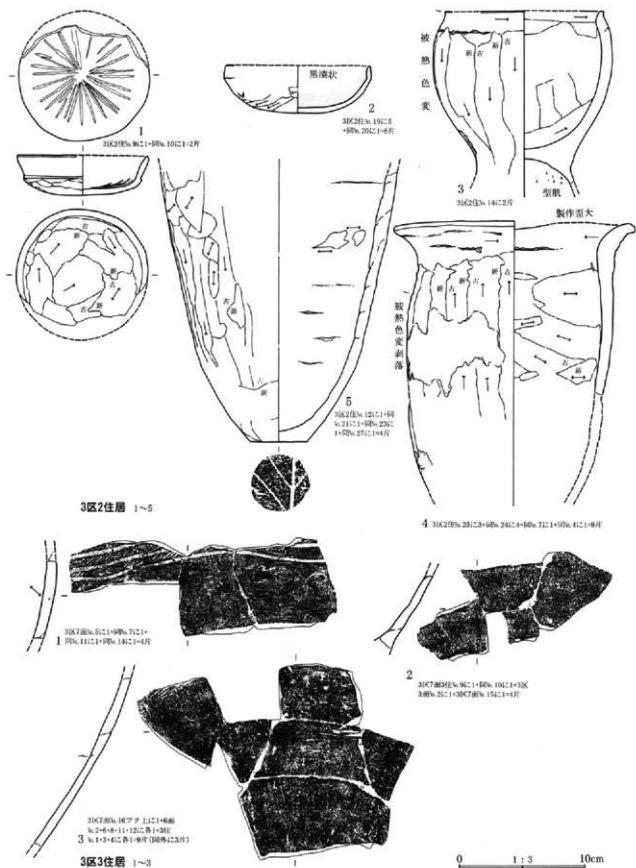
1区1溝 1~3



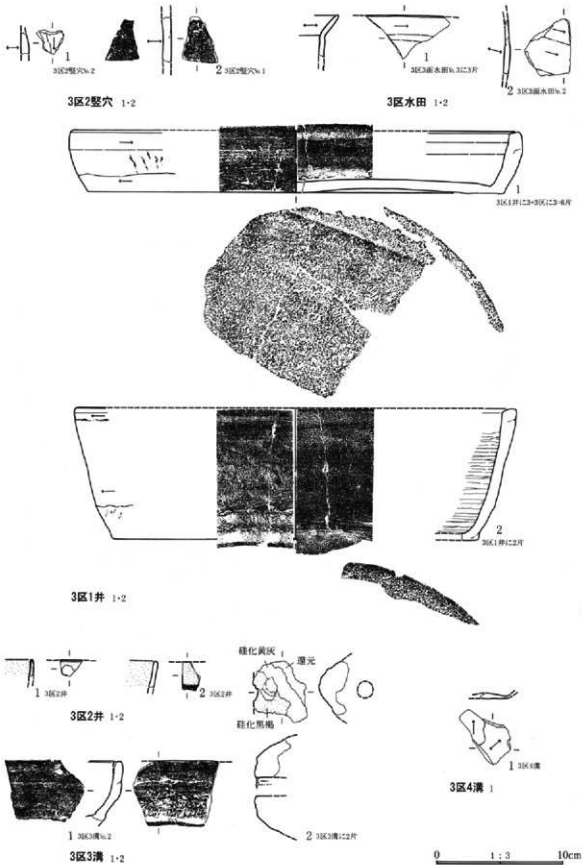
0 1:3 10cm

2区1面・2面・3面 1~5

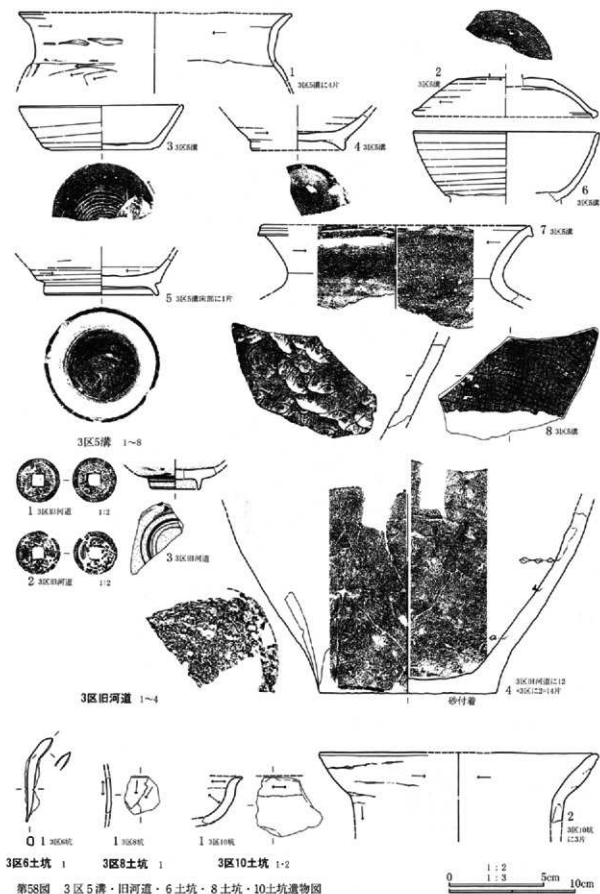
第55図 1区1住居・1溝、2区1面・2面・3面遺物図



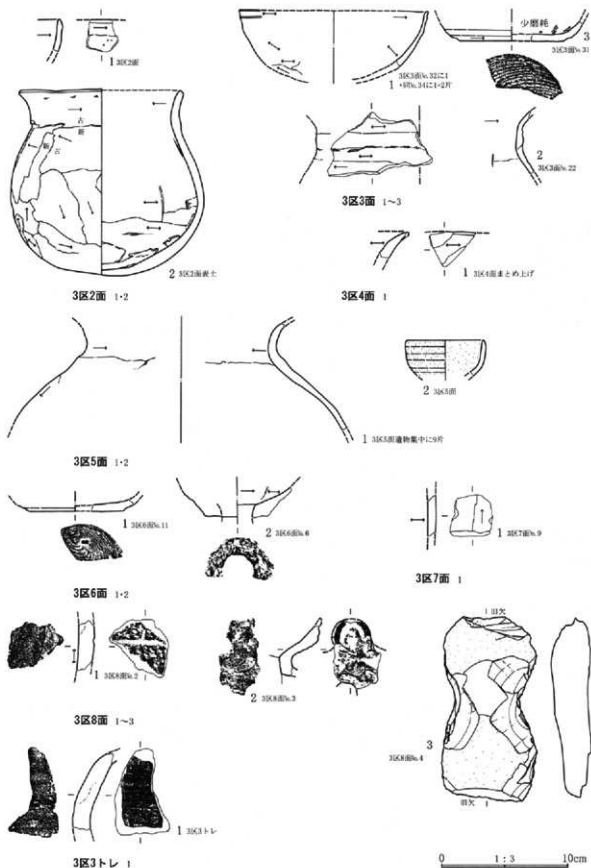
第56图 3区2住居・3住居遺物图



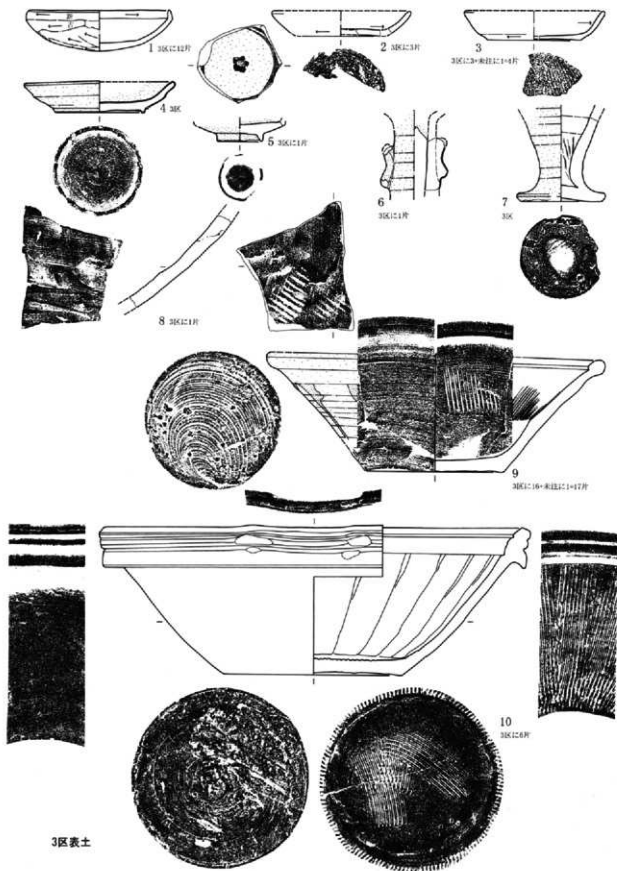
第57図 3区2堅穴・水田・1井・2井・3溝・4溝遺物図



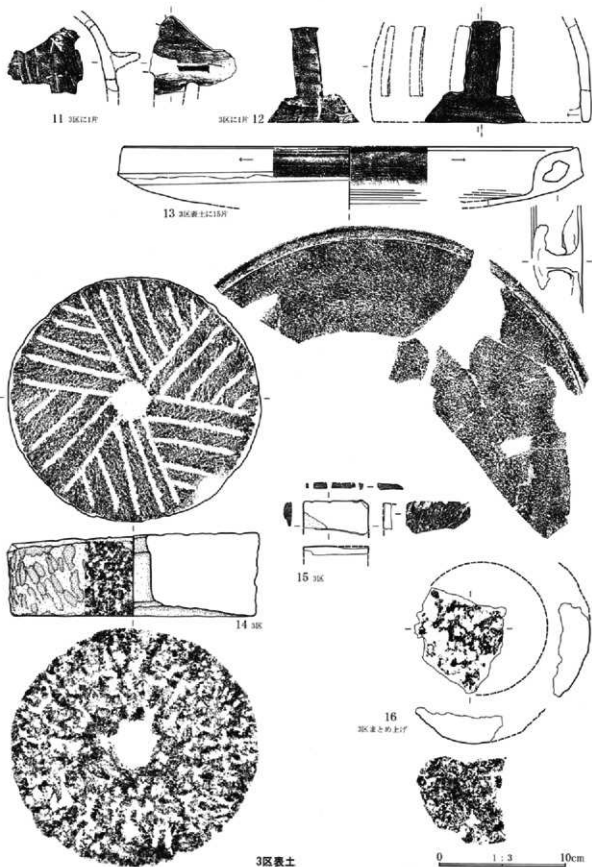
第58图 3区5溝・旧河道・6土坑・8土坑・10土坑遺物図



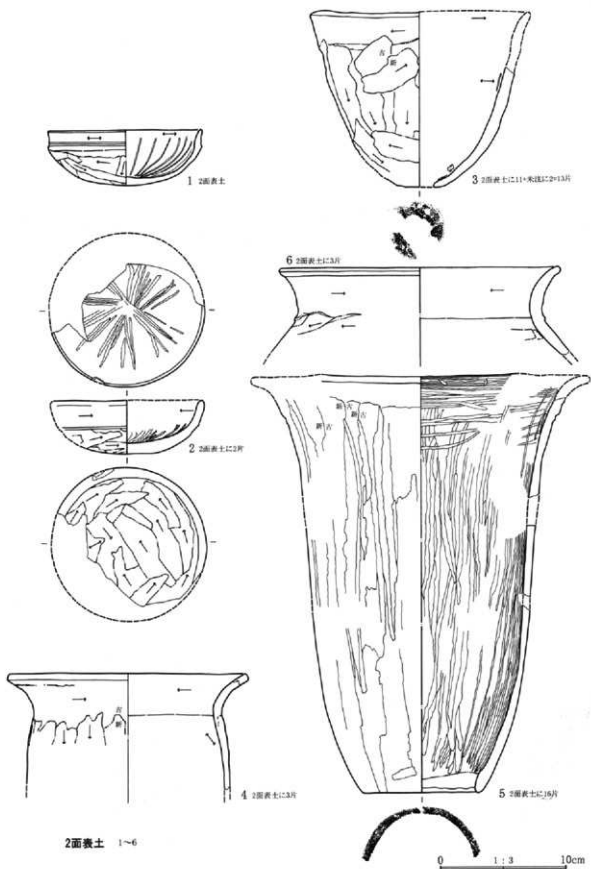
第59図 3区2面・3面・4面・5面・6面・7面・8面遺物図



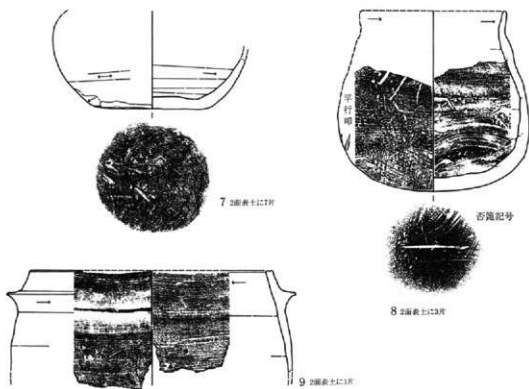
第60図 3区表土遺物図



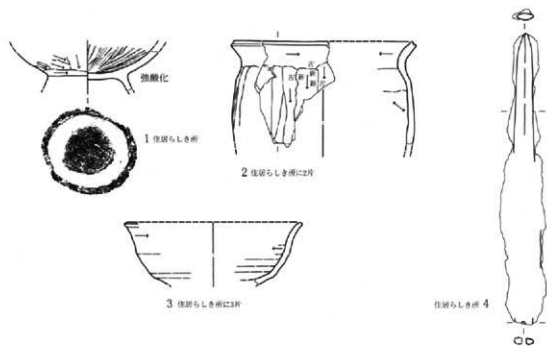
第61图 3区表土遺物图



第62図 2面遺物図



2面表土 7~9



周辺住居跡関連 1~4

0 1:3 10cm

第63図 2面・周辺住居関連遺物図

第4篇 遺物観察

第1章 観察にあたり

遺物の観察は、整理担当自身を含め、整理班全員で荷はどき、撰別、遺構別分別、遺物の個別破片集め、仮接合、復元、各個体の実測図用4分割まで行ない、実測用の技法法線記入は、担当が全個体について行なった。実測図は、整理班でエンピットレス図を完成図として、実測図下図のみは少ない。そのエンピットレス図も、担当が全個体について大幅な線の加除筆修正を行なった。

本書の遺物図は、土器類を1:3で、同縮率と異なる場合は、図傍に縮小率を示し、図版中に縮尺を添えた。遺物は整理班による手実測と三次元電子実測機（機械名称スリー・スペース）班との併用で、正立・側立しうる須恵器・埴を除く、大形個体に用いた。三次元測定機班の側面図化の場合に用いられた側面は35mm換算で600mm相当、617万画素のデジタルカメラ画像を用いての描き起し図である。その画像は、25cm正円で0.3mmの誤差を算出し、球体のケラレも同程度である。

遺物実測図の表現方法は、実線中軸線は土器四分割実測法で成立しうる直接実測の個体に、1点鎖線中軸線の場合は土器個体残存量の不足から回転実測した個体を示す。割れ口延長の破線は、通常の場合でも推定であるので破線2単位でそれを示し、それ以上の場合は、実測用分割位置とは別に残存カ所があり、それを用いた断面補足である。外形線はか形を形定づける線を主体線とし実線で、補助を細線で表現してある。器壁断面中に粘土紐の接合線もしくは粘土走行を捉えて点描～実線で、接極のから不安を感じる場合までの状態までの幅で強弱も付けた。また土器中に型作りと考えられる型肌を認める場合に接合線が描かれていても、紐作りとは限らず粘土板や粘土塊の接合面もありうる。土器中の技法に関する表現は、横撫・撫・腕輪目線について破線状に塗切れ目を入れて表現し、1点鎖線は艶削りや削り意識のある場合に用いた。矢印は腕輪目・横撫・削りの方向を示したが、胎土中の挟雑物は、艶削りなどによって抜ける場合と、喰込む場合との全体的な両者から見た状態を捉えたつもりである。必要に応じて底面側・外面側の平面も加えた。土器外面の2次的状態のうち、土器本来の目的である日常の食生活に用いたことを上回る目的に使用した場合や、特に目立つ技法痕を認めた場合に、その旨を補注で加えた。二次的に竈などで火による被熱の場合、特に炊飯を意識して土器の左側部に短い横線を記入し、範囲を示した。図版下は2倍版のため、コピー縮小67%してトレス用に、トレスは手描きである。拓本については技法・文様の表現補足と剥落など状況と質感伝達の手段として用いた。

観察表は図版順ではないが、おおむね全体の流れに沿っている。観察表項目のうち、出土位置は本来であれば一覧中に記入すべきであるが、遺物注記量は観察表項目欄を上回る場合が多いのと、調査時の忠実表現はその項目欄では少な過ぎるので、実測図版側の図傍に全出土地を当時の取上げ番号を生ず形で添記した。項目は古語であれば度目としなければならないが、費用に習い量目とした。胎土・焼成・色調と摘要欄は、胎土は含まれる館物や粒状を捉え、肉眼による粘土素地と製作地の推定を備考欄に加えた。製作地は1979年から始めた胎土分析約1000点の分析結果と、県下窯跡群踏査結果に基づく。焼成は、種別を意識しながら軟・並・硬・焼締りに分け、土器器・須恵器の段は爪で傷が付く以下の焼上りの個体に、並とはそれ以上の時に用いて区別した。このほか瀬ハゼ（焼成時の石ハゼは表現に加えていない）など風化作用も観察し、さらに付着物なども備考欄に加えた。

次に観察表中で使用した略記について触れたい。

第2章 遺物観察表

観察結果については次のとおりである。略記などは98頁に示したい。

矢部遺跡

図番号 写真番号	類別 器種	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調	摘 要	備 考
第49図-1 写真図版38	土師器 甕小形	1区2面1 住No2他	口径12.1。 3/5。	鉱物含、硬、酸化外内焼。 黒褐色Y R 3/1。	割口消耗少。外横撫・甕削。内横 撫・工具撫。	
同上 -2	土師器 甕	1区2面1 住フク土	口径(19.6)。 口縁部片。	鉱物少。硬、酸化。赤褐色2.5 Y R 4/6。	割口消耗少。外横撫・接合痕・甕 撫。内接合痕・横撫・工具撫。	
同上 -3	土師器 甕	1区2面1 住No5他	口径18.8cm。 上半2/3。	鉱物少フマ。硬、酸化。褐 7.5Y R 4/3。	割口消耗少。外横撫・製作肌・甕 削・工具撫・接合痕。	
同上 -4	須恵器 坏	1区1住職 No6他	口径(12.8) 1/3。	鉱物少。硬、やや軽、還元・ 重焼色変。灰N5/。	割口消耗少。内外面右回転軸目。 内面左回転もあり。	
同上 -5	須恵器 坏	1区1住No 6	口径(13.0) 2/3。	鉱物少。硬、やや軽、還元。 灰7.5Y 5/1。	割口消耗少。外内右回転軸目。 底右回転軸目。	非陶土質。
同上 -6	須恵器質 軸端か	1区1住No 1	最大径3.85。 66g。完存。	鉱物少。硬、還元。灰5Y 5/1。	全体消耗微。前面磨研磨光沢。因上 小口磨削。下小口磨削と芯糸切。	器種不明道具・ 調皮等の軸端か
同上 -7	鉄製 同上	1区1住No 8	長9.15、1/2 位か。	小錆ぶくれあり。右端は旧欠であるが面磨えを行なっており、 道具として再利用か。有機物などの付着なし。		
第50図-1 写真図版38	土師器 坏	1区3面2 住No27	口径10.5。 完存。	鉱物少。硬、酸化。橙5Y R 6/6。	消耗あり。外横撫・甕削・甕撫。 内横・斜撫。	
同上 -2	土師器 坏	1区3面2 住No11	口径10.8。 完存。	鉱物少。硬、酸化。橙5Y R 6/6。	内面消耗あり。外消耗微。横撫。 甕削・甕撫。内横撫。	
同上 -3	土師器 坏	1区2住 No26	口径10.8。 完存。	鉱物少。並、酸化。明褐色7.5 Y R 5/8。	器面消耗あり。外横撫・甕削。内 横撫・ハゼ。	
同上 -4	土師器 甕	1区3面2 住No23	口径24.0。 近完存。	鉱物少。硬、酸化・全面磨 削。純赤褐色5Y R 5/4。	割口消耗微。外横撫・接合痕・甕 削。内横撫・ハゼ割落・撫。	焼成前穿孔。底 外木製蓋。
同上 -5	土師器 甕	1区2住 No35他	口径(23.0)。 口一割1/2。	鉱物多。硬、酸化・黄褐色 変。橙7.5Y R 6/6。	割口消耗少。外横撫・甕削。内横 撫・工具撫。	
同上 -6	土師器 甕	1区3面2 住No33・他	底径(3.0)。 底部片。	鉱物多。並、酸化被熱色変。 橙7.5Y R 6/6。	割口消耗少。外甕削。内撫らしい。 底工具傷と削。	7C少。
同上 -7	土師器 甕	1区3面2 住No5・6他	口径(23.0)。 1/2。	鉱物含。並、酸化被熱少色 変。明赤褐色2.5Y R 5/6。	割口消耗少。外横撫・接合痕・甕 削。内横撫・接合痕・斜撫。	
同上 -8	須恵器 甕	1区3面2 住No25	口径(9.4)。 2/3。	鉱物少。軟、弱酸化。橙7.5 Y R 6/6。	割口消耗。外ハゼ割落。内外横 目あるものの回転方向不明。	生焼け。軟質。 太田産跡群か
同上 -9	須恵器 台付甕	1区2住No 1	口径30.0。 小欠あり。	鉱物含。軟・軽質、弱酸化。 鈍橙5Y R 6/4。	割口・器面消耗あり。外回転軸・ 平行印・回転部・透3方。	生焼けか。内横 撫目。轆轤右回 陶土質。燒台青 海流当目。
第51図-10 写真図版38	須恵器質 ・燒台	1区3面2 住No13	胴部片	鉱物含。硬、還元部分焼。 暗灰N3/。	割口消耗全体微。燒台少。外自然 軸。平行印。内面青海流当目。	研造暗文状。
同上 -1	土師器 坏	1区3面3 住No6	口径10.7。 小欠あり。	鉱物少。並、弱酸化内少焼。 明褐色5Y R 7/2。	割口消耗大。外横撫・甕削・全体 にハゼ大。内横撫。放射状磨削。	
同上 -2	土師器 坏	1区3面3 住No2	口径11.6。 完存。	鉱物少。硬、酸化弱焼。明 赤褐色5Y R 5/6。	消耗微。外横撫・甕削・工具撫。 内横撫・ハゼ割落。	
同上 -3	土師器 短頸甕	1区3面3 住No1	口径(12.0)。 完存。	鉱物少。硬、酸化黒底。橙 2.5Y R 6/6。	消耗ほとんどなし。外横撫・甕削・ 甕撫。内横撫・内指横撫。	
第51図-1 写真図版39	土師器 甕	1区2面石 組	口径17.1。 3/4。	鉱物少。硬、酸化。橙5Y R 6/6。	割口消耗少。外横撫・ハゼ割落・ 研造。内横撫・接合痕・工具撫。	
同上 -2	土師器 甕	1区石組No 1	口径16.5。 2/3。	鉱物含。並、酸化被熱焼。 暗灰5Y R 6/1。	割口消耗あり。外横撫・被熱色変・ ハゼ多。内横撫・工具撫。	
同上 -3	土師器 広口甕上	1区2面石 組No2他	口径21.8。 1/3。	割口消耗少。硬、酸化。橙 7.5Y R 7/6。	割口消耗少。外横撫・甕削・甕撫。 内横撫・工具撫。	
同上 -3	同上	1区石組フ ク土	最大径(25.6)。 胴部片。	鉱物少。硬、酸化弱焼。黒 褐色5Y R 2/2。	割口消耗少。外横撫・甕削・ハゼ。 内工具の横撫。	
第52図-1 写真図版39	土師器 広口甕	1区2面1 号埋設	口径12.0。 近完存。	鉱物少。硬、中性黒底。灰 白2.5Y R 8/2。	割口消耗少。外横撫・甕削・工具 撫。内横撫・工具撫。	

第4編 遺物観察

図番号 写真番号	種別 器種	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調	摘 要	備 考
第52図-1 写真図版39	土師器 杯	1区2面2溝6層	口径(11.6).	底物少、軟、酸化。鈍黄褐色10Y R 6/4。	割口消耗あり。外横撫・製作肌・底磨。内横撫。	
同上 -2	土師器 高杯	1区2溝6層	脚盤径(12.8). 脚部片。	底物少、並、酸化被熱色変。鈍色 Y R 6/4。	割口消耗少。外横撫・工具痕・横撫・接合痕。内面・接合・横撫。	
同上 -1	土師器 甕	1区3溝1層	口径(15.6). 口縁部片。	底物少、硬、酸化被熱少焼。橙5 Y R 6/6。	割口消耗少。外横撫・指圧痕・底磨。内横撫・工具横撫。	
同上 -2	土師器 杯	1区3溝1層	口径(13.0). 1/3。	底物少、硬、酸化外横内黒。黒黒5 Y R 3/1。	外横撫・撫・底磨。内全面研磨。底面手押痕跡後撫。	
同上 -3	須恵器 埴	1区1層3溝	口径(14.0). 2/5。	底物少、軟、軽質、還元。灰黄2.5 Y 6/2。	割口消耗あり。外右回転軸轆目。内右回転軸轆目・工具痕。底磨。	底右回転軸轆目。非陶土質。
同上 -1	須恵器 甕	1区表面	口縁部片。	底物少、締、還元焼。黒7.5 Y 2/1。	割口消耗少。表波状文2段+α。沈線1条。内沈線・回転軸。	太田産跡群。
同上 -2	須恵器 大提敷小	1区表面	胴部片。	底物少、締、還元自然釉。灰7.5 Y 6/1。	割口消耗微。外カキ目自然釉。内面回転軸。	太田産跡群。
同上 -1	土師器 小形甕	2区1住No13他	口径(11.0). 口一胴部片。	底物少、並、酸化内外横。黒黒10 Y R 2/3。	割口消耗少。外横撫・製作肌・底磨。内横撫。	
同上 -2	土師器 甕	2区1住No1-同2-同7	底径(11.6). 底1/2。	底物少、硬、酸化被熱焼。灰褐7.5 Y 4/2。	割口消耗少。外底磨。内不定方向工具痕。底外底磨。	
同上 -1	土師器 甕	2区1臥面No1	頸部片。	底物少、硬・やや重、弱酸化焼。灰黄黒10 Y R 4/2。	割口消耗少。外横撫・底磨。内横撫。焼は芯まで達する。	
同上 -2	土師器 甕小	2区1臥面No3	胴部片小。	底物少、並、酸化内少焼。明赤黒5 Y R 5/8。	割口消耗少。外底磨。内横。小片のため不明瞭。	9 C項。
同上 -3	縄文・土師器 不明	2区臥面No2	底部至近片。	底物多、軟・やや重、酸化。橙7.5 Y R 6/6。	割口消耗少。外側りがあるらしい。内横撫。深鉢小片。	
第52図-1 写真図版40	土師器 ク土	2区1溝7層	口径(12.0). 口縁部片。	底物少、並、酸化。橙5 Y R 6/6。	割口消耗あり。外横撫・製作肌・底磨。内横撫。	
同上 -2	須恵器 平瓶	2区1溝7層	頸部片。	底物少、硬、還元。灰N 6/4。	割口消耗微。外カキ目・横撫。内横撫・接合痕。	太田産跡群。7 C項。
同上 -3	須恵器 球状瓶	2区1溝7層	胴部片。	底物多、締、中性弱還元。灰白5 Y 7/1。	割口消耗少。外沈線・轆轤目・自然釉。内面工具回転軸。	
同上 -4	須恵器 不明	2区1溝7層	部分片。	底物少、硬、還元。灰10 Y 4/1。	割口消耗少。外尖帯状の中に沈線1条。内面全刷磨。	太田産跡群。
第53図-1 写真図版40	埴輪小形土象	3区③	部分片。	底物少、並・軽質、酸化。橙7.5 Y R 6/6。	割口消耗あり。外指強と指撫。内指強と指撫。断面下接合面。	非陶土質。割口窓に少焼あり。
同上 -1	土師器 杯	4区1住カNo4	口径12.4. 2/3。	底物少、硬、酸化被熱色変。明赤黒5 Y R 5/8。	割口消耗少。外横撫・型肌・底磨。内面全面細研磨。底外底磨。	
同上 -2	土師器 付造	4区1住カ	口径(19.0). 口縁部片。	底物少、並、酸化。橙2.5 Y 6/6。	割口消耗少。外横撫・接合痕・底磨。内横撫・ハセ割落・工具横撫。	
同上 -3	土師器 マFNo1	4区1住カ	口径(18.8). 口一胴部片。	底物少、並、酸化外上方薄透。明褐7.5 Y R 5/6。	割口消耗少。外横撫・底磨。内横撫・胴部も工具横撫。	
同上 -4	土師器 甕	4区1住カNo1他	口径(19.4). 上半1/2。	底物少、硬、酸化。明赤黒5 Y R 5/8。	割口消耗少。外横撫・底磨。内横撫・接合痕。	
同上 -5	須恵器 杯	4区1住カフクド他	口径(12.4). 口付近1/3。	底物少、硬、還元。灰5 Y 5/1。	割口消耗少。外右回転軸轆目。内轆轤目。底未切痕。	非陶土質。
同上 -6	須恵器 杯	4区1住カNo3	口径12.4. 2/3。	底物少、硬、還元・火燻。灰7.5 Y 5/1。	割口消耗少。外・内轆轤右回転軸轆目。底面右回転軸轆目切痕。	陶土質。
同上 -7	須恵器 杯	4区1住カNo3・2	口径(14.2). 3/5。	底物少、並・軽質、酸化被熱色変内黒。鈍色 Y R 7/4。	割口消耗少。外右回転軸轆目。内研磨内黒。底右回転軸轆目切痕。	非陶土質。被熱色変。
同上 -8	須恵器 甕	4区1住カNo5	口径(14.4). 2/3。	底物少、並、弱酸化被熱色変。鈍色 Y R 7/4。	割口消耗微。外右回転軸轆目。底面右回転軸轆目切痕。	陶土質。
同上 -1	須恵器 甕	4区3面表層・他	径20+α。 1/2。	底物多、軟・軽質、還元。灰白2.5 Y 7/1。	割口消耗大。外轆轤右回転軸轆目・回転軸。内回転軸。	非陶土質。
同上 -2	須恵器 甕	4区3面表層	口径(14.8). 1/4。	底物多、硬、還元。灰N 4/1。	割口少消耗。外右回転軸・右回転軸轆目。内轆轤目。	
第54図-1 写真図版40	土師器 杯	6区1住	口径約13.0. 口縁部片。	底物少、並、還元部分濃黒。灰黄黒10 Y R 6/2。	割口消耗あり。外横撫・底磨・製作肌・製作肌。	非陶土質。
同上 -2	須恵器 杯	6区1住フク土	口縁部片。	底物少、並・酸化内黒。橙7.5 Y R 7/6。	割口消耗少。外・内轆轤右回転軸。内研磨・黒色透。	軽質・非陶土質。
同上 -3	須恵器 埴	6区1住フク土	台端径(8.3). 底3/1。	底物少、硬、還元。灰白5 Y 7/2。	割口消耗少。内外回転軸。付高台。轆轤右回転。内面底部摩耗大。	陶土質。

図番号 写真番号	種別 器種	出土位置	量目(m) 残存状態	備要	備考
第54図-4 写真図版40	鉄製 刀子	6区1住No 1	長12.6+e。	外反傾向あり、刃・横区不明。研磨消耗少ない。木質の砥跡見えず。茎部は旧欠。	
同上 -1 同上	須恵器 坏	6区1溝フ ク土	最大径(10.6)。 1/2。	鉛物舎、硬、還元。灰N4/。	前口消耗少。外ゆるい回転軸。内右回転軸。目。
同上 -2 同上	土師器 坏	6区1溝敷 下層	底一部片。	鉛物少、並、酸化。明赤褐 5 Y R 5/6。	前口消耗少。外製作肌、剝削。内横 軸。坏ではやや器内厚。
同上 -3 同上	土師器 甕	6区1溝上 層・フク土	口縁部片。	鉛物少、並、酸化。明褐7.5 Y R 5/6。	前口消耗少。外横軸・製作肌。内 横軸。
同上 -4 同上	土師器 甕	6区2面1 溝上層	口径(20.0)。 口縁部片。	鉛物少、硬、酸化外少焼。 鈍赤褐2.5 Y R 5/3。	前口消耗少。外横軸。底削。内横 軸。外被熱少焼。
同上 -1 同上	土師器 甕	7区3面3 溝4層	口縁部片。	鉛物少、軟、酸化。橙7.5 Y R 6/6。	前口消耗大。外横軸・底削。内横 軸。前口に接合面あり。
同上 -2 同上	土師器 甕	7区3面3 溝2層	胴部片。	鉛物少、並、弱酸化少焼。鈍 黄7.5 Y R 6/4。	前口消耗少。外剝削・横軸。内横 工具跡。
同上 -1 同上	土師器 坏	9区1住フ ク土	口径(11.2)。 口縁部片。	鉛物少、並、酸化。橙5 Y R 6/6。	前口消耗少。外横軸・製作肌・底 削。内横軸。
同上 -2 同上	土師器 坏	9区1住フ ク土	口縁部片。	鉛物少、軟、酸化。明赤褐 2.5 Y R 5/6。	前口消耗あり。外横軸・底削。内 横軸。
同上 -3 同上	土師器 甕	9区1住3 面フク土	胴部片。	鉛物少、並、酸化。鈍黄7.5 Y R 6/4。	前口消耗少。外横軸・底削。内横 軸・接合面。
同上 -4 同上	須恵器 坏少	9区1住フ ク土	口径(13.6)。 口縁部片。	鉛物少、硬、還元重焼焼斑。 灰N6/。	前口消耗少。外右回転軸。目。
同上 -5 同上	鉄製 不明	9区1住フ ク土一括	長3.6+e	板状で、片側が刃形に尖る。 刀子にしては薄い。上方は物打刃 状に片寄る。利器か。	同上

新島遺跡

図番号 写真番号	種別 器種	出土位置	量目(m) 残存状態	胎土・焼成・色調	備要	備考
第55図-1 写真図版41	土師器 坏	1区3面1 住No2	口径(11.4)。 1/3。	鉛物少、硬、酸化部分焼斑。 明赤褐5 Y R 5/6。	前口消耗少。外横軸・底削。内横 軸。横軸は本来のかげ熱か不明。	
同上 -2 同上	土師器 甕	1区1住No 1	口径15.8。完 存。	鉛物少、硬、弱酸化被熱色 変。鈍褐7.5 Y R 6/3。	器面消耗あり。外横軸・底削・ハ ゼ割溝。内横軸。	
同上 -3 同上	土師器 広口壺	1区2面1 住No4他	口径18.2。2 /3。	鉛物少、硬、酸化。橙7.5 Y R 7/6。	前口消耗少。外横軸・接合痕・底 削。内横軸。接合痕。底底削。	
同上 -1 同上	土師器 坏	1溝フク土	口径(約10.2)。 口縁部片。	鉛物少、硬、酸化内外焼。 黒褐10 Y R 2/3。	前口消耗少。外横軸・底削。内横 軸。	
同上 -2 同上	土師器 壺	3区1溝フ ク土	口縁部片。径 約20cm。	鉛物少、硬、弱酸化。鈍橙 7.5 Y R 7/4。	前口消耗少。外横軸・底削。内横 軸・斜軸。	6Cカ。
同上 -3 同上	土師器 甕	3区カ、1 溝フク土	底部片。	鉛物多、並、酸化。橙7.5 Y R 6/8。	前口消耗。外底削。内工具跡。底 外木重板と焼。	
同上 -1 同上	土師器 坏	2区3面No 3	口縁部片。径 約13cm。	鉛物舎、硬、酸化。赤褐2.5 Y R 4/6。	前口消耗あり。外内流ハゼ多。整 形見えず。	8C頃の坏か。
同上 -2 同上	土師器 甕	2区3面No 6	口縁部片。	鉛物少、硬、酸化。橙2.5 Y R 6/8。	前口消耗少。外内横軸。橙色であ り。6~8C頃か。	
同上 -3 同上	土師器 甕	2区2面No 3	口縁部片。径 約15cm	鉛物舎。並。弱酸化。鈍褐 7.5 Y R 5/3。	前口消耗少。外内横軸。器面荒れ あり。	6C甕か。
同上 -4 同上	土師器 小形甕	2区層No 1他2	最大径(13.2)。 下半2/3。	鉛物少、並、弱酸化内少焼。 灰白10 Y R 8/2。	前口消耗あり。外横軸・底削。内 内工具跡。底内厚い。	
同上 -5 同上	軟質陶器 胎赤カ	2区1面No 3	底部片。	鉛物微、並、粘質、中性。 灰白2.5 Y R 8/2。	底部片。前口消耗大。外器面割溝。 内回転軸痕。	18・19C。小泉 焼か。非陶土質。
第56図-1 写真図版42	土師器 坏	3区2住 No10	口径10.3	鉛物少、硬、酸化少焼。黒 褐10 Y R 3/2。	前口消耗あり。外横軸・底削。内 横軸。暗文状放射状研磨。	
同上 -2 同上	土師器 坏	3区2住 No19・20	口径(11.2)。 1/3。	鉛物少、硬、弱酸化。鈍黄 10 Y R 7/4。	前口消耗少。外横軸・製作肌・底 削。内横軸。	内面に黒染物質 付着。
同上 -3 同上	土師器台 付短頸甕	3区2住 No14	口径12.5。台 部欠。	鉛物多、並、酸化被熱色変 焼。鈍7.5 Y R 4/3。	前口消耗大。外横軸・接合痕・底 削。内横軸・無。台内製作肌。	口縁見切少。
同上 -4 同上	土師器 坏	3区2住 No24・25他	口径18.5。1 /2。	鉛物舎、並、酸化被熱色変。 橙5 Y R 6/6。	前口消耗あり。外横軸・底削・ハ ゼ。内横軸・斜軸。	

第4篇 遺物観察

図番号 写真番号	種別 器種	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調	清 要	備 考
第56図-5 写真図版41	土師器 甕	3区2住 No12・21他	胴部～胴部片	灰物多、硬、弱酸化被熱少 焼。鈍黄7.5Y R 7/4。	割口消耗少。外見揃・底削。内接 合痕・指捺。底外未焼。	
同上 -1	弥生土器 甕	3区7面3 住No5他	胴部片。	灰物少、黄、弱酸化漂白気 味。鈍黄橙10Y R 7/4。	割口消耗・器面寛り。外縄文・ 沈線3条・研磨。内工具痕。	弥生後期古様か。
同上 -2	弥生土器 甕	3区7面・ 3住No9他。	底削片。	灰物少、軟、酸化内錆強。 明赤褐2.5Y R 5/8。	割口消耗大。外面寛あり・磨 削。内接合・寛れ。	後期古様か。
同上 -3	弥生土器 甕	3区7面・ 6面3住	胴部片。	灰物含、軟、弱酸化漂白気 味部分強。鈍黄褐10Y R 7/4。	割口器面消耗・寛大。外破断縄文 施文。内接合痕・工具痕。	弥生後期古様か。
第57図-1 写真図版41	土師器 壺小	3区2壺穴 No2	胴部片。	灰物少、硬、酸化。明赤褐 2.5Y R 5/6。	割口消耗少。外見削。内横撫。比 較的薄作。	9 Cか。
同上 -2	須恵器 瓶	3区2壺穴 No1	胴部片。	灰物少、硬、還元。褐灰10 Y R 6/1。	割口消耗少。外狭小整形不明瞭。 内横回転撫。	太田窟跡群。
同上 -1	土師器 甕	3区3面No 3	口縁部片。	灰物少、硬、酸化。明赤褐 5Y R 5/6。	割口消耗少。外横撫。内横撫。全 体に薄作。	9 C中頃。
同上 -2	土師器 甕	3区3面水 田No2	胴部片。	灰物少、硬、酸化内外被熱 強。鈍黄褐10Y R 5/4。	割口消耗少。外見削。内工具痕。 割口に接合痕。薄作り。	8・9 C
同上 -1	軟質陶器 埴輪	3区1井	口径(35.4) 1/4。	灰物少、硬・軟質、還元。 鈍黄橙10Y R 7/3。	割口消耗少。外横撫・製作肌。 内横撫と回転撫。底製作肌跡。	18・19 C、小泉 焼。赤陶土質。
同上 -2	軟質陶器 内耳埴輪	3区1井	口径(34.5)	灰物微、並、黒色還元外弱 酸化焼切れ。黒10Y R 2/1。	割口消耗少。外横撫・左回転撫・ 製作肌。内黒煎・研磨・内耳見否。	小泉焼にしては 重く、黒地約む。
同上 -1	陶器 甕	3区2井	口縁部片。	灰物微、細、中性～弱酸化。 灰白10Y R 8/2。	割口消耗微。外内透明輪・面貫入。 外輪磨薄少しあり。	京焼系。18 C。
同上 -2	陶器施釉 小甕	3区2井	口縁部片。	灰物少、細、粗質、中性。 灰白2.5Y 7/1。	割口消耗少。外・内透明輪。外下 方鉄輪。	美濃焼。18 C。
同上 -1	軟質陶器 内耳埴輪	3区3溝No 2	口縁～胴部片。	灰物少、並、還元。黒10 Y R 2/1。	割口消耗少。外横撫・製作肌、底削。 内工具痕。	赤陶土質。小泉 焼。
同上 -2	土製 羽口	3区3溝	径75+α。 先端部片。	灰物少、粗質・軽・硬、薄 色。黒黄～灰。	割口消耗少。通風孔径1.5cm。酸化 部の発色は、黒酸化鉄色。	
同上 -1	土師器 環	3区4溝	底部片	灰物少、硬、酸化。明赤褐 5Y R 5/6。	割口消耗少。外見削。内横方向の 撫。薄作り。	9 C代坯片か。
同上 -1	土師器 壺	3区5溝	口径(21.4)。 口1/5。	灰物少、硬、酸化。赤褐5 Y R 4/8。	割口消耗あり。外横撫・接合痕・ 底削。内横撫。	
第58図-2 写真図版42	須恵器 壺	3区5溝	口径(14.0)。 口～天井部。	灰物少、硬、還元。灰5 Y 5/1。	割口消耗。器面磨耗あり。外右回 転軸目と回転削。内面輪轆目。	陶土質。
同上 -3	須恵器 環	3区5溝	口径(13.5)。 1/3。	灰物微、軟・軽質、還元。 淡黄2.5Y 8/4。	割口消耗あり。外内輪轆右回転軸 轆目あり。	赤陶土質。
同上 -5	須恵器 埴輪	3区5溝床 下平元。	台層径8.8。 下平元。	灰物少、並・軽質、還元。 灰黄2.5Y 7/2。	割口消耗あり。外右回転軸轆目。 内右回転軸轆目、内底少磨耗。	赤陶土質。底右 回転赤切。
同上 -4	須恵器 埴輪	3区5溝	台層径(7.1)。 底1/4。	灰物少、軟、軽質、還元。 褐灰10Y R 6/1。	割口・外器面消耗大。外右回転軸 轆目。内輪轆目・器面消耗少。	赤陶土質。
同上 -6	須恵器 埴輪	3区5溝	口径(14.4)。 1/3。	灰物少、軟、軽質、還元。 淡黄2.5Y 8/4。	割口消耗少。外・内輪轆右回転軸 轆目あり。高台欠損後も使用摩耗。	赤陶土質。
同上 -7	須恵器 壺	3区5溝	口径(21.0)。 口縁部片。	灰物含、硬、還元。N灰4/。	割口消耗大。外内輪轆右回転軸。 内面摩耗大自然か不明。	太田窟跡群製 か。
同上 -8	須恵器 壺	3区5溝	胴部片。	灰物少、硬、還元。灰7.5 Y 6/1。	割口消耗大。外細格子印。内面鉄 特な点目。	黒外眼入。
同上 1-2	銅土杖 鉄	3区旧河道		表面に「東永通寶」の文字。 背文字なし。銘字は深い。		
同上 -3	磁器染付 碗	3区旧河道	底部片。底部 1/3。	灰物見えず、硝、粗始白・ 白台層部を除き染付。白 文様を施す。	高台層部を除き染付。呉須で襷 や文様を施す。	18 C。伊万里系。
同上 -4	焼締陶器 甕	3区旧河道 他	最大径(28.6)。 下平1/3。	灰物含、並、酸化。赤褐2.5 Y R 4/6。	割口消耗少。外撫・工具撫。内撫・ 接合痕。底外砂付者。	常常か不明。
同上 -1	鉄製 不明	3区6坑	長6.8。	全体に錆付着。先端尖り、 下方も針先のように尖る。 断面長方形気味。頭部を失った釘 のようには見えが種不明。		
同上 -1	土師器 甕	3区8土	胴部片。	灰物少、硬、還元。赤褐2.5 Y R 4/6。	割口消耗少。外横撫・製作肌。 内工具痕。	9 C甕片か。
同上 -1	土師器 環	3区10土	口縁部片	灰物少、軟、酸化。橙5 Y R 6/6。	割口消耗少。外横撫・製作肌。 内横撫、斜方向撫。内側気味の口 縁。	
同上 -2	土師器 甕	3区10坑	口径(21.4)。 口1/4。	灰物多、並、酸化。明黄褐 10Y R 6/6。	割口消耗少。外横撫・接合痕・底 削。外横撫。	鉄器物に小継多。

区番号 写真番号	種別 器種	出土位置	量目(m) 残存状態	胎土・焼成・色調	備 考	備 考
第59区-1 写真図版43	土師器 坏	3区2面	口縁部片。	鉱物少、硬、酸化。橙5Y R 6/6。	割口消耗少。外横撫・製作肌。内横撫。やや平い作風。	8C小。
同上-2	土師器 短頸甕	3区2面表	口径12.6。	鉱物含、硬、酸化黒煙。鈍2/3。	外面消耗少。外横撫・荒削・底付近ハゼ削落。内工具痕・ハゼ。	
同上-1	土師器 坏	3区3面 No32・同33	口径(14.8)。 口縁部片。	鉱物少、硬、酸化。橙5Y R 6/6。	割口消耗少。外工具痕沈積・底・荒削。内横撫、折痕。	
同上-2	土師器 物集中	3区3面 No22	胴部径(約)26。 阿破片。	鉱物少、硬、酸化。明赤褐5Y R 5/6。	割口消耗少。外内右回転の轆轤目あり。底糸切痕。内ハゼ・少摩耗。	非陶土か不明。
同上-3	須恵器 坏	3区3面 No31	底径(8.0)。 底部1/4。	鉱物少、軟・軽質、還元外黒煙。黒褐10Y R 2/2。	割口消耗少。外内横撫。割口芯は淡黄灰がかり、外強酸化。	8・9C變か。
同上-1	土師器 甕	3区4面表 同上	口縁部片。	鉱物少、並、酸化。明赤褐2.5Y R 5/6。	割口消耗少。外横撫・接合痕・荒削。内横撫、工具横撫。	
同上-1	土師器 甕	3区5面遺 物集中	胴部径(15.9)。 胴～胴部片。	鉱物少、硬、酸化。橙5Y R 6/8。	割口消耗少。外横撫・接合痕・荒削。内横撫、工具横撫。	
同上-2	陶器抽輪 小坏	3区5面	口径(6.0)。 底1/3。	鉱物見えず、硬、還元。灰白5Y 7/1。	割口消耗なし。輪表面部見え、内外透明輪。外回転痕跡。	地方焼。景外焼。
同上-1	須恵器 坏	3区6面 No11	底部片。 底1/4。	鉱物微、並、還元。黄灰2.5Y R 6/1。	割口消耗少。外内轆轤目。底轆轤右回転糸切痕。	陶土質、底不明(橋木・桐生か)
同上-2	土師器 甕	3区6面No 6	底部片。	鉱物微、硬、やや重、酸化。赤褐5Y R 4/8。	割口消耗少。外全面ハゼ削落。内工具痕。底地成面穿孔。	
同上-1	土師器 甕	3区7面No 9	胴部片。	鉱物少、硬、酸化弱煙。褐7.5Y R 4/4。	割口消耗少。外荒削。内横方向の撫。	
同上-1	縄文土器 深鉢	3区8面No 2	胴部片。	鉱物含・繊維凝似含、軟、酸化。明褐7.5Y R 5/8。	割口消耗あり。表縄文施文・沈煤。表縦撫。	
同上-2	縄文土器 深鉢小	3区8面No 3	把手部か	鉱物含、硬、やや重、酸化。明赤褐2.5Y R 5/8。	外貼付指内文、下方隅形造しあり。内縦磨擦。割口内側並外酸化。	中期小
同上-3	石製 石釜	3区8面No 4	長14.6。	固表面上下に川原石面あり。上下刃部は旧時欠損。	全体に器面消耗あり。全体に肉厚。	
同上-1	地締陶器 同上	3区3トレ	胴立上り片。	白磁物多、硬、還元外酸化。オリーブ黄5Y 6/3。	割口消耗極大。外自然熱回転軸。内横撫と不定。	常滑焼13C後半～14C前半。
第60区-1 写真図版43	土師器 坏	3区	口径(11.0) 2/3。	鉱物少、並、酸化。橙5Y R 6/6。	割口消耗・器面外荒あり。外横撫。荒削。内横撫・撫。	
同上-2	土師質 甕	3区	口径(10.8)。 1/5。	鉱物少、硬、酸化。橙5Y R 6/6。	割口消耗少。外内右回転軸あり。底面糸切痕。	17～19C。
同上-3	土師質 甕	3区	口径(10.8)。 1/4。	鉱物微、硬、酸化。鈍橙5Y R 6/4。	割口消耗少。外内左回転軸。底面外糸切後縦状圧痕。	17～19C。
同上-4	陶器抽輪 同上	3区	口径(11.6)。 3/4。	鉱物見えず、硬、中性。素地灰白2.5Y 8/2。	割口消耗少。旧時使用摩耗あり。内外淡黄灰の長石軸部。	美濃17C前。
同上-5	磁器染付 同上	3区	最大径(7.2)。 底部片。	鉱物見えず、硬、還元最終酸化。赤地淡灰。	割口消耗微。外青地。内染付こんにゃく何花文・内圈。	高台端縁足状に酸化。
同上-6	陶器抽輪 仏花瓶	3区	胴部5.9。 胴部片。	鉱物少、硬、表地浅黄橙10Y R 8/3。軸黒煙。	割口消耗少。外耳付者・轆轤目。内上方のみ抽輪・横撫。	瀬戸・美濃18C。
同上-7	陶器抽輪 仏花瓶	3区	底部径7.0	鉱物微、硬、表地灰白2.5Y 8/2。鉄色。	割口消耗少。外鉄軸・轆轤目。内黒軸・枚目。底糸切右回転。	美濃焼・18・19C。
同上-8	焼締陶器 甕	3区	胴部片。	鉱物少、硬、還元外酸化。黒褐10Y R 3/2。	割口消耗少。外胴目撫。叩。内胴目轆轤。割口接合目あり。	高美焼。
同上-9	陶器抽輪 搦鉢	3区	口径25.8。 2/3。	鉱物微、硬、素地黄灰・粘茶。	割口消耗少。外荒削。鉄軸。内13条の細目・準環状。底右回糸切痕。	美濃焼。
同上-10	陶器抽輪 搦鉢	3区	径32.6。 近完全。	鉱物白含、焼締、酸化。明赤褐2.5Y R 5/8。	消耗微。前後外回転軸。内11条部目あり。内面刷目。底回転軸。	常滑か。
第61区-11・12 写真図版43	軟質陶器 瓦器	3区	口径(16.8)。 口縁部片。	鉱物微、硬、やや重、酸化外焼。黒10Y R 2/1。	割口消耗少。外研磨・造。内轆轤目、胎。景外掘入。	近陶質。赤小泉焼。18Cか。
同上-13	軟質陶器 拾得	3区表土	口径35.6。 1/3。	鉱物少、並、軟質、酸化外焼。黒褐10Y R 3/2。	割口消耗少。外轆轤左回転軸。外底型異と型表か。内内耳と轆轤目。	18・19C。小泉焼。
第61区-14 写真図版44	石製 穀臼下白	3区	径31.8。	割口少。上面6分割。左回転。下石ノミ跡。側突ノミ加工多く、削ノミ痕不明瞭。擦面フクミ少ない。		輝石安山岩。石質比重大。
第61区-15 写真図版43	石製 砥石	3区	幅5.2cm。7.5g	狭小口に平円回転部3ヶ所あり。奥左右側面磨削目あり。前小口・表・裏欠損・割落は旧時。表に研磨痕。仕上げ砥。		砥石の砥石。粘質頁岩。仕上げ砥。
同上-16	準鉄製 輪形坑	3区まどめ 上げ	径推定(10.4) 1/2・120g			

第4篇 遺物観察

図番号 写真番号	種別 器種	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調	備要	備考
第62図-1 写真図版44	土師器 坏	1区か、2 面表採	口径(11.8)、 1/2。	鉱物少、硬、酸化。橙7.5 Y R 6/8。	割口消耗少。外横撫・沈線・彫削・ 内横撫・放射状暗文状研磨。	
同上 -2	土師器 坏	2面表土	口径11.7。 2/3。	鉱物少、硬、酸化。橙5 Y R 7/8。	器面消耗あり。外横撫・彫削。内 横撫・放射状暗文状研磨。	
同上 -3	土師器 瓶	2面表土	口径(17.0) 2/3。	鉱物含、並、弱酸化。橙7.5 Y R 7/6。	割口消耗少。器面寛大。外横撫・ 彫削。内横撫・工具撫。	
同上 -4	土師器 壺	1区か、2 面表	口径(18.6)、 口1/4。	鉱物含、硬、酸化。明赤褐 5 Y R 5/6。	割口消耗少。外横撫・接合痕・彫 削・内横撫・斜撫。	
同上 -5	土師器 瓶	2区表土	口径(26.6)、 2/5。	鉱物少、硬、酸化。明赤褐 10 Y R 6/6。	割口消耗少。外見難様研磨。内面 全面研磨・孔部彫削。	
同上 -6	土師器 広口壺	1区か、2 面表	口径(21.8)、 口1/2。	鉱物少、並、酸化。橙5 Y R 7/6。	割口・器面消耗。外横撫・彫削。 内横撫・工具横撫。	
同上 -7	須恵器 平瓶か	1区か、2 面表採	最大径15.2、 1/2。	鉱物散、硬、還元。灰N 4/。	割口消耗少。外横撫回転撫・回転 削・手持工具撫。内横撫目。	同毛含む器外底 か。横撫左回転。
第63図-8 写真図版44	須恵器 短頸壺	(1区か)2 面表採	最大径15.1、 1/2。	鉱物少、硬、還元。灰10 Y 5/1。	割口消耗少。外回転撫・平行叩の くり返し。内横撫目・接合痕。	外に棒状工具で 3本の記号か。
同上 -9	須恵器 羽釜	1区か2面 表。	口径(19.0)、 口縁部片。	鉱物少、並、弱酸化～中性。 外被熱。純黄橙10 Y R 7/3。	割口消耗少。外横撫目・工具回転 撫。内削い横撫目・工具横撫。	非陶土質。
同上 -1	須恵器 埴	住居らしき 場所	脚端径7.0。 上・下方欠。	鉱物少、硬、強化。赤褐 2.5 Y R 4/6。	割口消耗微。外見撫・高合部左回 転撫。内研磨。台端旧欠後使用。	焼成ヒビ入る。
同上 -2	土師器 壺小形	住居らしき 場所	口径(14.0)、 口～胴部片。	鉱物少、硬、酸化破片割被 熱色。橙7.5 Y R 6/6。	割口消耗少。外横撫・彫削。内横 撫・斜角向撫。	
同上 -3	須恵器 埴	住居らしき 場所	口径(13.6)、 1/5。	鉱物少、硬、酸化内面噴沢。 明赤褐5 Y R 5/6。	割口消耗少。外内右回転横撫目。 内面の炭灰化は被熱時らしい。	太田宮跡群か。
同上 -4	鉄製 槍状	住居らしき 場所	長23+α cm。	下方は錆化大。上方は鋼状の鑄作面方状。下方に茎があり、目 釘穴が半欠状態である。下端は圓欠。		鎌倉時代以前の 古代鉄鏃。

以上、観察表中において長文字名称は欄内の文字数不足をたまたらすので略記を行なう一方、既に遺物注記時点で相当数の略記が行なわれている。その略記は次のとおりである。

矢部遺跡→矢部、新高遺跡→新高、表土→表、3区一括→3区(本書では遺物の一括取り上げ意味との誤解をまわくので、一括とある注記はまとめて上げと云い替え、本来遺物の一括性とはそんな単純な取上げ上用いべきでない)、トレンチ→トレ、土坑→坑、堅穴遺構→堅、井戸跡→井、A層中→A層、カマド→本書中ではカ、フク土→本書の本文中では、覆っている土を覆土、それ以下を埋土とし、語儀の本儀に基づいた。注記上のフク土は土器実測図中の出土地を示す場合には、忠実性を保つためにフク土と現わした。堀方→堀、表層→表などを表現し用いた。

遺構図との関連では、現場時点での取上げ番号は、そのまま用い、土器実測図の図傍に示した接合関係を読者が関係を追求できるよう遺構平面図中にも記入してある。

第5篇 自然科学分析

第1章 群馬県矢部遺跡

1. 矢部遺跡の土層とテフラ

駒古環境研究所

1. はじめに

群馬県城平野部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、浅間、榛名など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代などを知ることができるようになっている。

そこで、層位や年代が不明な土層が検出された矢部遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ検出分析を行って、指標テフラの検出同定を行い、土層の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、1区西壁の深掘第1地点である。

2. 土層の層序

1区西壁の深掘第1地点では、礫層（礫の最大径178mm）の上位に、下位より褐色土（層厚12cm以上）、黄色軽石混じり灰色砂層（層厚31cm、軽石の最大径7mm）、灰褐色砂質土（層厚17cm）、褐色砂質土（層厚23cm）、砂混じり褐色土（層厚14cm）、若干黄色をおびた灰褐色土（層厚20cm）、色調がより暗く暗灰褐色土（層厚17cm）、白色軽石および黄灰色粗粒火山灰混じり暗灰褐色土（層厚22cm）、灰褐色土（層厚11cm）、灰色砂層（層厚9cm）、灰色砂質土（層厚19cm）が認められる（図1）。

3. テフラ検出分析

（1）分析試料と分析方法

1区西壁の深掘第1地点における指標テフラの層位を明らかにするために、厚さ約5cmごとに設定採取された試料のうち、9点を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。

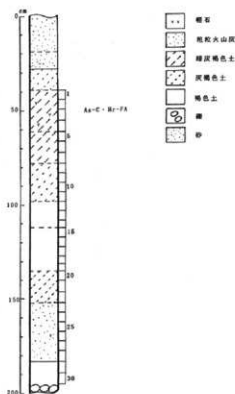


図1 1区西壁の第1地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

4) 実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。試料27には、細かく良く発泡した細粒の白色軽石（最大径1.1mm）が少量含まれている。試料21には、比較的良く発泡した細粒の灰色軽石（最大径1.1mm）が含まれている。試料9にも、比較的良く発泡した細粒の灰色軽石（最大径1.3mm）が含まれている。試料6より上位では、スポンジ状に良く発泡した灰白色軽石（最大径2.6mm）が認められる。これらの試料の中では、試料4や試料2により多く含まれている。試料4や試料2には、さほど発泡が良くない白色軽石（最大径4.1mm）が比較的多く含まれている。

一方火山ガラスは、いずれの試料からも検出される。検出される火山ガラスは軽石型で、前述の軽石の細粒物のほかには、とくに特徴的な火山ガラスの顕著な濃集層率は認められない。

4. 考察

1区西壁の深掘第1地点において検出されたテフラ粒子のうち、スポンジ状に良く発泡した灰白色軽石と、さほど発泡が良くない白色軽石については、その岩相から、順に3世紀終末～4世紀初頭に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As-C、荒牧、1968、新井、1979、友廣、1988、若狭、2000）と、6世紀初頭に標名火山から噴出した標名二ツ岳洪川テフラ（Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992）や6世紀中葉に標名火山から噴出した標名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP、新井、1962、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992）に由来すると考えられる。標名系のテフラについては、本遺跡の位置とテフラの分布関係から前者に由来する可能性がより高いと思われる。これらのテフラの降灰層率は、いずれも試料4や試料2が採取された土層中であると推定される。

5. 小結

矢部遺跡において、地質調査とテフラ検出分析を行った。その結果、下位より浅間C軽石（As-C、3世紀終末～4世紀初頭）、標名二ツ岳洪川テフラ（Hr-FA、6世紀初頭）などのテフラ層やそれらに由来するテフラ粒子を検出できた。

文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
 荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質。地質研報, no.45, 65p.
 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
 坂口 一 (1986) 標名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
 早田 勉 (1989) 6世紀における標名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.
 友廣哲也 (1988) 古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石。群馬県地蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p.325-336.
 若狭 徹 (2000) 群馬の弥生土器が終わるとき。かみつけの里博物館編「人が動き・土器も動く・古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

表1 矢部遺跡1区におけるテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態 色調	
西壁・深掘第1	2	**	白, 灰白	4.1, 2.3	**	ps	白, 灰白
	4	**	白, 灰白	2.4, 2.6	**	ps	白, 灰白
	6	*	灰白	2.0	*	ps	灰白
	9	*	灰	1.3	*	ps	灰, 透明
	13	-	-	-	*	ps	透明, 白
	17	-	-	-	*	ps	透明, 白
	21	*	灰	1.1	*	ps	透明, 灰
	27	*	白	1.1	*	ps	白
	30	-	-	-	*	ps	透明

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない, -: 認められない。
 最大径の単位は, mm。hs: パズル型, ps: 軽石型。

II. 矢部遺跡における植物珪酸体（プラント・オパール）分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。

2. 試料

分析試料は、1区2面の高状遺構から採取された2点、および1区西壁の深掘第1地点から採取された5点の計7である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5}g ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマガサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山, 2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）

〔イネ科—タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科—その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

はめ絵バズル状（ブナ科ブナ属など）、その他

5. 考察

（1）稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 1区2面

畝状遺構（試料1、2）について分析を行った。その結果、イネはいずれの試料からも検出されなかった。

2) 1区西壁深掘第1地点

灰色砂質土（試料1）から暗灰褐色土（試料5）までの各層について分析を行った。その結果、As-C・Hr-FA混層（試料4）からイネが検出された。イネの密度は1,900個/gと比較的低い値であるが、上位層単ではまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

（2）イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にも、ムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。また、キビ族型にはヒエ属やエノコログサ属に近似したものも含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畝作物は分析の対象外となっている。

（3）植物珪酸体分析から推定される植生と環境

1) 1区2面

畝状遺構では、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、ネザサ節型などが検出されたが、いずれも比較的少量である。また、ブナ属などの樹木起源も少量検出された。

以上のことから、当時の調査区周辺は、ススキ属やチガヤ属、キビ族、ネザサ節などが生育するイネ科植

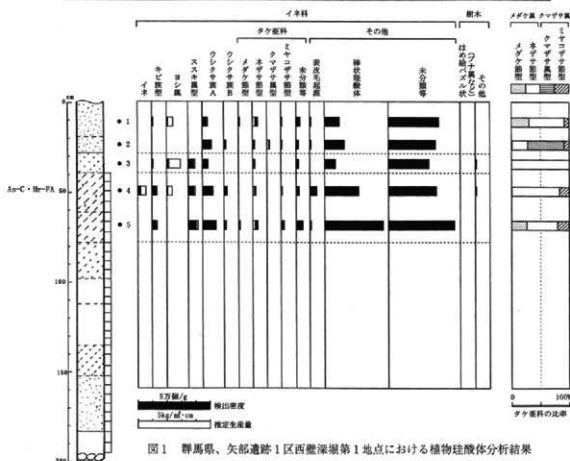
表1 群馬県、矢部遺跡における植物遺体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料		1区西壁				
		1	2	1	2	3	4	5
イネ科	Gramineae (Grasses)							
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)						7	19
キビ類	Panicaceae type	14	7	7		7	32	33
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)			7		15	6	
ススキ属型	Miscanthus type	29	7			37	38	53
ウシタカ属A	<i>Andropogoneae</i> A type	29	27	34	61	37	70	93
ウシタカ属B	<i>Andropogoneae</i> B type	7			14		19	13
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)							
メダケ節型	<i>Phloeoctenon</i> sect. <i>Midake</i>	7		7				7
ネザサ節型	<i>Phloeoctenon</i> sect. <i>Nesasa</i>	29	34	34	14	15	19	33
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyukosane</i>)	7			20			
ミヤコザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyukosane</i>			7	7		6	20
未分類等	Others	29	7	27	14	15	19	45
その他のイネ科	Others							
茎毛起源	Stem hair origin			7	7		45	7
棒状柱胞体	Rod-shaped	100	68	101	136	74	235	410
未分類等	Others	283	170	349	326	280	331	456
樹木起源	Arboreal							
はの絵べん丸状(ブナ属など)	Jigsaw puzzle shaped (<i>Fagus</i> etc.)		14					
その他	Others	7	7				7	6
植物遺体総数	Total	551	348	577	597	486	940	1171

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm)						
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)					0.56
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)		0.43	0.42	0.93	0.47
ススキ属型	Miscanthus type	0.35	0.08		0.45	0.47
メダケ節型	<i>Phloeoctenon</i> sect. <i>Midake</i>	0.08		0.08		0.08
ネザサ節型	<i>Phloeoctenon</i> sect. <i>Nesasa</i>	0.14	0.16	0.15	0.07	0.09
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyukosane</i>)	0.05			0.15	
ミヤコザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyukosane</i>			0.02	0.02	0.02

タケ亜科の比率 (%)						
メダケ節型	<i>Phloeoctenon</i> sect. <i>Midake</i>	30		30		26
ネザサ節型	<i>Phloeoctenon</i> sect. <i>Nesasa</i>	50	100	62	27	83
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyukosane</i>)	20			64	
ミヤコザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyukosane</i>			8	9	17



生であったと考えられ、遺跡周辺にはブナ属などの樹木が分布していたと推定される。ススキ属やチガヤ属は日当りの悪い林床では生育が困難であることから、当時の調査区周辺は日当りの良い比較的开かれた環境であったと推定される。

2) 1区西壁深掘第1地点

As-C・Hr-FA混層およびその上下層では、ススキ属型やウシクサ族Aが比較的多く検出され、キビ族型、ネザサ節型、ミヤコザサ節型なども少量検出された。また、部分的にヨシ属や樹木(その他)も検出された。上位の砂層および砂質土では、各分類群とも減少しており、ススキ属型は見られなくなっている。

以上のことから、As-C・Hr-FA混層およびその上下層の堆積当時は、ススキ属やチガヤ属、キビ族、ネザサ節などが生育する日当りの良い比較的开かれた環境であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。また、遺跡周辺には何らかの樹木が分布していたと推定される。

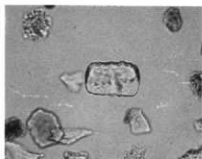
上位の砂層および砂質土の堆積当時は、河川の影響など何らかの原因で、イネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったと考えられる。

6. まとめ

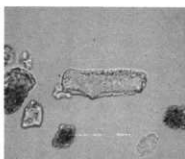
植物珪酸体(プラント・オパール)分析の結果、1区西壁深掘第1地点の浅間C軽石(As-C, 3世紀終末~4世紀初頭)や権名二ツ岳洪川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)とされるテフラ混層では、比較的少量のイネが検出され、稲作が行われていた可能性が認められた。なお、1区2面の島状遺構では、イネ科栽培植物に由来する植物珪酸体は検出されなかった。

文献

- 杉山真二(1987) ケヤキ科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.
藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-。考古学と自然科学, 9, p.15-29.
藤原宏志・杉山真二(1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-。考古学と自然科学, 17, p.73-85.



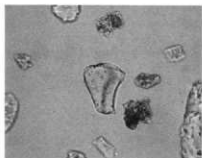
イネ (側面)
1区西壁 4



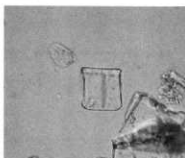
キビ族型
1区西壁 5



ヨシ属
1区西壁 3



ススキ属型
1区西壁 4



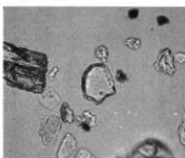
ウシクサ族A
1区西壁 3



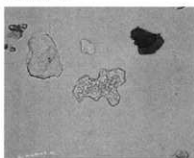
ウシクサ族B
1区西壁 5



ネザサ節型
1区西壁 3



ミヤコザサ節型
1区西壁 1



はめ輪バズル状 (ブナ科ブナ属など)
1区2面 2

植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

———— 50 μm

第2章 群馬県、新島遺跡におけるプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である (杉山, 2000)。

2. 試料

試料は、3区南壁および3区北壁の2地点から採取された計10点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

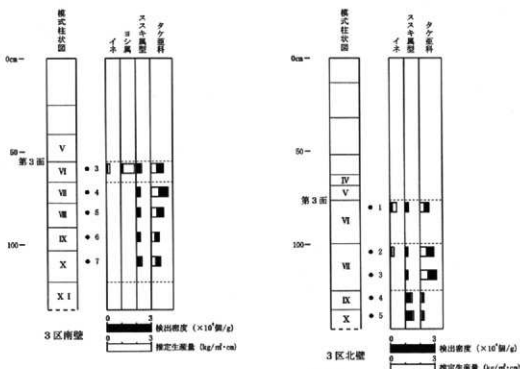


図1 群馬県、新島遺跡におけるプラント・オパール分析結果

3. 分析法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去

6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成

7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5} g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネの換算係数は2.94、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、タケ亜科 (ネザサ節) は0.48である。

4. 分析結果

水田跡 (稲作跡) の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒユ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

表1 群馬県、新島遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: $\times 100$ 個/g)		地点・試料					3区南壁					3区北壁				
分類群	学名	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	8					15	8								
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	15														
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	30	23	23	22	30	22	15	15	38	45					
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i> (Bamboo)	83	113	83	52	60	60	90	106	23	23					
推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm)																
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.22					0.44	0.22								
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	0.95														
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.37	0.28	0.28	0.28	0.37	0.28	0.19	0.19	0.47	0.56					
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i> (Bamboo)	0.40	0.54	0.40	0.25	0.29	0.29	0.43	0.51	0.11	0.11					

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

5. 考察

水田跡 (稲作跡) の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している (杉山, 2000)。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

(1) 3区南壁地点

VI層 (試料3) からX層 (試料7) までの層準について分析を行った。その結果、VI層 (試料3) からイネが検出された。密度は800個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

(2) 3区北壁地点

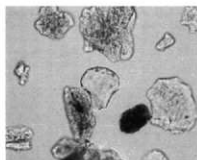
VI層 (試料1) からX層 (試料5) までの層準について分析を行った。その結果、VI層 (試料1) とVII層 (試料2) からイネが検出された。密度は前者で1,500個/g、後者で800個/gといずれも低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、第3面（Ⅵ層上部）では3区南壁と3区北壁の両地点からイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。また、3区北壁のⅥ層でも稲作が行われていた可能性が認められた。なお、いずれもイネの密度が低いことから、稲作が行われていた期間が短かったことや、土層の堆積速度が速かったことなどが想定される。

文献

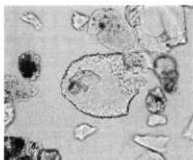
- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール)、考古学と植物学、同成社、p.189-213.
 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(Ⅰ)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―、考古学と自然科学、9、p.15-29.
 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(Ⅴ)―プラント・オパール分析による水田址の探索―、考古学と自然科学、17、p.73-85.



イネ
3区北壁 1



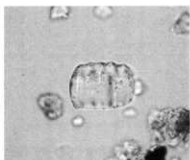
イネ (側面)
3区北壁 2



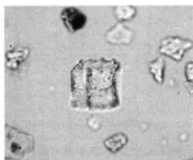
ヨシ属
3区南壁 3



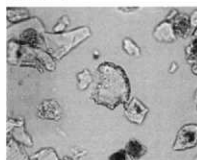
ススキ属型
3区北壁 3



ネザサ節型
3区南壁 3



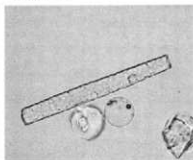
ネザサ節型
3区南壁 7



ミヤコザサ節型
3区南壁 4



表皮毛起源
3区北壁 1



棒状珪酸体
3区北壁 1

植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真 ————— 50 μm

第6篇 考察

第1章 矢部遺跡1区3号溝の洪水層について

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 坂口 一

1 はじめに

矢部遺跡では、北西から南東の方向に走行する複数の溝を確認した(図1)。これらはいずれも近似した方向に走行し、確認した範囲では平面形が直線的で、複数の洪水に由来するシルト層及び砂層で埋没している。

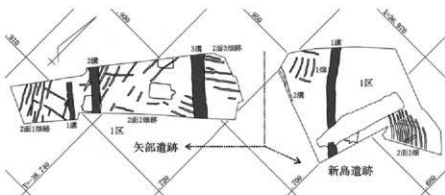


図1 矢部遺跡1区・新島遺跡1区全体図

いずれの溝も、その走行や形態から用水路の可能性が高いが、溝の構築年代を直接的に示す伴出遺物を欠き、詳細な年代は不明である。しかし、覆土中から出土した土器及び溝の基盤層に含まれる示標テフラは、少なくとも洪水層の年代を間接的に示すものと考えられる。

したがって、ここでは3号溝の洪水層と伴出遺物及び、基盤層の示標テフラとの関係を整理し、洪水層の年代についての検討を試みたい。

2 1区3号溝の洪水層と出土土器

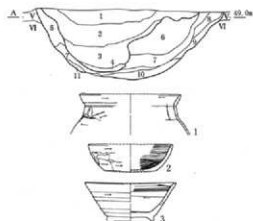


図2 矢部遺跡1区3号溝土層断面図・出土土器

この溝は土層断面による上幅が3.0m、下幅1.3m、深さ1.1mで、断面形は全体に緩やかな船底状を呈す(図2)。複数の洪水に由来するシルト層及び砂層で埋没しているが、その主なものはNo3・4・6・7層である。これらはおそらく一連の洪水か、或いは比較的近似した時期の洪水に由来する堆積物と推定され、No4層には多量の礫を含んでいる。また、No6・7層には褐色軽石を含んでおり、この軽石は3.2万年前に位置付けられる赤城-鹿沼テフラ(Ag-KP)と、4.5万年前の赤城-湯ノ口軽石(Ag-UP)に由来する可能性が高い⁽¹⁾(早田, 1996)。

一方、この洪水層の上位に位置するNo1層中からは、土師器の甕、黒色土器の坏、須恵器の碗が出土している(図2)。これらは「コ」の字状を呈す土師器の甕の口縁部の様相や、体部が直接的に立ち上がり、比較的しっかりとした高台が付く須恵器の碗の特徴から、坂口・三浦編年(坂口・三浦, 1986)のIX-X段階に相当する9世紀後半の所産と考えられる。

3 洪水砂層の年代

前述のように、3号溝の構築年代を直接的に示す伴出遺物は皆無である。但し、この溝は基本土層のV層以上から掘り込まれている。一方、V層より下位のⅧ層には、浅間C軽石（As-C）粒及び、榛名山二ツ岳降下火山灰（Hr-FA）に伴う軽石粒を含んでいることから、Ⅷ層はHr-FAの降下年代である6世紀初頭以降に形成された層と認定できる。したがって、この溝の構築年代は少なくとも6世紀初頭以降で、9世紀後半以前に位置付けられる。さらに、溝の切り込み面がⅧ層より上位にあることを考え合わせると、おそらくこの溝の構築年代は9世紀を前後する年代の所産であると推定される。

さて、以上の前提が正しいとすれば、この溝を被覆するNo3・4・6・7層の洪水層は、9世紀後半以前の比較的近い年代に想定することができ、これは赤城山麓で確認されている弘仁9年（818）年の地震（内田、1991）に起因する洪水層の可能性がある。

4 洪水層中の褐色軽石について

前述のように、この洪水層中には赤城一鹿沼テフラ（Ag-KP）と赤城一湯ノ口軽石（Ag-UP）に由来する可能性が高い褐色の軽石を含んでいる。同様な軽石を洪水層中に含む溝は他にも認められ、特に2号溝の洪水層中に検出した同様な軽石は、厚さ5cmの洪水を起源とするシルト層中に多量に認められた。

2号溝は上幅2.7m、下幅80cm、深さ1.1mで、複数の洪水に由来するシルト層及び砂層で埋没している（図3）。特徴的なのは黄褐色のシルトを主体とするNo4・5層である。これらはおそらく一連の洪水に由来する堆積物と推定され、特にNo5層には多量の褐色軽石を含んでいる。

一方、この軽石を含む洪水層の下位にあたるNo6層の洪水層中からは、土師器の坏・高坏の破片が出土している（図3）。これらは破片資料であることから詳細な年代は不明であるが、坏の様相からおそらく7世紀代の所産と考えられる。したがって、この洪水層の年代は7世紀代の可能性があり、No4・5層の洪水層はその直上に位置することから、おそらく7世紀からそう長い年月を経た年代である可能性は低い。したがって、この洪水層は先述の3号溝の洪水とは異なる年代のものである可能性が高いが、いずれにしても洪水層中に褐色の軽石を含んでいることは共通している。

5 まとめ

以上、矢部遺跡で確認した主として3号溝の洪水層は、弘仁9年（818）年の地震に起因する洪水に伴った堆積物の可能性があり、それは遺跡の北側を東流する矢場川から用水路を通じてもたらされた可能性が高い。但し、洪水層は複数のものが存在することから、これらの洪水層を確定し、その年代と起源を詳細に検討する必要がある。さらに、洪水層中に含まれる軽石はAg-UPの可能性があり、今後はその確かな同定と、それが洪水層中に含まれる原因についての検討が必要であるものと考えられる。

〔註〕

(1) 軽石の同定については、早田勉氏（古環境研究所）よりご教示を頂いた。但し、高精度の同定のためには、屈折率測定などの分析を必要とする。

〔引用文献〕

坂口 一・三浦京子 1986 「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究』PP18-55 群馬県

内田憲治 1991 「資料集 赤城山麓の歴史地質」新里村教育委員会

早田 勉 1996 「関東地方～東北地方南部の示権テフラの諸特徴」一併に御台第1テフラより上位のテフラについて-『若古屋大学加速器質量分析計業績報告』pp256-267名古屋大学年代測定資料研究センター

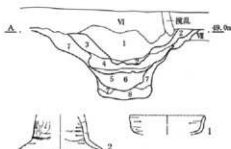


図3 矢部遺跡1区2号溝土層断面・出土遺物

第2章 矢部遺跡・新島遺跡における竪穴住居の変遷について

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 坂口 一

1 はじめに

矢部遺跡・新島遺跡においては、古墳時代から平安時代の10軒の竪穴住居を検出し、一部に弥生時代の土器を確認した。従来、この遺跡の周辺では発掘調査例が少なく、集落の動向については不明な点が多かった。今回の調査においても、道路の拡幅という事業上の性格から調査は狭い範囲に限定されたもので、確認した竪穴住居も僅かではない。しかし、これらはこの地域における集落動向の一端を示していると考えられる。

したがって、ここではこの遺跡の竪穴住居から出土した土器を編年した上で、これに基づく集落の動向の一端について検討してみたい。

2 竪穴住居出土土器の分類

矢部遺跡・新島遺跡の竪穴住居から出土した土器のうちで、その組成が良好であった一括遺物と考えられる土器群は以下のように分類される。

I類 新島遺跡3区3号住居(図1)

破片資料のみで器形及びその組成などの詳細は不明であるが、地文の縄文を施文後に沈線(No1)。但し、この住居は竪を伴うことから、この土器はこの住居に伴うものではない。

II類 矢部遺跡1区3号住居、新島遺跡1区1号住居・3区2号住居(図2)

土師器坏は①体部と口縁部を面す弱い段差から外反する口縁部に至り、口縁部外面に弱い稜線をもつもの(No2・3)、②体部と口縁部を面す強い稜線から外反する口縁部に至り、内面に笥研磨と黒色処理を施すもの(No4・5)、③丸い体部から口縁部がやや内彎するもの(No6)の3種類に分けられ、口径は11~12cmと小形である。

土師器甕は①膨らみの少ない胴部から、外彎する口縁部に至る長胴のもの(No7)、②大きく膨らんだ胴部から、外反する口縁部に至る短胴のもの(No8・9)の2種類に分けられる。

この他に短頸の土師器小形甕(No10)と、これに台が付く器種(No11)が存在する。

III類 矢部遺跡1区2号住居(図3)

土師器坏は①体部と口縁部を面す弱い段差から、直立気味の短い口縁部に至るもの(No12~14)、②浅い体部から高く外反する口縁部に至り、口縁部外面に僅かな稜線をもつもの(No15)の2種類に分けられ、いずれも口径は10~11cmで、II類に比較してさらに小形である。

土師器甕は膨らみの少ない胴部から、外彎気味の口縁部に至る長胴を呈す(No16・17)。

この他に小形の土師器瓶(No18)、須恵器の高盤(No19)が存在する。

IV類 矢部遺跡1区1号住居・4区1号住居(図4)

土師器甕は胴部上位に膨らみをもち、弱い「コ」の字状の口縁部を呈す(No26~30)。この他におそらく小形の台付甕と考えられる甕が存在する(No31)。

須恵器坏は体部が直線的に大きく外反し、底部は回転糸切りで切り離す(No20~22)。須恵器甕も体部が直線的に大きく外反し、断面形が三角形の低い高台を付す(No23)。

黒色土器坏は轆轤整形を施すものと(No24)、施さないもの(No25)の2種類が存在し、いずれも僅かな膨らみをもつ体部から、口唇部が僅かに外反する口縁部に至り、内面には笥研磨と黒色処理を施す。



图1 I類土器 (1:新島遺跡3区3住)

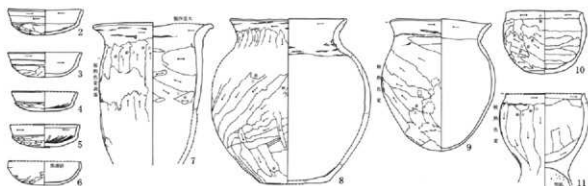


图2 II類土器 (2·5·10:矢部遺跡1区3住、3·8·9:新島遺跡1区1住、4·6·7·11:新島遺跡3区2住)

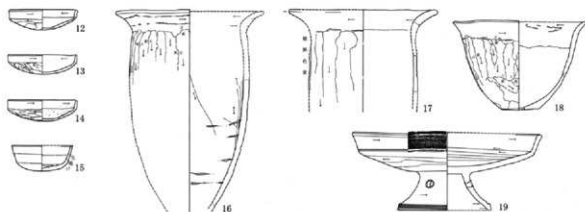


图3 III類土器 (12~19:矢部遺跡1区2住)

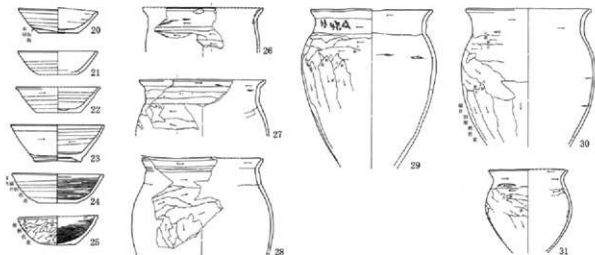


图4 IV類土器 (22·27·29·31:矢部遺跡1区1住、20·21·23·26·28·30:矢部遺跡4区1住)

3 分類の年代比定

ここで、Ⅰ～Ⅳ類に分類した土器群の年代的な位置付けを試みたい。まずⅠ類の土器は、県下ではまだ類例が少ないものの、栃木県の南部に分布する御新田式に近似し、太田市・向山遺跡ではこれに近似した土器に竜見町式土器が伴している。したがって、その様相は未だ不明な点が多いものの、弥生時代中期後半に位置付けられる可能性が高い。

Ⅱ類は、小形で体部と口縁部を画す弱い段差から、外反する口縁部に至る土師器坏及び、膨らみの少ない胴部から、外彎する口縁部に至る長胴を呈す土師器甕の様相が、坂口編年（坂口，1986）のⅤ～Ⅵ段階に相当するものと考えられる。したがって、7世紀前半に位置付けられる。

Ⅲ類は、小形で体部と口縁部を画す弱い段差から、直立気味の短い口縁部に至る土師器坏及び、膨らみの少ない胴部から、外彎気味の口縁部に至る長胴の土師器甕の様相が、坂口編年のⅨ～Ⅹ段階に相当するものと考えられる。したがって、7世紀後半に位置付けられる。

Ⅳ類は、胴部上位に膨らみをもち、弱い「コ」の字状の口縁部を呈す土師器甕、体部が直線的に大きく外反し、底部を回転糸切りで切り離した須恵器坏、体部が直線的に大きく外反し、断面形が三角形状の低い高台を付した須恵器碗の様相が、坂口・三浦編年（坂口・三浦，1986）のⅨ～Ⅹ段階に相当するものと考えられる。したがって、9世紀後半に位置付けられる。

但し、同定に用いた坂口編年及び坂口・三浦編年は、県央部の資料を基にして組み立てられている。矢部遺跡・新島遺跡が位置する県東部では、土器の様相が県央部とはやや異なる部分があることから、今後年代の検証が必要になるものと考えられる。

4 集落の動向

前章では、矢部遺跡・新島遺跡の竪穴住居から出土した土器群の分類と編年を試みた。これに基づけば、この遺跡における集落の出現は、弥生時代中期後半に遡る。但し、この年代の住居は未確認で、土器についても未だ不明な点が多く、今後の類例の増加を期待したい。

次に集落が出現するのは、弥生時代後期から古墳時代中期までの空白期を挟んで、古墳時代後期の7世紀代である。その後、再び8～9世紀前半の空白期を挟んで、平安時代の9世紀後半から集落が出現している。9世紀後半に継続する10世紀代の竪穴住居の検出例はないが、新島遺跡の遺構外から、坂口・三浦編年のⅩⅠ段階に相当すると考えられる羽釜が出土していることから（図5）、おそらくこの集落は10世紀の前半代まで継続する可能性が高い。



図5 遺構外出土の羽釜

この遺跡における集落の動向を整理すると、以上のような変遷を辿ることが確認できた。但し、この遺跡の東側約500mに位置する北関東自動車道に伴う道原遺跡では（図6）、古墳時代前期の方形周溝墓と竪穴住居、古墳時代終末期の円墳などが発掘調査されている（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団，2005）。古墳時代前期の方形周溝墓と竪穴住居は、新しい段階に属すS字状口縁台付甕を伴うことから4世紀後半に、終末期の古墳は主体部が剛張りをもつ横穴式石室で、埴輪が全く出土していないことから7世紀代にそれぞれ位置付けられている。

道原遺跡における4世紀後半の方形周溝墓と竪穴住居は、矢部遺跡・新島遺跡における空白期の一部を埋める年代である。また、7世紀代の古墳は、矢部遺跡・新島遺跡における集落に平行した年代の墓域である可能性が高い。したがって、矢部遺跡・新島遺跡及び道原遺跡の周辺における古墳時代以降の集落は、今の



図6 矢部遺跡・新島遺跡及び道原遺跡位置図

ところ前期の4世紀代から出現して、5・6世紀代の空白期を経た後、7世紀代に再び出現する。さらに、8世紀代の空白期を経た後、9世紀代から三たび出現して、これは10世紀の前半代まで継続している可能性が高いものと考えられる。

なお、矢部遺跡・新島遺跡においては8世紀代の可能性のある竪穴住居が出土しているが、良好な一括遺物を欠いている。これが確実に8世紀代であるとすれば、7世紀代に出現した集落は、8世紀代まで継続することになる。

5 おわりに

矢部遺跡・新島遺跡の竪穴住居から出土した土器の編年に基づいて、この遺跡周辺の集落の動向について検討してきた。近年、北関東自動車道に伴う発掘調査では、この地域における古墳時代以降の大規模な集落遺跡が発見されている。したがって、今後はこれらの資料に、一部の遺跡で検出されている水田も含めて詳細に検討することで、この地域の集落の動向が明らかになるものと考えられる。

また、前述のように、矢部遺跡・新島遺跡が位置する県東部では、土器の様相が県央部とはやや異なる部分があることから、この地域での土器編年を確立する必要があり、この編年が集落の動向を検討するための基礎的な資料になることは言を俟たない。

〔註〕

- (1) 向山遺跡の発掘調査を担われた深澤敦仁氏及び、大木伸一郎氏（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）よりご教示を頂いた。
- (2) 調査担当者である柏木一男・柿沼弘之氏（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）から、平成17年度の道原遺跡では古墳時代に属す2面の水田が発掘調査されている旨のご教示を頂いた。

〔引用文献〕

- 坂口 一 1986 「古墳時代後期の土器の編年」『群馬文化』208 群馬県地域文化研究協議会
 坂口 一・三浦京子 1986 「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究』P18-55 群馬県
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005 「道原遺跡」『平成16年度実績報告 北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域埋蔵文化財発掘調査事業』

第3章 土地利用の変遷 —新島遺跡3区を中心として—

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 藤巻 幸男

1 はじめに

新島遺跡では、特に矢場川に面した3区で古代の田畠が数多く確認された。この田畠の大半は河川氾濫に伴う洪水堆積物の被覆・介在によって識別ができたもので、本地域の土地利用の一端を垣見ることができた。本事業に伴う発掘調査面積は小さく、確認された遺構数も少ないが、矢場川に面した低地の埋没が進行する過程でどのような土地利用が図られたのかを、新島遺跡3区の調査成果をもとに想定してみたい。

2 遺跡周辺の概要

新島遺跡がある太田市只上町は、渡良瀬川扇状地の扇頂部と扇尖部の間にある。渡良瀬川扇状地は、渡良瀬川が大開々扇状地形成後の完新世につくった新しい扇状地で、現在の五ヶ村用水や休泊堀、あるいは並川や矢場川に、扇状地形成時の流路の名残を留めている。渡良瀬川が現在の流路に落ち着いたのは永祿年間(1558～69)頃だと言われており、古代には新島遺跡が隣接する矢場川が上野と下野の国境であったと考えられている。おそらくは幾筋かの流れに分流していたのであろう。

一方、太田市の遺跡分布状況を観察すると、大開発期にあたる古墳時代前期の集落と古墳の分布は扇尖部から扇端部に集中しており、この地域がいち早く耕地開発されたことがわかる。5世紀代にはこの地域に東国随一の規模を誇る太田天神山古墳が築かれるが、これを支えたのも4世紀代に耕地開発された地区だったようで、本遺跡周辺ではまだ5世紀代のめばしい集落は見つかっていない。ちなみに、本遺跡付近を東西に横断する北関東自動車道に伴って調査された遺跡は、古墳時代後期以後の集落遺跡がほとんどで、この地区が活況を呈してくるのは、東山道駅路が敷設される律令期前後からである。

3 確認された遺構と調査面

本遺跡では、古墳時代から平安時代の住居2軒、堅穴状遺構2カ所、土抗4基、溝2条、水田1面、島6面以上、中世以後の井戸1基、土抗3基、溝2条、河道跡1カ所が確認された。このほかに縄文時代中期後半～後期と弥生時代中期後半の遺物が少量出土しているが、いずれも断片的な資料であり、この間の状況についてはまだ判然としなない。

本遺跡の特色として、古代以降の度重なる河川氾濫堆積物の存在が上げられる。群馬県の平野部を横断する北関東自動車道に伴う発掘調査では、特に高崎・前橋台地で河川氾濫による洪水堆積物で埋没する古代の田畠が数多く確認されたが、太田地区ではその検出例は少なかった。新島遺跡は矢場川に面していることもあって、明瞭な状態で洪水堆積物を確認することができた。しかも浅間山のテフラ(As-C、As-B)や榛名山二ツ岳テフラ(Hr-FA)もろうじて認識できたことから、その年代も大枠で把握することが可能となった。特にAs-B(1108年降下)とHr-FA(6世紀中葉)の間に数多くの洪水堆積物が介在していることから、新島遺跡3区では8面の調査面を設定して発掘調査を実施した。このうち、第1面は中世以後の遺構確認面に相当し、第8面は最終確認面にあたる。第7面はAs-CとHr-FAの混土層下の確認面で、僅かに島の裏跡が認められたが、時期を確定できる材料は見いだせなかった。第2面から第6面はいずれも洪水堆積物に起因する層位の調査面で島が確認されているが、島地表面が検出できた事例はなく、いずれもサク部分の確認にとどまる。サクは、洪水堆積物で埋没するものとそれを掘削するものがあり、なかでも第5面・第6

面では重複する複数の耕作跡が認められた。

4 土地利用の変遷

以上の調査成果と重複関係、及び各遺構の出土物の認定をもとに、以下のような想定が可能である。

7世紀頃、新島遺跡に小規模な集落がつかれる。この地区への進出はこの頃一斉に開始されたようで、対岸の以上深町遺跡や西方の矢部遺跡でも竪穴住居や高床建物が確認されている。集落では竪穴住居の周囲に高があり、矢場川（当時は渡良瀬川の一部）沿いでは度々大水が出て砂が堆積したが、耕作は断続ははさみながらも継続されたようだ（3区第4面～第6面高）。

8世紀頃、本地域に東山道駅路が敷設されるが、それに伴って公的施設の整備、耕地および道水路の整備も進行したと思われる。新島遺跡の周辺でも東西あるいは南北に走行する用水路が数多く確認されており、矢部遺跡では3間×5間柱の高床建物や大井戸が発見されている。新島遺跡の3区第4面の水田と高はこの頃の遺構と考えられ、居住域から生産域へと転換したのであろう。

9世紀初頭に、本地域は大規模な洪水に見舞われる。新島遺跡の田畠はもちろん、周辺遺跡の用水路は悉く洪水砂で埋没している。坂口の検討にもあるように、この洪水は818年に上野国を襲った大地震によるものと考えられる。新島遺跡ではこの災害後に大規模な水路（3区5号溝）が出現するが、この水路は災害復旧を目的として開削された可能性が高い。上幅5m以上、深さ2m以上の大規模用水路で、調査区中央部で



東西方向から南北方向に直角に折れ、調査区南側の現在の畑地の区画に沿って直進していたと考えられる。用水路の両側には畠地が広がっているが、その後も小規模な氾濫は続いたようだ（3区第2面～第3面）。この用水路も間もなく河川氾濫で埋没するのだが、大規模災害を復旧する当初の目的は十分に達成したのであろう。3区5溝では底面付近から9世紀後半代の土器が出土しており、埋没土上面には浅間B軽石（1108年降下）が厚く堆積している。ただし、浅間B軽石は平坦部では削平されてほとんど残っておらず、その後の様子を語るものは、中世以後の僅かな遺構のみである。

〔参考文献〕

- 梅澤重昭 1996「第一章～第六章」『太田市史通史編 原始古代』太田市
澤口 宏 1996「第一章第五節～第九節」『太田市史通史編 自然』太田市
財団法人 群馬県歴史文化財調査事業団 2005『年報24 平成16年度の事業概要』



渡良瀬川と遺跡遠望 北西



新島遺跡2区2面堀跡 上が北西



新島遺跡3区3面 上が東



新島遺跡3区3面水田跡ほか 上が北



新島遺跡3区3面畑跡ほか 上が北



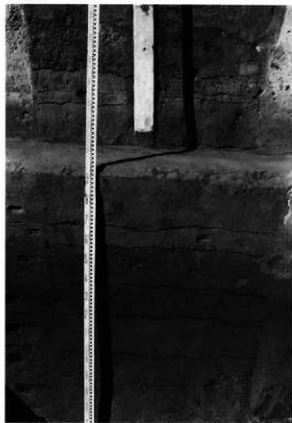
新島遺跡3区6面畑跡 上が南西



新島遺跡3区6面全景 北東



矢部1区3面全景 北



矢部1区深掘トレンチ第1地点 南東



矢部1区深掘トレンチ第2地点 南東

写真园版 4



矢部1区1住全景 南



矢部1区1住竈全景 南



矢部1区1住遺物出土状態 西



矢部1区1住竈構築面全景 南



矢部1区2住全景 南



矢部1区2住構築面全景 南



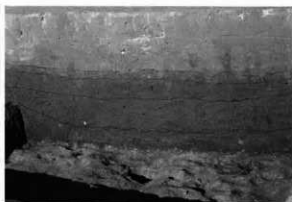
矢部1区2住竈全景 南



矢部1区2住竈近景 南



矢部1区2住遺物出土状態 南



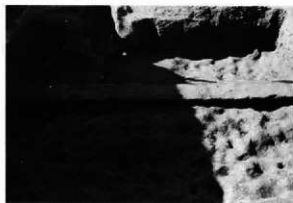
矢部1区2住構築面土層断面 東



矢部1区2住竈構造土層断面 東



矢部1区3住全景 北



矢部1区3住構築面土層断面 北



矢部1区3住竈全景 北



矢部1区3住遺物出土状態 北



矢部1区3住竈構築面全景 北



矢部1区1畑全景 西



矢部1区2畑全景 北西



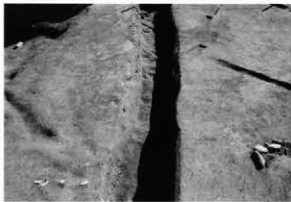
矢部1区3 堀全景 西



矢部1区石組 北



矢部1区石組 西



矢部1区1 溝全景 西



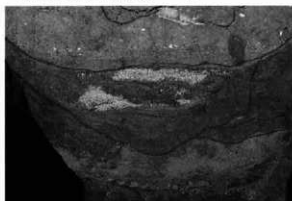
矢部1区1溝西壁土層断面 東



矢部1区2溝全景 西



矢部1区2溝西壁土層断面 東



矢部1区2溝西壁土層断面 東



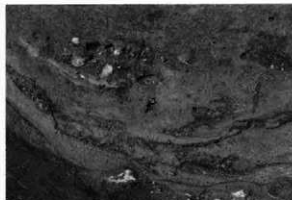
矢部1区2溝全景 西



矢部1区3溝全景 西



矢部1区3溝西壁土層断面 東



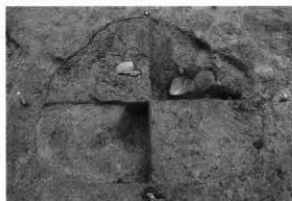
矢部1区3溝西壁土層断面 東



矢部2区1住構築面全景 南



矢部2区1住構築面全景 南



矢部2区1住構築面全景 南



矢部2区1住構築面全景 南



矢部2区1畝連続土层断面 南



矢部2区1畝土層断面 南西



矢部2区1畝土層断面 南西



矢部2区1溝全景 西



矢部2区1溝全景 西



矢部2区1溝土層断面 西



矢部2区深掘トレンチ 西



矢部2区深掘トレンチ東壁 西



矢部3区1面全景 南



矢部4区3面全景 南



矢部3区1溝全景 西



矢部4区1住全景 南



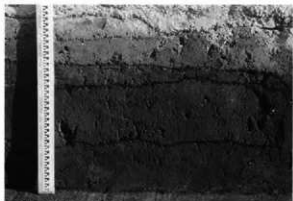
矢部4区1住遺物出土状態 西



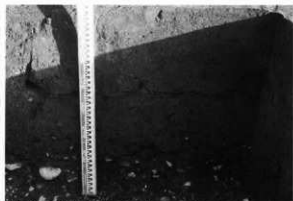
矢部4区1住遺全景 西



矢部4区1住遺遺物出土状態 北



矢部4区第1深掘トレンチ 西



矢部4区第1深掘トレンチ 西



矢部5区1面全景 北



矢部5区2面全景 北



矢部5区深掘トレンチ西壁 東



矢部5区深掘トレンチ西壁 東



矢部5区深掘トレンチ西壁 東



矢部5区深掘トレンチ西壁 東



矢部6区1面全景 北



矢部6区2面南半全景 北



矢部6区3面北半全景 南



矢部6区1住全景 西



矢部6区1溝全景 東



矢部6区1溝全景 北



矢部6区1溝土層断面 東



矢部7区2面全景 北



矢部7区3面北半全景 北



矢部7区1号溝土層断面 東



矢部7区1溝全景 西



矢部7区2溝全景 西



矢部7区2溝土層断面 西



矢部7区3溝全景 西



矢部7区3溝土層断面 西



矢部8区1面全景 南



矢部8区2面全景 南



矢部8区3面全景 南



矢部9区1面全景 北



矢部9区2面全景 北



矢部9区2面全景 北



矢部9区3面全景 北



矢部9区3面全景 北



矢部9区1住全景 北



矢部9区1住構築面全景 北



矢部10区1面全景 北



矢部10区3面全景 北



矢部10区2面全景 北



新島1区2面全景 南



新島1区1住全景 北西



新島1区1住全景 北西



新島1区1住遺物出土状態 西



新島1区1住遺物出土状態



新島1区2面1畑全景 東



新島1区2面1畑土層断面 東



新島1区2面1畑土層断面 東



新島1区2面2畑全景 西



新島1区2面2畑土層断面 西



新島1区2面2畑土層断面 西



新島1区3面2畑上層土層断面



新島1区3面2畑上層土層断面



新島1区2面1溝全景 西



新島1区2面1溝全景 西



新島1区2面1溝土層断面 東



新島1区2面2溝全景 西



新島1区2面2溝土層断面 東



新島3面2トレンチ全景 西



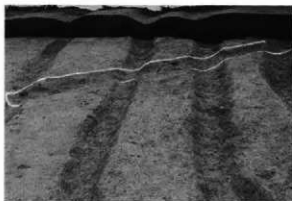
新島2区1面畑跡全景 西



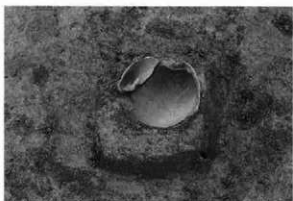
新島2区1面畑跡全景 北



新島2区2面全景 北西



新島2区2面全景 西



新島2区1面～2面2畑跡中の遺物出土状態 西



新島2区3面畑跡全景 北



新島2区3面畑跡全景 北西



新島2区3面畑跡全景 北西



新島2区3面畑跡全景 西



新島2区3面畑跡全景 北



新島3区全景



新島3区2住全景 南東



新島3区2住全景 南東



新島3区2住遺物出土状態 南東



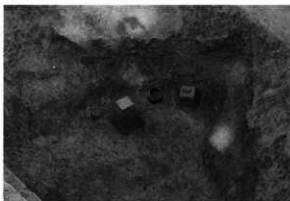
新島3区2住遺物出土状態 南東



新島3区2住礎土層断面A 北東



新島3区2住礎柱方土層断面B 東



新島3区2住床下遺物出土状態 南東



新島3区2住床面遺物出土状態 北



新島3区2住床面遺物出土状態 北



新島3区2住柱穴土層断面 南



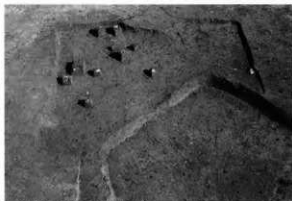
新島3区2住周堤帯部近景



新島3区2住周堤帯部土層断面



新島3区3住全景 南



新島3区3住遺物出土状態 南西



新島3区3住竈 南



新島3区3住竈土層断面 東



新島3区1竪穴全景 北



新島3区1竪穴土層断面 西



新島3区2竪穴全景 北



新島3区2竪穴全景 西



新島3区2面全景 北



新島3区1面東側全景 西



新島3区2面全景 南



新島3区2面遺跡全景 南



新島3区2面細跡全景 東



新島3区2面遺跡近景 南



新島3区2面細跡 南



新島3区3面水田跡全景 北西



新島3区3面水田跡全景 西



新島3区3面東側水田跡全景 北西



新島3区3面水田跡全景 東



新島3区3面水田跡近景 東



新島3区3面水田跡近景 東



新島3区3面水田跡近景 西



新島3区3面畑跡全景 南



新島3区3面水田跡・畑跡 西



新島3区3面水田・畑跡近景 西



新島3区3面畑跡近景 西



新島3区4面畑跡全景 東



新島3区4面畑跡全景 西



新島3区5面畑跡 南西



新島3区5面畑跡近景 南西



新島3区5面洪水砂層範圍 南東



新島3区5面洪水砂層範圍 南東



新島3区5面畑跡近景 南西



新島3区5面の遺物集中 東



新島3区6面畑跡西側全景 南東



新島3区6面畑跡西側全景 南西



新島3区6面畑跡 西南



新島3区6面畑跡 南西



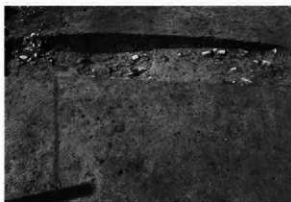
新島3区7面西側全景 南西



新島3区7面畑下のピット群全景 南西



新島3区7面西側全景 南東



新島3区7面2トレンチ西壁土層断面 東



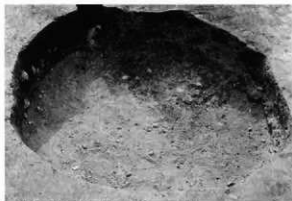
新島3区8面 南



新島3区8面西側全景 南



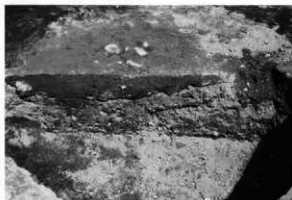
新島3区8面東側全景 東



新島3区1面1井土層断面 東



新島3区1面2井土層断面 北



新島3区1面1井土層断面 南



新島3区1面3溝全景 南



新島3区3溝南壁土層断面溝部分 北



新島3区4溝全景 南



新島3区4溝土層断面・1面細跡 西



新島3区1面4溝土層断面A 南



新島3区1面4溝土層断面B 南



新島3区5溝全景 南西



新島3区5溝全景 南東



新島3区5溝全景 北



新島3区5溝全景 北



新島3区5溝中央部近景 南



新島3区水田跡・畑跡・5溝 西



新島3区5溝西側土層断面 南西



新島3区5溝土層断面A 南西



新島3区5溝土層断面 北東



新島3区5溝土層断面 北東



新島3区5溝土層断面 東



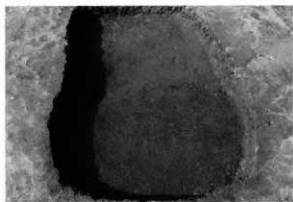
新島3区南壁5溝土層断面 北



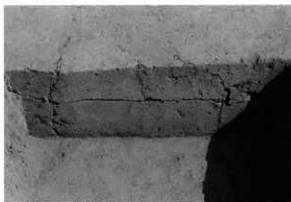
新島3区6溝全景 北



新島3区6溝土層断面 北



新島3区1坑全景 南



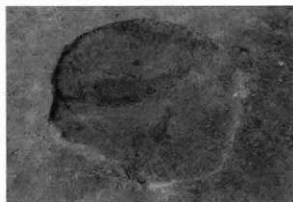
新島3区1坑土层断面 南



新島3区2坑全景 南



新島3区2坑土层断面 南



新島3区3坑全景 南



新島3区3坑土层断面 南



新島3区4坑全景 南



新島3区4坑土层断面 南



新島3区5坑全景 北



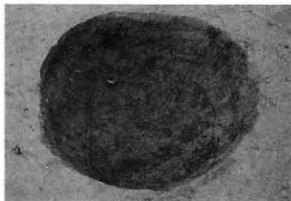
新島3区5坑土層断面 南



新島3区6坑全景 北



新島3区6坑鉄器出土状態 北



新島3区7坑全景 南



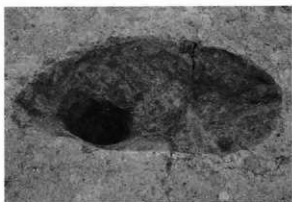
新島3区7坑土層断面 南



新島3区8坑全景 西



新島3区8坑土層断面 南



新島3区9坑全景 西



新島3区9坑土層断面 西



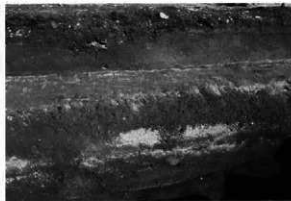
新島3区10坑全景 西



新島3区10坑土層断面 西



新島3区1トレンチ土層断面 西



新島3区1トレンチ土層断面 西



新島3区1トレンチ土層断面 西



新島3区1トレンチ土層断面 西



新島3区2トレンチ土層断面 西



新島3区2トレンチ土層断面 西



新島3区3トレンチ土層断面 南



新島3区4トレンチ土層断面 東



新島3区5トレンチ土層断面 南



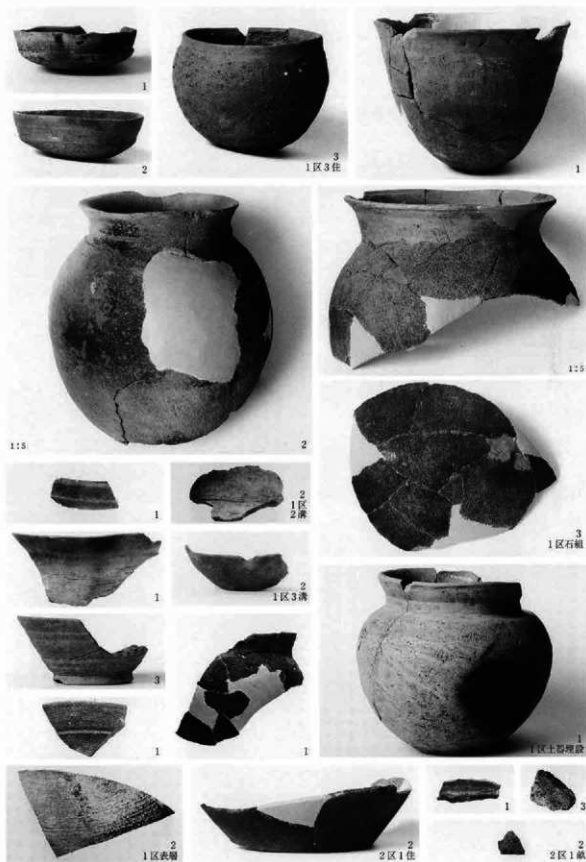
新島3区北壁土層断面 南



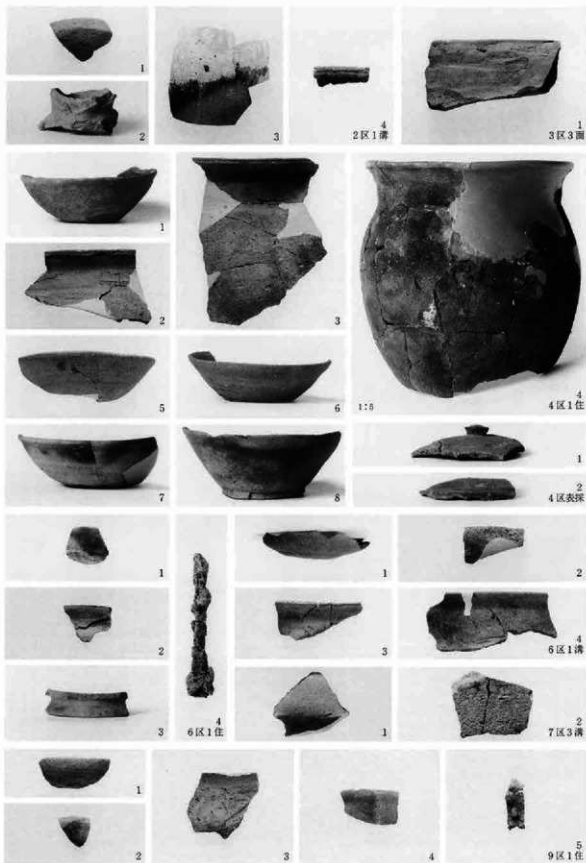
新島3区西壁土層断面 東



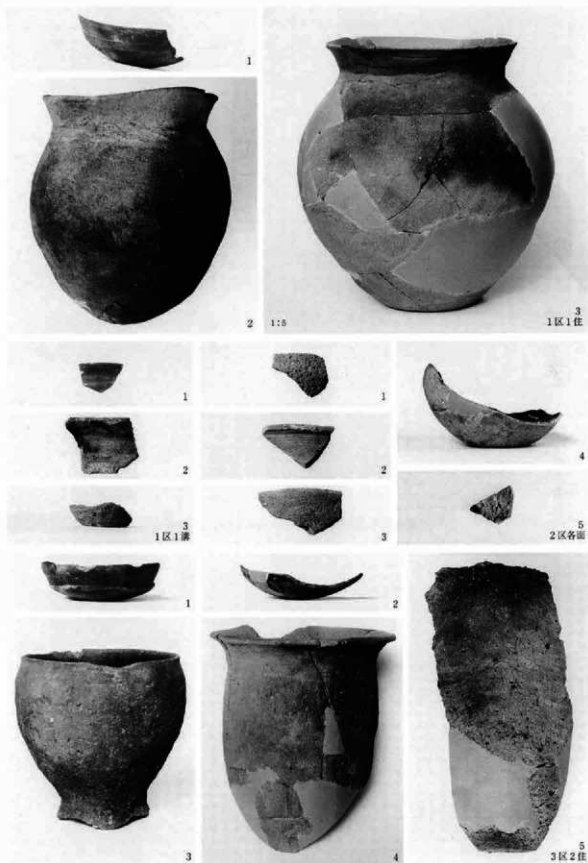
新島3区西壁土層断面 東



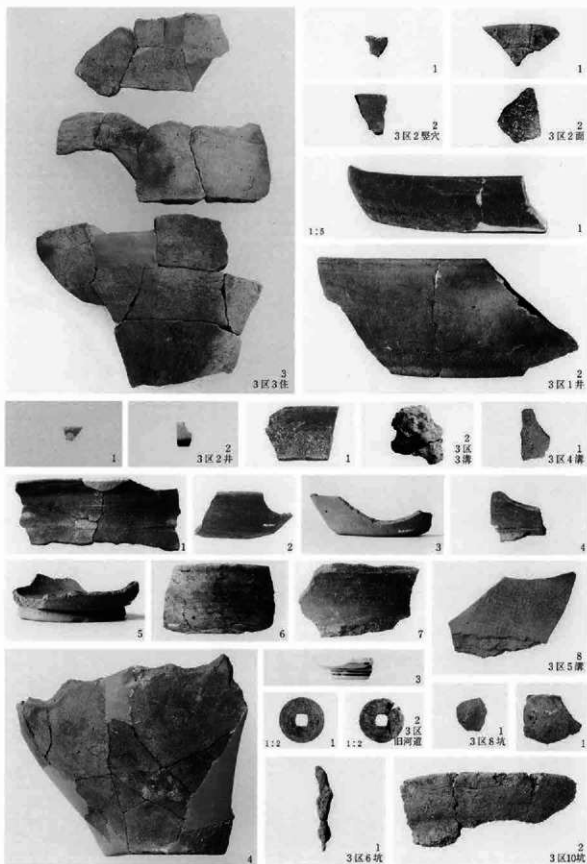
矢部遺跡1区3住・石組・土器埋設・2溝・3溝・表層、2区1住・1缺



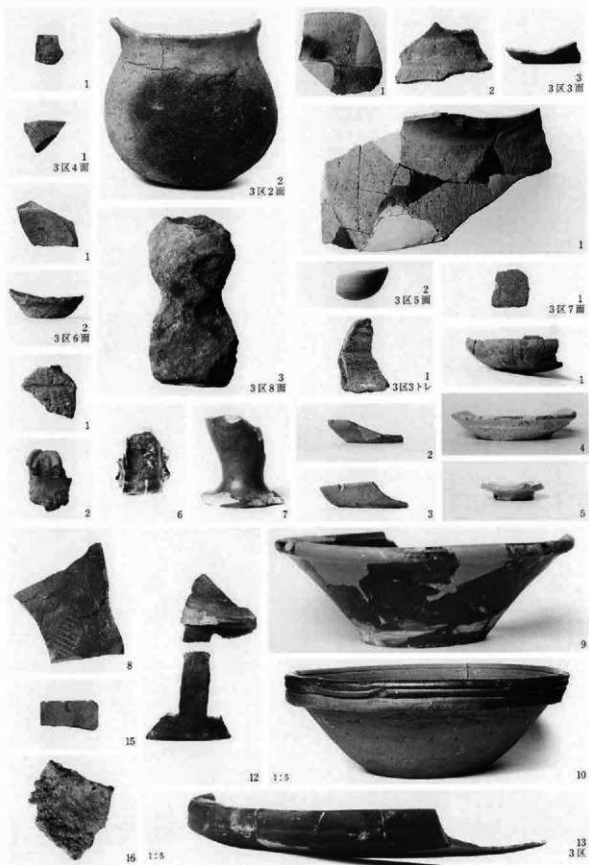
矢部遺跡2区1溝、3区3面、4区1住・表採、6区1住・1溝、7区3溝、9区1住



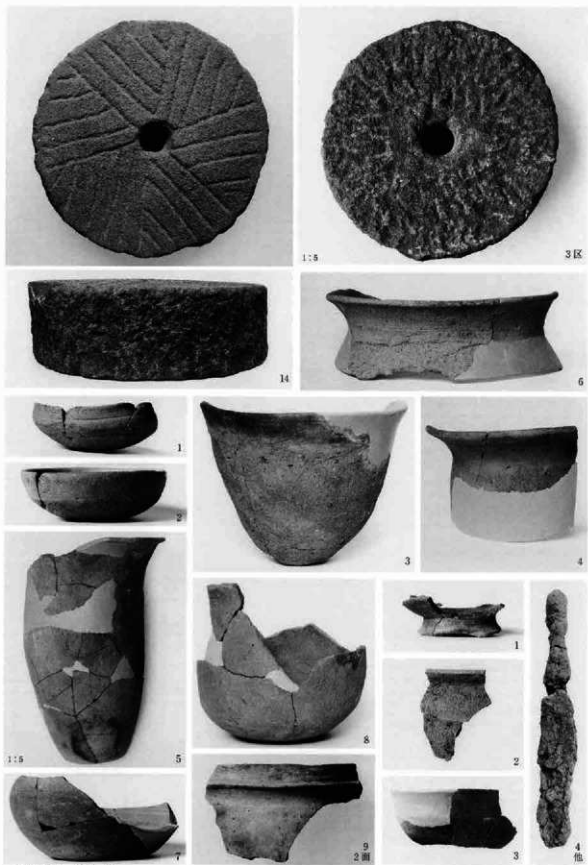
新潟遺跡1区1住・1溝、2区各面、3区2住



新島3区3住・2壑穴・1井・2井・3溝・4溝・5溝・旧河道・6坑・8坑・10坑・3面



新島3区2・3・4・5・6・7・8面・3トレ・3区



新潟3区、2面、他

報告書抄録

書名ふりがな	やべいせき にいじまいせき
書名	矢部遺跡・新高遺跡
副書名	(一) 竜舞山前停車場線緊急地方道路整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	374
編著者名	大江正行
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20060327
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北極町下箱田784-2

遺跡名ふりがな	やべいせき
遺跡名	矢部遺跡
所在地ふりがな	おおたしただかりまち
遺跡所在地	太田市只上町
市町村コード	10205
遺跡番号	
北緯(日本測地系)	36°18'44"
東経(日本測地系)	139°24'16"
北緯(世界測地系)	36°19'55"
東経(世界測地系)	139°23'58"
調査期間	20031201~20040331
調査面積	2841㎡
調査原因	道路建設工事
種別	集落/田畑/その他
主な時代	古墳/奈良平安
遺跡概要	集落-古墳・奈良平安・竪穴住居4+畑-土師器+須恵器+鉄製遺物
特記事項	毎々の洪水埋没の住居と畑

遺跡名ふりがな	にいじまいせき
遺跡名	新高遺跡
所在地ふりがな	おおたしただかりまち
遺跡所在地	太田市只上町
市町村コード	10205
遺跡番号	
北緯(日本測地系)	36°19'49"
東経(日本測地系)	139°25'10"
北緯(世界測地系)	36°20'00"
東経(世界測地系)	139°24'45"
調査期間	20031201~20040331,20040801~20041031
調査面積	3669㎡
調査原因	道路建設工事
種別	集落/田畑/その他
主な時代	古墳/奈良平安
遺跡概要	集落-古墳・奈良平安・竪穴住居3+畑-土師器+須恵器+鉄製遺物
特記事項	毎々の洪水埋没の住居と畑。洪水埋没し周堤帯を伴う住居跡。

群馬県埋蔵文化財調査事業団報告第374集

矢部遺跡・新島遺跡

(一) 電舞山前停車場線緊急地方道路
整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書

平成18年(2006年)3月24日 印刷

平成18年(2006年)3月27日 発行

編集／(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8565 群馬県渋川市北碓町下積田784番地の2

電話0279-52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／上毛新聞社出版局